

刈谷我野遺跡 I

－個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2005.12

高知県 香美郡 香北町教育委員会

刈谷我野遺跡 I

—個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2005.12

高知県 香美郡 香北町教育委員会

序

この報告書は、個人住宅建築に伴い、平成15年秋から継続調査が行われている刈谷我野遺跡における埋蔵文化財発掘調査報告書であります。

この調査により、今から約8800年前の縄文時代早期前葉～中葉にかけての生活址とそれに伴う生活道具が多数検出され、日本列島における西日本の当時の歴史を解明するうえで重要な資料となり、多大な成果をあげることとなりました。

この発掘調査で明らかにされたものは、香北の地における先人が遺してくれた貴重な歴史的文化的遺産であり、調査の成果とそこから導き出された成果を、健全な地域と社会を築いていくための知識及び礎として活かすことが、現代に生き、未来を生きようとする我々に課せられた大きな責任と考えております。

本書が香北の地及び各地に所在する文化財の保存活用に活かされ、また香北の地から発信された学術的資料として学校教育、社会教育などに広く活用頂ければ幸いに存じます。

尚、発掘調査を実施するにあたり、関係者各位より頂いたご指導とご協力に對して、心から深く御礼申し上げます。

平成17年12月

高知県香美郡香北町教育委員会
教育長　岡　村　彰　三

例　　言

1. 本書は、香北町教育委員会が平成15年度に実施した個人住宅建築に伴う刈谷我野遺跡の第1次・第2次発掘調査報告書である。遺構出土物についての報告を行い、包含層出土物は次年度の報告とした。

2. 所在地 高知県 香美郡 香北町太郎丸字後口屋敷721・722

3. 調査面積 750m²

4. 調査体制

平成15年度

香北町教育委員会 教育長 梶原正道

　　教育次長 岡村博公(調査事務)

　　社会教育係長 吉本浩二(調査事務)

　　臨時埋蔵文化財調査員 松本安紀彦

(第二次調査以降 調査担当 平成15年12月1日～)

　　臨時測量員 上田幸正(測量補助 平成15年12月10日～平成16年3月31日)

高知県教育委員会 坂本裕一(第一次調査 調査担当 平成15年10月1日～平成15年11月7日)

東京大学大学院 博士課程 山崎真治(調査補助 平成15年10月15日～平成15年10月24日)

平成16年度

香北町教育委員会 教育長 梶原正道

　　教育次長 岡村博公(調査事務)

　　社会教育係長 日和佐千城(調査事務)

　　臨時埋蔵文化財調査員 松本安紀彦(調査担当)

平成17年度

香北町教育委員会 教育長 梶原正道(～平成17年5月14日)

　　岡村彰三(平成17年5月15日～)

　　教育次長 久保和昭

　　社会教育係長 日和佐千城(調査事務)

　　社会教育係 小松慶久(調査事務)

　　非常勤埋蔵文化財調査員 松本安紀彦(調査事務・調査担当)

5. 調査期間

(1)試掘調査 平成9年2月17日～2月21日(町内遺跡発掘調査事業)

　　平成10年1月20日～3月31日(は場整備事業に先立つ調査)

(2)本調査 平成15年10月6日～平成15年11月7日…第1次調査

　　平成15年12月1日～平成16年1月30日…第2次調査

平成16年5月～6月…第3次調査

6. 本書の執筆及び編集は松本安紀彦が行った。第V章については佛古環境研究所に試料採取及び分析を依頼し、その成果報告書を掲載した。
7. 発掘調査及び整理作業で下記の方々の協力を得た(敬称略)
(発掘調査) 千頭将彦 宗石富恐 出原功 宮本敏夫 武内秀美 山崎祐子 横田壽子
吉川誠喜 吉川徳子 恒石通子 池田壽夫 近森眞稔
(整理作業) 楠瀬法子(平成15年度) 門脇菜乃花 山中美代子(平成16・17年度)
(重機運用・測量) 石川兼人(株式会社 共運工業) 岡本達夫(香北町建設課)
8. 発掘及び報告書作成にあたり、下記の諸氏・諸機関から助言・教示、資料調査のご協力を賜った。ここに記して感謝するものである。(敬称略 五十音順)
泉拓良(京都大学) 岩永哲夫(宮崎県埋蔵文化財センター) 大下明(雲雀学園)
岡本桂典(高知県歴史民俗資料館) 遠部慎(国立歴史民俗博物館) 河瀬正利(広島大学)
木田真・酒井雅代(智頭町教育委員会) 清家章(高知大学)
瀬口眞司(滋賀県埋蔵文化財保護協会) 忽那敬三・島田和高(明治大学博物館)
下條信行(愛媛大学) 多田仁(愛媛県埋蔵文化財センター)
出原恵三・前田光雄・森田尚宏・山本哲也・久家隆芳・坂本憲昭(高知県埋蔵文化財センター)
中越利夫(広島県東城町時悠館) 昌中宏一(追手前高校吾北分校)
原田博志(奈良大学学生) 兵頭勲(愛媛県立歴史文化博物館)
町田勝則(長野県埋蔵文化財センター) 松田直則(高知県教育委員会)
松村信博(朝倉中学校) 丹羽佑一(香川大学) 矢野健一(立命館大学)
山崎真治(佐賀市教育委員会) 大分県教育委員会 大分県野津町教育委員会
大分県九重町教育委員会 高知県教育委員会 (財)高知県埋蔵文化財センター
高知県立歴史民俗資料館 土佐山田町教育委員会 鳥取県智頭町教育委員会
佛古環境研究所 明治大学博物館
9. 方位は磁北である
10. 出土遺物は2003年度については「03-KK」、2004年度については「04-KK」と注記し、関連図面・写真と共に香北町教育委員会で保管を行っている。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯.....	1
第Ⅱ章 遺跡周辺の地理的歴史的環境.....	3
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第Ⅲ章 調査の概要.....	5
第1節 調査区の設定及び調査の方法	
1. 調査区の設定	
2. 調査の方法	
第2節 調査の概要	
1. 基本層序	
2. 包含層及び各検出面の概要	
第Ⅳ章 調査成果.....	11
第1節 4層上面検出遺構	
第2節 5層上面検出遺構	
第3節 6層上面検出遺構	
第Ⅴ章 香北町 剣谷我野遺跡における自然科学分析 (株)古環境研究所	63
第1節 剣谷我野遺跡における火山灰分析	
第2節 剑谷我野遺跡における放射性炭素年代測定	
第3節 剑谷我野遺跡における樹種同定	
第4節 剑谷我野遺跡における種実同定	
第5節 剑谷我野遺跡における植物珪酸体分析	
第VI章 まとめ.....	79
第1節 遺構について	
第2節 遺物について	
1. 剑谷我野遺跡出土の土器について	
2. 剑谷我野遺跡出土の石器について	
第3節 南四国における縄文時代早期の様相について I -総括-	

挿 図 目 次

第1図 香北町位置図.....	1
第2図 町内遺跡位置図.....	2
第3図 基本層序.....	7
第4図 4層上面検出遺構分布図.....	9
第5図 5・6層上面検出遺構分布図	10
第6図 SK11・12遺構図及び出土遺物実測図	11
第7図 SK13・14遺構図	11
第8図 SK15遺構図及び出土遺物実測図	12
第9図 SK16遺構図及び出土遺物実測図	13
第10図 SK17遺構図及び出土遺物実測図	14
第11図 SK19遺構図及び出土遺物実測図	15
第12図 SK20~22、Pit10・18遺構図	16
第13図 遺物集中1遺構図.....	18
第14図 遺物集中1出土遺物実測図①.....	19
第15図 遺物集中1出土遺物実測図②.....	20
第16図 遺物集中1出土遺物実測図③.....	21
第17図 遺物集中1出土遺物実測図④.....	22
第18図 遺物集中2遺構図及び出土遺物実測図.....	23
第19図 遺物集中3遺構図.....	25
第20図 遺物集中3出土遺物実測図①.....	26
第21図 遺物集中3出土遺物実測図②.....	27
第22図 遺物集中4遺構図及び出土遺物実測図①.....	28
第23図 遺物集中4出土遺物実測図②.....	29
第24図 遺物集中5遺構図.....	30
第25図 遺物集中5出土遺物実測図.....	31
第26図 SK1遺構図及び出土遺物実測図①	33
第27図 SK1出土遺物実測図②	34
第28図 SK2遺構図及び出土遺物実測図①	38
第29図 SK2出土遺物実測図②	39
第30図 SK2出土遺物実測図③	40
第31図 SK2出土遺物実測図④	41
第32図 SK2出土遺物実測図⑤	42
第33図 SK2出土遺物実測図⑥	43
第34図 SK2出土遺物実測図⑦	44

第35図	SK 2出土遺物実測図⑧	45
第36図	SK 2出土遺物実測図⑨	46
第37図	遺物集中 6 遺構図及び出土遺物実測図①	48
第38図	遺物集中 6 出土遺物実測図②	49
第39図	SK 4 遺構図及び出土遺物実測図	49
第40図	SK 5 遺構図及び出土遺物実測図	50
第41図	SK 7・24 遺構図	50
第42図	SK28~31・33 遺構図	51
第43図	遺物集中23 遺構図及び出土遺物実測図	53
第44図	SK32 遺構図及び出土遺物実測図	54
第45図	SK34 遺構図及び出土遺物実測図	55
第46図	SK35 遺構図及び出土遺物実測図	56
第47図	SK37 遺構図	57
第48図	SK36 遺構図及び出土遺物実測図	58
第49図	SK25 遺構図及び出土遺物実測図	59
第50図	遺物集中20 遺構図及び出土遺物実測図①	61
第51図	遺物集中20 出土遺物実測図②	62
第52図	遺物集中38 遺構図及び出土遺物実測図	62
第53図	調査区東壁北地点の土層柱状図	67
第54図	調査区東壁南地点の土層柱状図	68
第55図	東壁南地点の火山ガラス比ダイヤグラム	69
第56図	香北町 剣谷我野遺跡東壁北地点における植物珪酸体分析結果	77
第57図	香北町 剑谷我野遺跡東壁南地点における植物珪酸体分析結果	78

表 目 次

第 1 表	東壁南地点の火山ガラス比分析結果	66
第 2 表	剣谷我野遺跡における放射性炭素年代測定(試料と方法)	70
第 3 表	剣谷我野遺跡における放射性炭素年代測定(測定結果)	70
第 4 表	香北町 剑谷我野遺跡における植物珪酸体分析結果	76
第 5 表	出土遺物観察表①	92
第 6 表	出土遺物観察表②	93
第 7 表	出土遺物観察表③	94
第 8 表	出土遺物観察表④	95
第 9 表	出土遺物観察表⑤	96

第10表	出土遺物観察表⑥	97
第11表	出土遺物観察表⑦	98
第12表	出土遺物観察表⑧	99
第13表	出土遺物観察表⑨	100
第14表	出土遺物観察表⑩	101
第15表	出土遺物観察表⑪	102
第16表	出土遺物観察表⑫	103
第17表	出土遺物観察表⑬	104
第18表	出土遺物観察表⑭	105
第19表	出土遺物観察表⑮	106

図 版 目 次

- 図版 1 遺構写真(調査区全体・東壁セクション)
 図版 2 遺構写真(基層・Ⅱ区4層上面遺物集中群検出状況)
 図版 3 遺構写真(遺物集中群検出状況・4層上面出土遺物及び検出状況)
 図版 4 遺構写真(SK11~17完掘状況)
 図版 5 遺構写真(SK21、16・17・22、Pit10完掘状況 5層上面検出状況)
 図版 6 遺構写真(SK 2、5、7、24、28、29完掘状況)
 図版 7 遺構写真(SK30、31、32、33、34完掘状況 遺物集中23検出状況)
 図版 8 遺構写真(SK35、36、25完掘状況 遺物集中20、38検出状況)
 図版 9 遺物写真(SK11、15~17、19)
 図版10 遺物写真(遺物集中1)
 図版11 遺物写真(遺物集中1)
 図版12 遺物写真(遺物集中1)
 図版13 遺物写真(遺物集中1~3)
 図版14 遺物写真(遺物集中3)
 図版15 遺物写真(遺物集中3・4)
 図版16 遺物写真(遺物集中4)
 図版17 遺物写真(遺物集中4・5)
 図版18 遺物写真(遺物集中5・SK1)
 図版19 遺物写真(SK1、2)
 図版20 遺物写真(SK2)
 図版21 遺物写真(SK2)
 図版22 遺物写真(SK2)

- 図版23 遺物写真(SK 2)
- 図版24 遺物写真(SK 2)
- 図版25 遺物写真(SK 2、遺物集中6)
- 図版26 遺物写真(遺物集中6、SK 4、5)
- 図版27 遺物写真(遺物集中23、SK32)
- 図版28 遺物写真(SK34、35)
- 図版29 遺物写真(SK36、25、遺物集中20)
- 図版30 遺物写真(遺物集中20、38)
- 図版31 刈谷我野遺跡の炭化材
- 図版32 刈谷我野遺跡の種実
- 図版33 植物珪酸体(プラントオパール)の顕微鏡写真

付図(別添)目次

4層上面 遺物集中群検出状況図

第Ⅰ章 調査に至る経緯

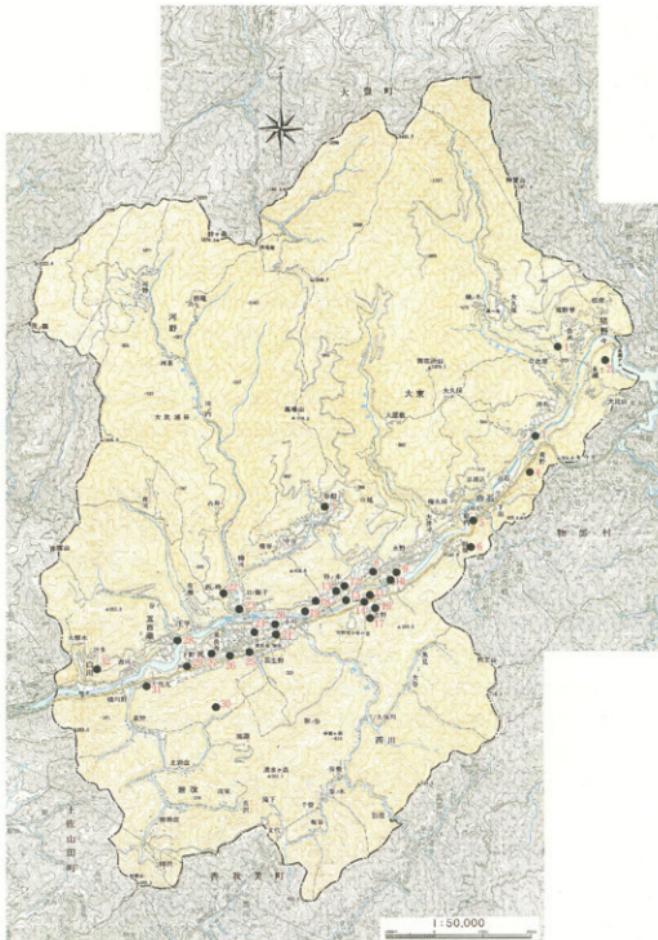
刈谷我野遺跡は旧称・太郎丸遺跡と称し、高知県香美郡香北町太郎丸字後口屋敷に位置する。遺跡下に走る国道195号線の拡張工事が行われた際、多量の遺物の出土が見られたようである。平成8年及び平成10年に香北町教育委員会が高知県教育委員会の指導のもとで試掘確認調査を行い、縄文時代早期及び中世の複合遺跡であることが確認・周知された。とりわけ平成8年の試掘確認調査における「…本格的な調査を実施すれば、かなりの量が埋蔵されている可能性が高い。いずれも主として第4層となる褐色粘質土から出土しており、当時の生活土層面が残存している可能性が高く、本格的な発掘調査の実施に期待がもたれる」という指摘があったのは卓見であった。その後、地域住民より遺跡名変更の声が上がり、「太郎丸遺跡」から「刈谷我野遺跡」へと変更された。

平成15年に個人住宅建築計画が持ち上がり、開発の及ぶ範囲の発掘調査を高知県教育委員会の指導のもとで行ったが、調査を進めるにつれて予想を遥かに上回る規模の遺跡であることが判明した。そのため平成15年10月6日から平成15年11月7日までは高知県教育委員会坂本裕一氏の指導のもとで調査を行い、平成15年12月1日からは香北町教育委員会松本安紀彦が調査担当として現在に至っている。

物部川流域の縄文遺跡は南国市田村遺跡群(中期初頭～後期)、土佐山田町田堀東遺跡(早期ネガティヴ押型文が表採されたという報告があるが、所在は不明)、土佐山田町林田シタノヂ遺跡(中期末～後期初頭)等が知られるのみである。とりわけ縄文時代早期に関しては存在の可能性は極めて小さいものと考えられていたが、本遺跡の調査により物部川の形成した河岸段丘には縄文時代でも古い時期の遺跡が眠っている可能性を考えなくてはならなくなつた。本遺跡から遡ること約3kmの地点に東下タナロ遺跡が存在するが、そこでの表採物を観察するに本遺跡と同時期の遺物が見られ、縄文時代後期～晩期の土器片も観察される。また五百蔵・美良布・朴ノ木・吉野・永野それぞれの河岸段丘に遺跡が存在することから、香北町の河岸段丘は先史時代から人類の活動の舞台となっていたことが窺える。



第1図 香北町位置図



1 猪野城跡	2 永瀬(山本)城跡	3 清瓜城跡	4 嶺城跡	5 府内遺跡	6 横須城跡
7 谷相城跡	8 永野遺跡	9 柳ノ本遺跡	10 永野城跡	11 仁井田遺跡	12 朴ノ木遺跡
13 宮の前遺跡	14 吉野城跡	15 前田の土居遺跡	16 五反田遺跡	17 西の町遺跡	18 大小合遺跡
19 朴ノ木城跡	20 東下タナロ遺跡	21 有光城跡	22 有瀬城跡	23 日ノ御子経塚	24 西オソバ遺跡
25 美良布遺跡	26 中屋敷遺跡	27 東笛岡遺跡	28 五百蔵遺跡	29 堂の前遺跡	30 萩野城跡
31 刈谷我野遺跡	32 白川城跡				

第2図 町内遺跡位置図

第Ⅱ章 遺跡周辺の地理的歴史的環境

第1節 地理的環境

刈谷我野遺跡は香北町太郎丸字後口屋敷周辺に広がる遺跡である。町内を貫流する一級河川・物部川によって形成された左岸最大の河岸段丘である美良布の入り口に立地し、物部川の支流である萩野川が物部川と合流する地点及び町のシンボルである御在所山が山体を現す地点である。

物部川は高知県と徳島県の県境近くの三嶺山系(標高1893m)に源を発し、急峻な山間地を小蛇行を繰り返しながら流れ、中流域においては大小幾つもの河岸段丘を発達させながら、物部村・香北町・土佐山田町と経て、太平洋へ注ぎ込む。これらの河岸段丘は右岸よりも左岸によく発達しているが、これは物部川へ注ぎこむ河川が蛇行を繰り返しながら穏やかに流れているために河岸段丘上に小扇状地が発達しているからである。これは地質が右岸は秩父帯に属するのに対し、左岸は四万十帯に属することに由来する。

物部川の流れは、土佐山田町杉田付近では90度南へ転進すると共に急峻な山間地は終わり、同町神母木付近から川幅を大きく広げて、南国市・野市町に広がる高知平野・香長平野を潤している。この川には江戸時代に野中兼山により山田堰が作られ、用水が開発された。現在の高知平野の穀倉地帯の形成は、この水利工事無くして成り立っていないのであり、野中兼山と工事に携わった民衆の力は高知県発展の礎となったと言えよう。時代が下り、この川は下流域と中上流域を結ぶ交通路としての役割を果たしていたが、治水と発電目的のためダムが建設されたため、その役割を国道に譲った。本来の河床は現在の川面より20mほど下にあると考えられる。

刈谷我野遺跡は上記のような環境で育まれた遺跡であり、萩野川と物部川を支えた豊かな森資源の恩恵を受けたであろう縄文人の遺してくれた貴重な歴史的文化的資産である。

第2節 歴史的環境

香北町内で埋蔵文化財包蔵地として指定されているのは32箇所であり、旧石器時代は永野に位置する永野長岡遺跡が挙げられる。縄文時代になると遺跡数が増え、永野長岡遺跡・仁井田遺跡・東下タナロ遺跡・美良布遺跡が挙げられる。弥生時代の遺跡は刈谷我野遺跡・五百蔵遺跡・堂の前遺跡・東笠岡遺跡・中屋敷遺跡・美良布遺跡・西オソバ遺跡・朴ノ木遺跡・仁井田遺跡・五反田遺跡が挙げられる。

とりわけ美良布遺跡は縄文時代晚期から弥生時代全般を通じて集落を形成しており、継起的に発展したという指摘があるが、縄文時代早期の「葛島式」と考えられた無文土器の出土や同じ時期の表面採集品も確認されていることから、縄文時代でも古い時期の遺構・遺物が埋蔵されている可能性を考慮しなければならない。後述する美良布神社の社宝で重要文化財である2個の突線紐式銅鐸は、神社の南にあったとされる金洞寺に伝わっていたという伝承や、出土したのは五百蔵地区という伝承もある。しかし、どのような経緯で伝わって、いつ美良布神社に納められたものなのかについて

は記録がない。ただ『秦山集』には「押參大川上美良布神社 口占」に2個の銅鐸についての記述があることから、1702年時点では既に大川上美良布神社に納められていたと考えられる。この銅鐸が遠隔地より持ち込まれた可能性を否定して考えるならば、香北町域において所有できる能力を有していたと考えられるのは現段階では美良布遺跡だけである。南四国中央部においては南国市田村遺跡群が大集落として有名であるが、美良布遺跡はそれに次ぐ規模の政治的宗教的に発達した弥生集落であった可能性が考えられる。

古墳時代の遺跡は確認されていない。しかし、弥生時代後期末の土器が刈谷我野遺跡等で確認されており、美良布遺跡では古墳時代の甕が包含層より出土しているため、古墳そのものはないと考えるにしても、古墳造営を支えた人々の集落の存在まで否定するのは早計である。

古代～平安時代は現在のところ確認されていない。しかし「川上様」として知られる大川上美良布神社は平安時代初期の宮中の年中儀式や制度及び律令の施行規則を記した「延喜式」の神名帳に記述のある式内社である。周辺に「川上様」を支えた集落及び豪族の存在がうかがえ、広域的にも栄えていた地域であった可能性も考えられる。

中世～戦国時代にかけての遺跡は豊富であり、大きく分けて集落と平城・山城それぞれの城址に分けられる。前者に関しては府内遺跡・刈谷我野遺跡・五百蔵遺跡・堂の前遺跡・東笠岡遺跡・中屋敷遺跡・美良布遺跡・西オソバ遺跡・宮の前遺跡・朴ノ木遺跡・前田の土居遺跡・仁井田遺跡・五反田遺跡・西の町遺跡・柳ノ本遺跡・大小合遺跡が挙げられ、後者に関しては根須城跡・水野城跡・吉野城跡・朴ノ木城跡・萩野城跡・有光城跡・有瀬城跡・白川城跡・鬱城跡・谷相城跡・清瓜城跡・永瀬城跡・猪野城跡が挙げられる。高知は山城の多い県であり、香北町も例外ではない。これらの城は土佐七雄の一人である山田氏の勢力圏であったが、山田氏滅亡後は長宗我部氏の支配下に収まったという。

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 調査区の設定及び調査の方法

1. 調査区の設定

個人住宅建築に伴い、基礎工事を行う範囲を対象とする発掘調査である。水田区画を遺した状態であったので、それに即して畦畔を境に西区画をI区、東区画をII区として設定した。それぞれの調査区に任意の4mグリッドを設定し、公共座標からそれぞれのグリッド杭に座標値を与えた。

2. 調査の方法

第1次調査においては、耕作土及び床土を重機で剥ぎ取った。その後、遺物が確認できる層まで重機で剥いでから人力掘削に切り替え、包含層一括で遺物を取り上げた。その結果、包含層1一括と包含層2一括の資料が得られている。II区においては包含層2つまり本書における第4層を検出していく途中で、川原石が集中して検出されるようになり、“集石遺構”と認定し、そこを遺構検出面と捉え、精査を行った。遺構及び貴重であると判断された出土遺物については4mグリッドに基づき、S=1/10で平面実測を行った。またI区とII区の境界においてはSK2と称する大形土坑がトレンチによって確認されたため、トレンチにおいて確認した掘り込み面つまり本書における5層まで掘削を行って検出した。その過程でSK1・SK4が検出されたため、掘削を行った。

第2次調査においては、4A層上面で検出された川原石の集中を“遺物集中群”として捉えた。平面実測に従い、個々に番号をつけ、取上げを行った。その後遺構検出を行い、遺構実測は個々の遺構について平面及び断面実測を行い、遺構配置図については遺構の上場を光波で測量し、座標平面図に反映させた。遺物については各層位について個々に出土した地点を記録に残すため、光波取上げを行った。

第2節 調査の概要

1. 基本層序

現在の地表面から遺物包含層までの深さは約25cmである。層序は1～9層に大別でき、その内3～5層が遺物包含層である。遺構の検出は4層上面及び5層上面で見られた。水平堆積を基調とするが、東側から西側へと緩やかに傾斜する。調査にあたっては1・2層、そして3層を遺物が多数確認できるところまで重機で掘削した。

1層…水田耕作土。

2層(灰色 7.5Y5/1)…床土。

3層(黒色 10YR2/1)…遺物包含層である。上層からは弥生時代後期の土器や中近世の陶磁器が出土している。中層から下では縄文時代早期の遺物が多数確認できる。

なお、この層において鬼界アカホヤ火山灰が確認された。いわゆる“クロボク”と言われる層であり、火山灰の土壤化が進んだものである。しまりはそれほど強くなく、粘性は低い。3～5cm大の礫を含む。

4層(黒色 7.5YR2/1)…遺物包含層である。縄文時代早期の遺物が多数確認できる。しまりはやや強く、粘性は低い。1～5mm大の砂粒及び2～4mm大の赤色砂粒(明赤褐 5YR5/6)を多く含む。

5層(黒褐色 10YR3/2)…遺物包含層である。縄文時代早期の遺物が確認できるが、3・4層に比べると少ない。しまりは弱く、粘性は無い。1～3mm大の砂粒を多く含み、6層と4層の混和層として考えられる。

6層(灰黄褐色 10YR4/2)…無遺物層である。しまりは弱く、粘性は無い。2～5mm大の砂粒を多く含む。

7層(黄褐色 2.5Y5/3)…無遺物層である。しまりはやや強く、粘性は無い。2mm大の砂粒を多く含み、8層との混和の可能性が考えられる。

8層(黄褐色 2.5Y5/3)…無遺物層である。シルト質であり、しまりはやや強く、粘性は強い。

9層(灰色 10YR5/1)…無遺物層である。1mm大の砂粒を多く含む。しまりは弱く、粘性は無い。

10層(黒褐色 10YR3/1)…搅乱土層で、2層～4層が混じる。2層に含まれる明黄褐ブロックを含む。

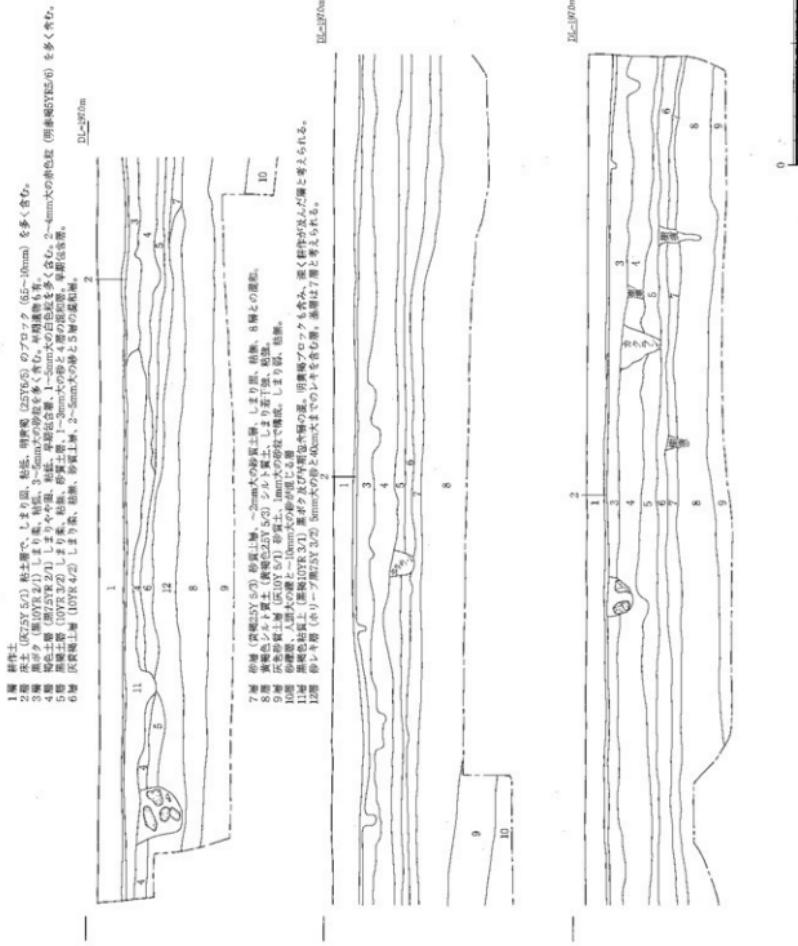
11層(オリーブ黒色 7.5Y3/2)…無遺物層で、5mm大の砂粒と40cm大の岩を含む。

2. 包含層及び各検出面の概要

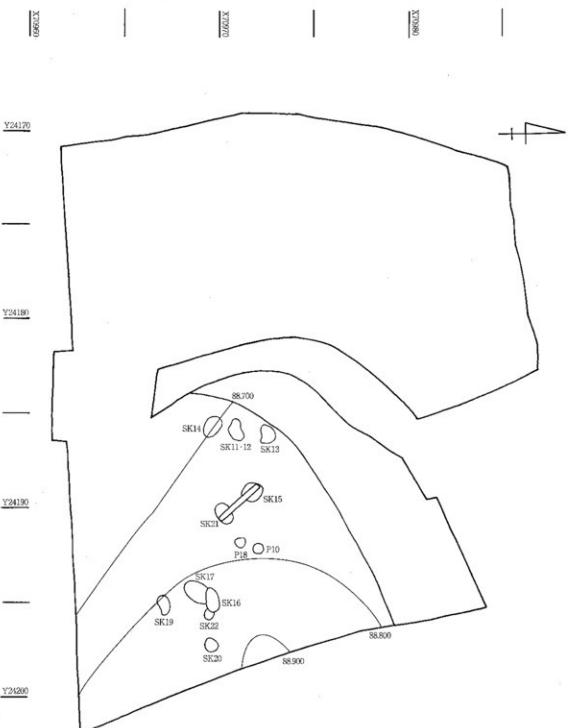
遺物包含層は3～5層であり、3層上部は耕作が及んだ可能性が考えられ、中近世の陶磁器及び弥生土器の遺物が混在している。また3層中部から下部は縄文時代早期の遺物を含む。出土量が一番多いのは3・4層であり、遺構検出面は4層上面及び5層上面であった。

4層上面では土坑11基・ピット2基、5層上面では土坑17基・遺物集中2基が検出された。6層上面では遺物集中が2基検出されたが、いずれも搅乱を受けており、構築年代及び正確な形状については不明である。

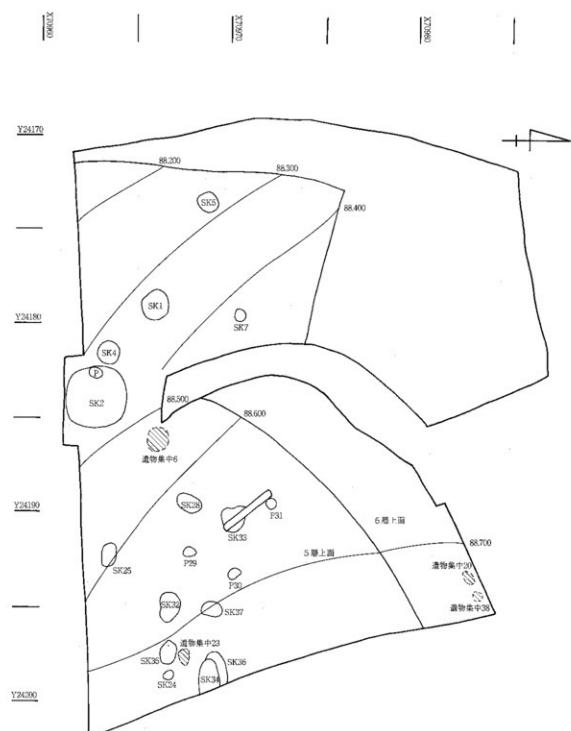
遺構からの出土遺物を見る限り、遺構の大半は4層上面から掘り込まれている可能性が高いが、遺構埋土と包含層の土色が極めて類似しており、遺構検出は慣れないと難しい状況であった。



第3図 基本層序



第4図 4層上面検出遺構分布図



第5図 5・6層上面検出遺構分布図

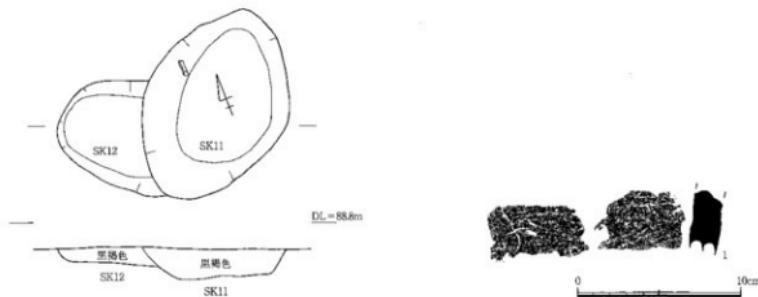
第IV章 調査成果

第1節 4層上面検出遺構(SK11～17・19～22、Pit10・18、遺物集中1～5)

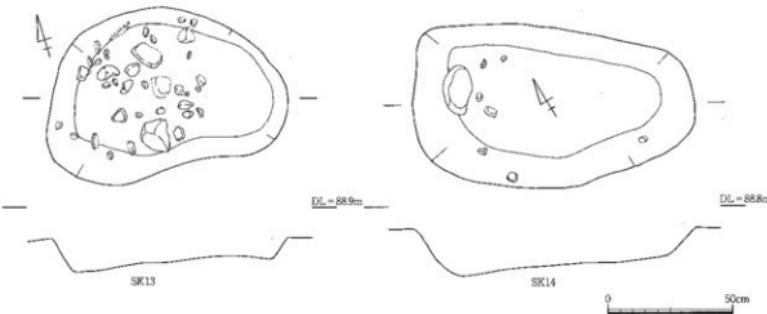
SK11(報No.1)・12

C4グリッド南西隅に位置し、長軸 83 cm、短軸 59 cm、深さ 10 cm を測る楕円形の遺構である。埋土は黒褐色(2Y5/1)で、SK12(黒褐色 7.5Y3/2)よりも新しい。SK12は推定長軸 60 cm、推定短軸 45 cm であり、遺物は確認できなかった。

1は無文土器胴部である。内外面にナデ調整を施す。胎土に多量の繊維が混入される。



第6図 SK11・12 遺構図及び出土遺物実測図



第7図 SK13・14 遺構図

SK13

C4 グリッド西端に位置し、長軸 97 cm、短軸 66 cm、深さ 10 cm を測り、楕円形の遺構である。埋土は黒褐色(10YR3/1)で、遺物は確認できなかった。

SK14

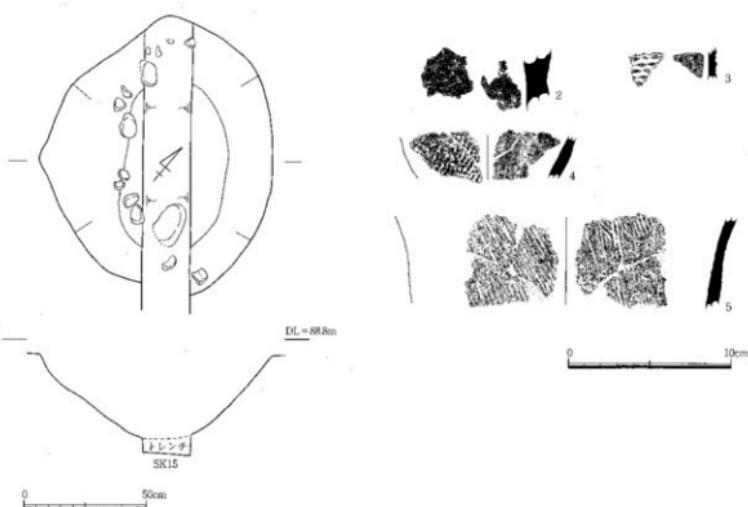
D4 グリッドに位置し、長軸 116 cm、短軸 65 cm、深さ 20 cm を測り、楕円形の遺構である。埋土は黒褐色(10YR3/1)で、遺物は確認できなかった。

SK15(報No.2～5)

C4 グリッド東端に位置し、推定長軸 115 cm、短軸 95 cm、深さ 33 cm を測る長楕円形の遺構で、埋土は黒褐色(10YR2/2)である。

2は無文土器胴部で、内外面にナデ調整を施す。指頭圧痕が顯著で、胎土に纖維を混入させる。
3・4はボジティヴ楕円押型文土器胴部で、内外面にナデ調整を施す。3は外面にレンズ状楕円文を有し、胎土に纖維を混入させる。4は底部付近の破片である。

5は無文土器である。内外面に二枚貝条痕調整を施す。



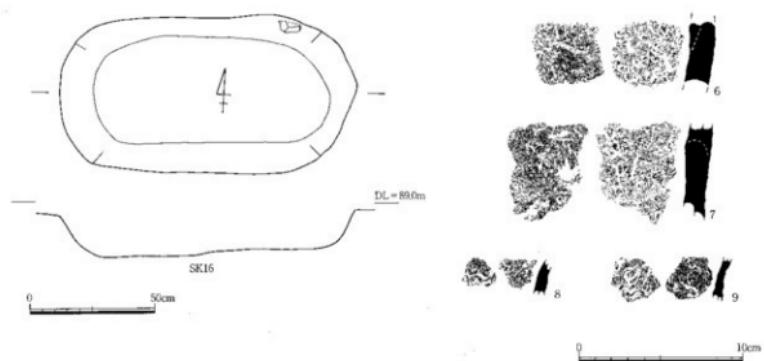
第8図 SK15 遺構図及び出土遺物実測図

SK16(報No 6～9)

D 6 グリッド上に位置し、長軸 122 cm、短軸 64 cm、深さ 18 cm を測る長椭円形の遺構である。埋土は黒褐色(10YR3/1)である。

6・7は無文土器胴部である。6は外面に二枚貝条痕調整の後ナデ調整を施すが、内面は不明である。7は内外面にナデ調整を施す。いずれも胎土に纖維を混入させる。

8・9は押型文土器胴部である。内外面にナデ調整を施す。いずれも外面に山形押型文を有し、胎土に纖維が混入され、色調も類似することから同一個体の可能性が考えられる。



第9図 SK16 遺構図及び出土遺物実測図

SK17(報No 10～15)

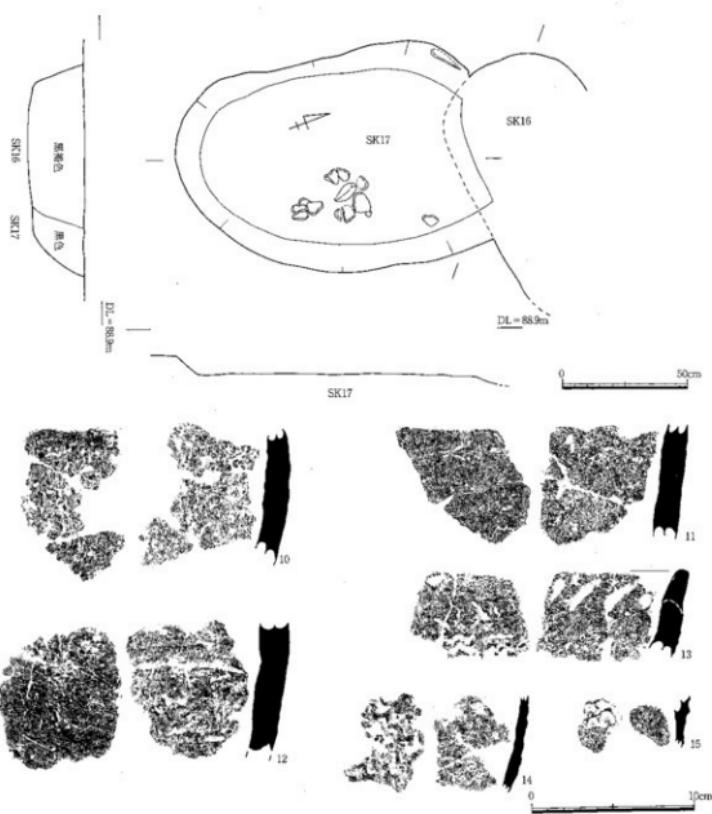
D 5 グリッド東端に位置し、推定長軸 140 cm、短軸 90 cm、深さ 10 cm を測る長椭円形の遺構で、埋土は黒色(7.5Y2/1)である。SK16 より古い。

10～12は無文土器胴部である。10・11は内外面にナデ調整を、12は内面に二枚貝条痕調整と外面に二枚貝条痕調整の後ナデ調整を施す。いずれも胎土に纖維を混入させる。

13は押型文土器口縁部である。端部を外傾させ、内外面にナデ調整を施す。外面に山形押型文及び内面に左下りキザミを有する。胎土に纖維を混入させる。

14・15は押型文土器胴部である。いずれも内外面にナデ調整を施す。14は内面の指頭圧痕が顕著であり、外面に山形文を有する。15は外面に山形文のヴァリエーションの一つと考えられるアーチ状押型文を有する。いずれも胎土に纖維を混入させる。

無文土器と押型文土器の両者の胎土に纖維混入が認められる。無文土器は極めて厚く、押型文土器は山形文とそのヴァリエーションのみ認められる。また、13は無文土器及び押型文土器の器種間交渉を示唆する資料として考えられる。



第10図 SK17 遺構図及び出土遺物実測図

SK19(報No. 16～25)

D5・D6グリッドにまたがって位置し、長軸 95 cm、短軸 46 cm、深さ 25 cmを測る長楕円形の遺構で、埋土は黒褐色(10YR 3/1)である。

16～18は無文土器口縁部である。16・17は内外面にナデ調整を施し、内面に左下りキザミを有する。18は内外面に二枚貝条痕調整を施し、内面に刺突を有する。18は遺物集中1の28と同一個体である。いずれも胎土に纖維を混入させる。

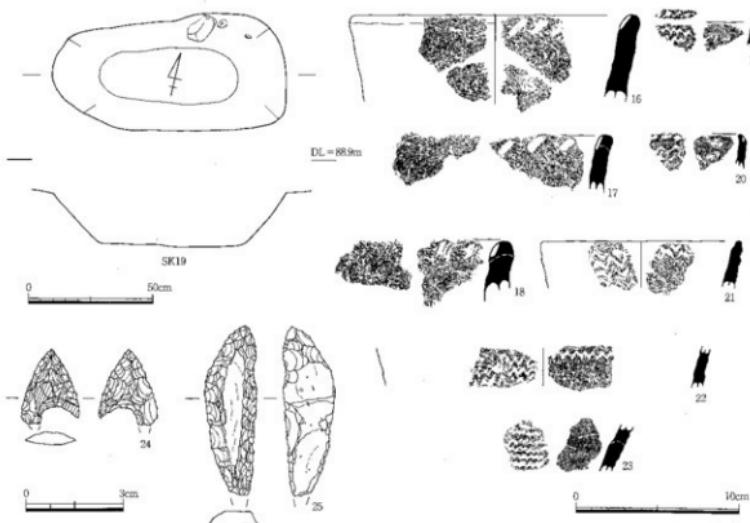
19～21は押型文土器口縁部である。内外面にナデ調整を施し、外面に山形文を有する。いずれも口縁部に文様を有し、19は口唇部に左斜行キザミを有する。20は口唇部に刺突と内面に山形文

を有し、端部が内湾する。21は内面に山形文を有する。

22・23は押型文土器胴部である。内外面にナデ調整を施し、外面に山形文を有する。22は内面に山形文を有すことから口縁部近くの破片と考えられる。

24・25は石器で、いずれもサスカイト製である。24は石鏃、25は刃部の摩滅が見られることから石匙の一種として考えられる。

無文土器には薄手のものと、それよりやや厚い無文土器が認められ、押型文土器は山形文のみ認められる。



第11図 SK19造構図及び出土遺物実測図

SK20

D6グリッド北端に位置し、長軸65cm、短軸54cm、深さ18cmを測り、不定形の遺構である。埋土は黒褐色(10YR3/1)で、遺物は確認できなかった。

SK21

C5グリッド南西端に位置し、長軸109cm、短軸70cm、深さ23cmを測り、長楕円形の遺構である。遺物は確認できなかった。

SK22

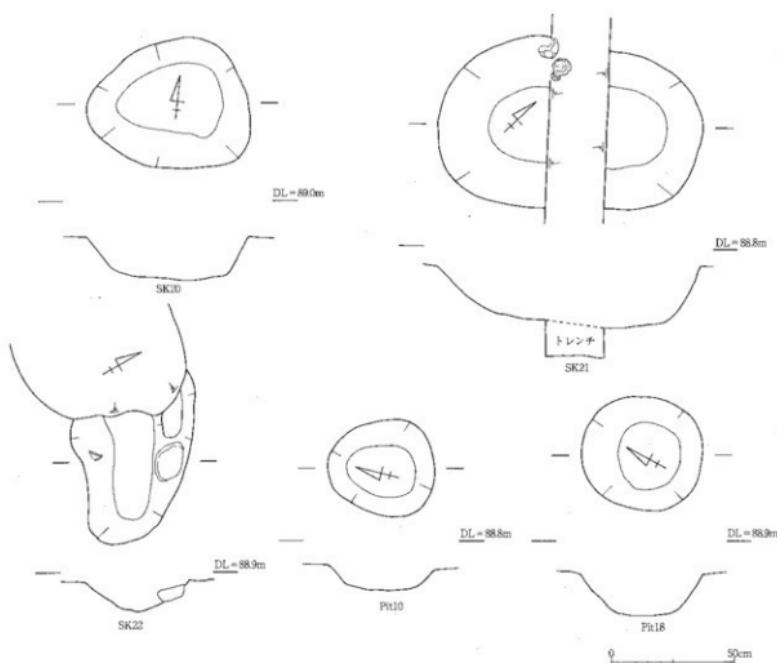
D6グリッド北西端に位置し、推定長軸75cm、短軸43cm、深さ12cmを測り、長楕円形と考えられる遺構である。SK16より古く、遺物は確認できなかった。

Pit10

C5グリッド中央部に位置し、長軸44cm、短軸40cm、深さ11cmを測り、楕円形の遺構である。遺物は確認できなかった。

Pit18

C5グリッド南東端に位置し、長軸50cm、短軸46cm、深さ17cmを測り、やや歪んだ円形の遺構である。遺物は確認できなかった。



第12図 SK20～22、Pit10・18 遺構図

遺物集中1(報No.26~84)

26~28は無文土器口縁部である。26・27は内外面にナデ調整を施す。26は内面に胴部から統くと考えられる左下から右上への強い指ナデを有し、27は内面に左斜行キザミを有する。28は内外面に二枚貝条痕調整の後ナデ調整を施し、内面に刺突を有する。

29~39は無文土器胴部である。29~36は内外面にナデ調整を、37・38は内外面に二枚貝条痕調整の後に外面にナデ調整を、39は内外面に二枚貝条痕調整の後にナデ調整を施す。

40・41は押型文土器口縁部である。40は内外面にナデ調整を施し、外面に山形文と内面に刺突を有する。41は内面に柵状文様の二枚貝条痕と外面にナデ調整及び山形文を有する。

42~47は押型文土器胴部である。内外面にナデ調整を施す。42~45は外面に山形文を有するが、内面に山形文を有するものは口縁部近くの破片として考えられる。46は外面にポジティヴ格円文を有し、47は外面に豆粒状の格子目文を有するが、一部無文帯が確認できる。

48~70は磨石と叩き石である。48・49は表裏に敲打痕を有し、側縁に面取り加工を有する。48は左右側縁に敲打による面取り加工を有するが、49は下端のみに敲打による面取り加工を有する。50・51は表裏に敲打痕を有し、52・53は表裏に磨面を有する。54・55は敲打痕を片面に有し、56・57は浅い敲打痕を多数有する。58~61は磨面を有する。62は乳棒状を呈し、表面に敲打痕と裏面に磨面を有する。63は溝状の敲打痕及び擦痕を有する。64は擦痕を有する。65は浅い敲打痕を有するが、不定形である。66は一部浅い敲打痕と上下端を敲打による面取り加工を有する。67は破片ではあるが敲打痕を有する。68は隅丸長方形を呈すると考えられ、敲打痕を有する。69は破片であるが磨面を有する。70は溝状の深い敲打痕を有する。

71~83は石皿と台石である。71・72は磨面、73・74は敲打痕を有する。75は敲打痕及び擦痕を有し、76は溝状、77はすり鉢状の敲打痕を有する。78は磨面とその周囲に浅い敲打痕を有する。79~83は破片であるが、80は砥石の可能性が考えられる。

84は石皿の破片として考えられるが、側縁にも敲打痕を有する。砾石器として転用された可能性が考えられる。

遺物集中2(報No.85~93)

85は無文土器口縁部で、内外面にナデ調整を施し口縁部は外傾しながら立ち上がる。

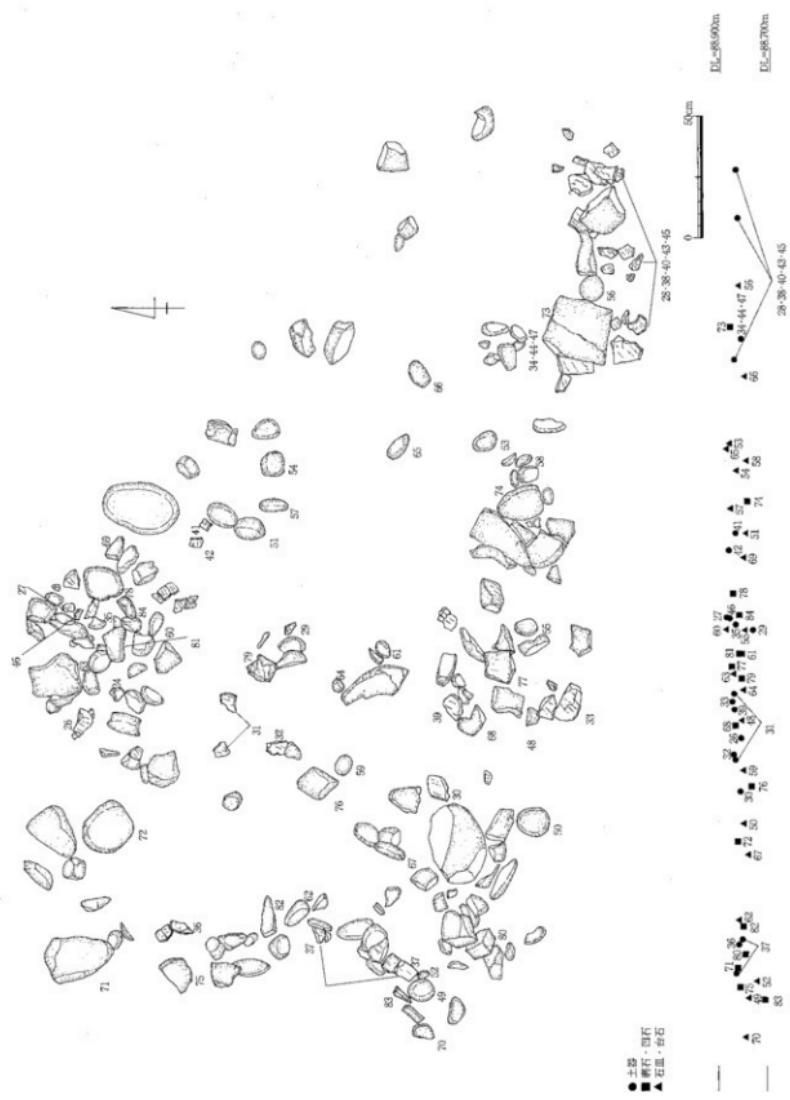
86~92は無文土器胴部である。86~91は内外面にナデ調整を、92は内外面に二枚貝条痕調整を施し、胴上部に最大径を有する器形を呈する可能性が考えられる。

93は砥石の破片の可能性が考えられる。

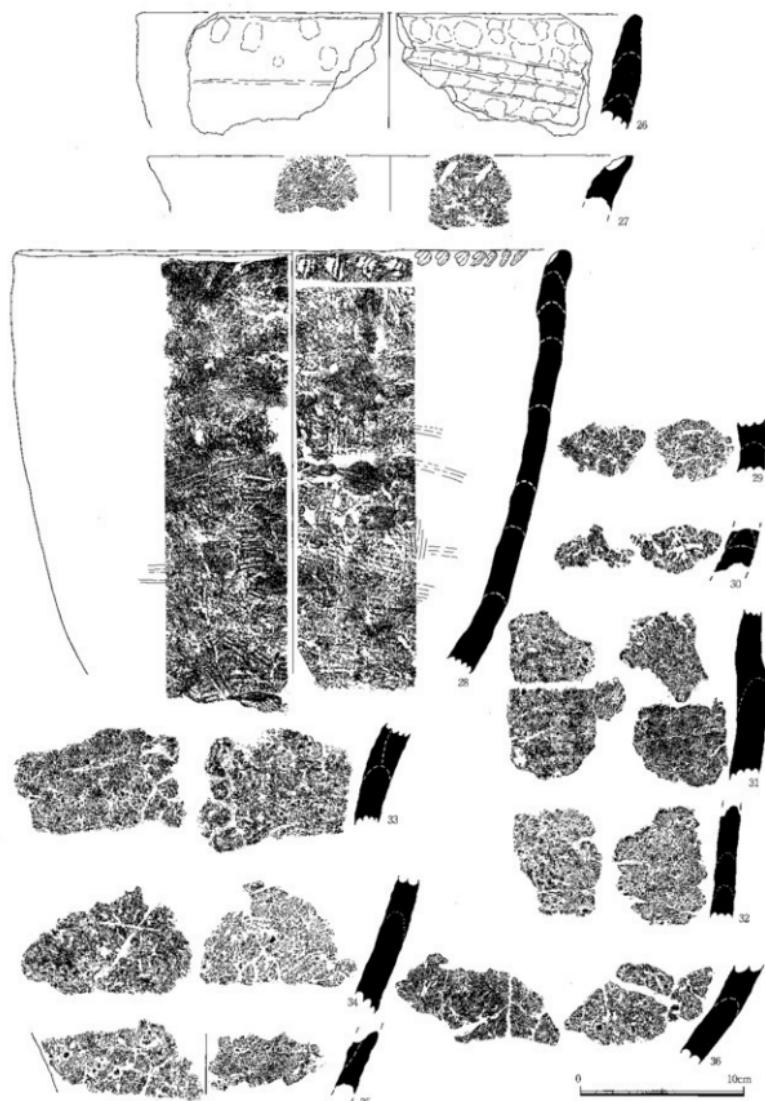
ナデ調整の無文土器が主体である。前者の85は口縁が大きく外傾するのに対し、後者の92は胴上部に最大径を有し、口縁が内傾もしくは内湾気味に立ち上がると思われる。85の出土レベルが上位にあるため、新しいと考えられる。

遺物集中3(報No.94~116)

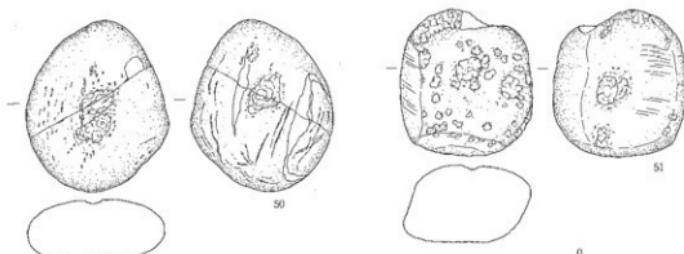
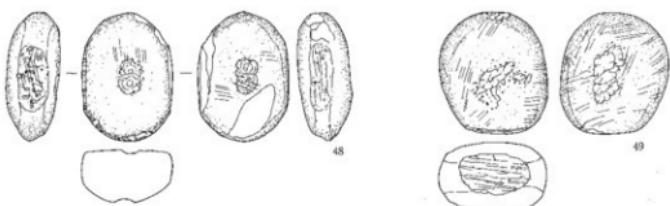
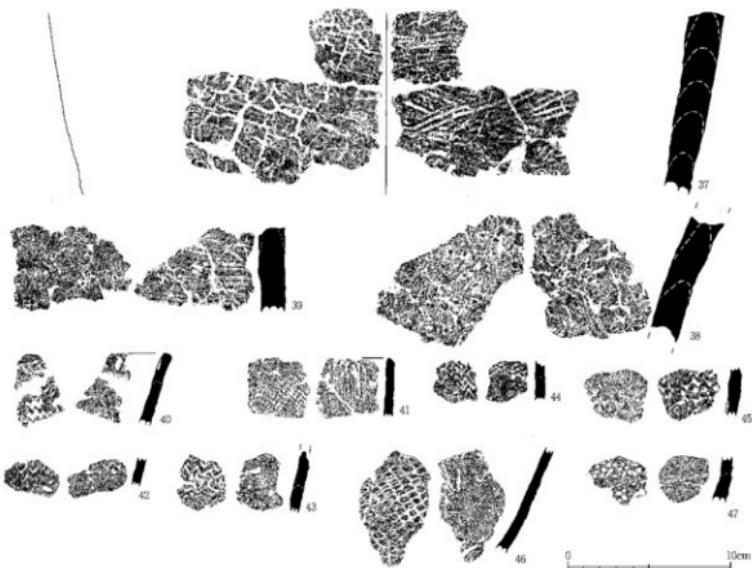
94~96は無文土器口縁部である。94は内外面に二枚貝条痕調整の後にナデ調整を施す。胴上



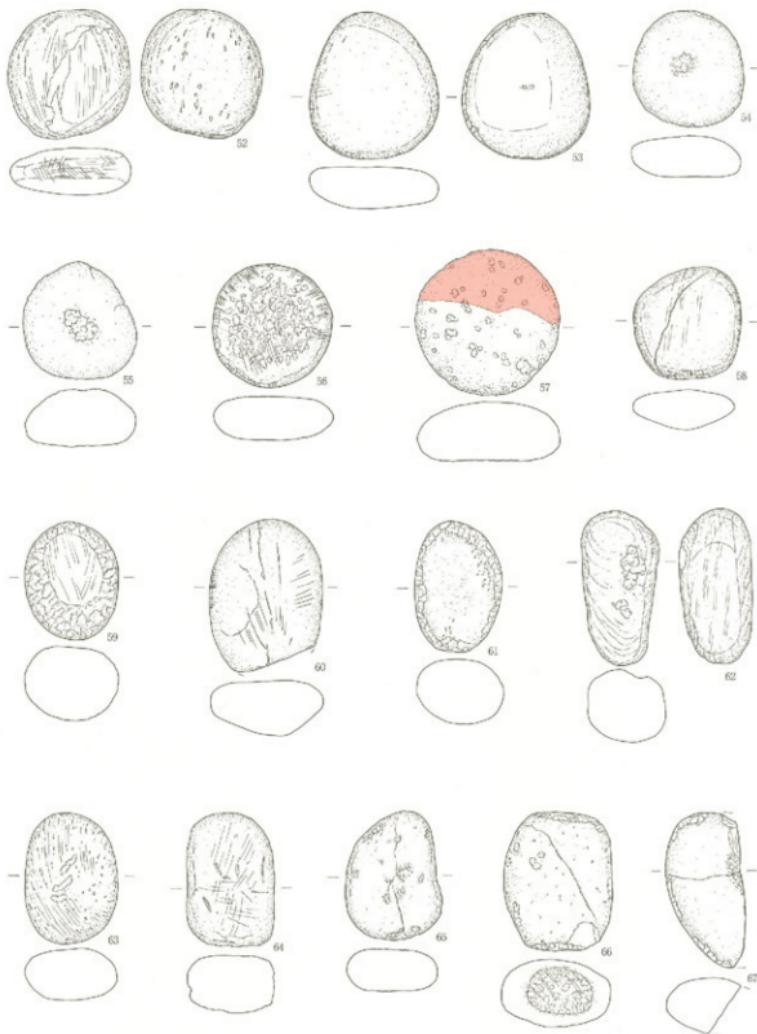
第13図 遺物集中1遺構図



第14図 遺物集中1出土遺物実測図①

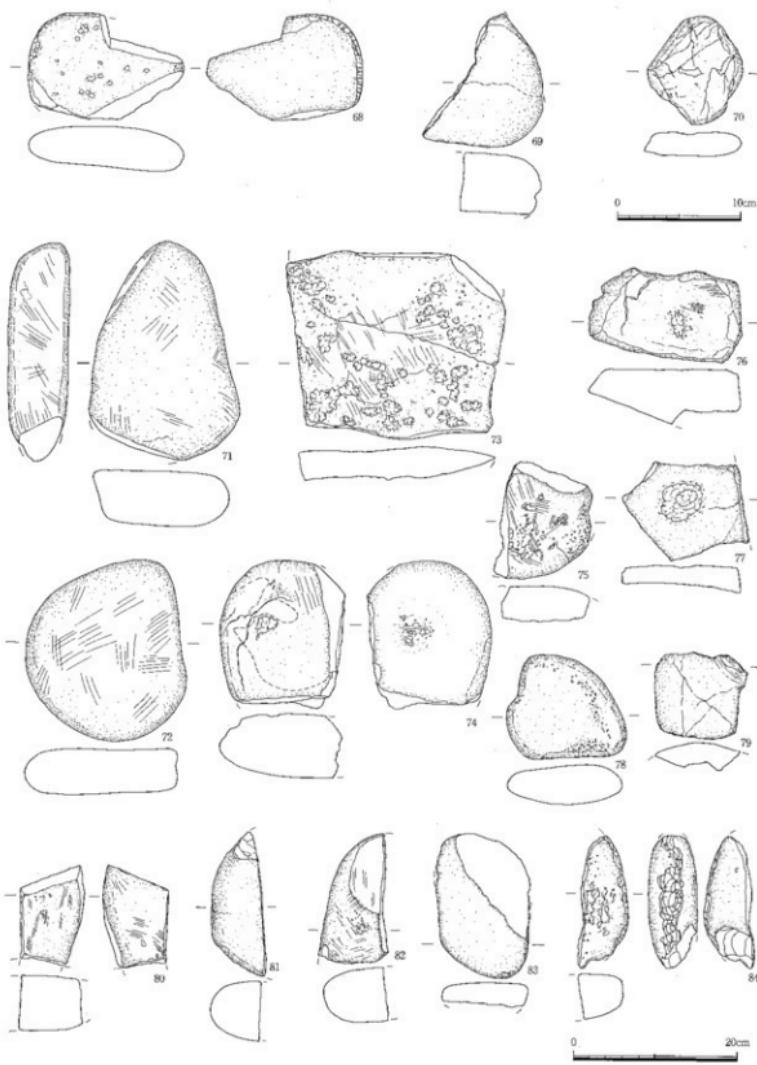


第15図 遺物集中1出土遺物実測図②

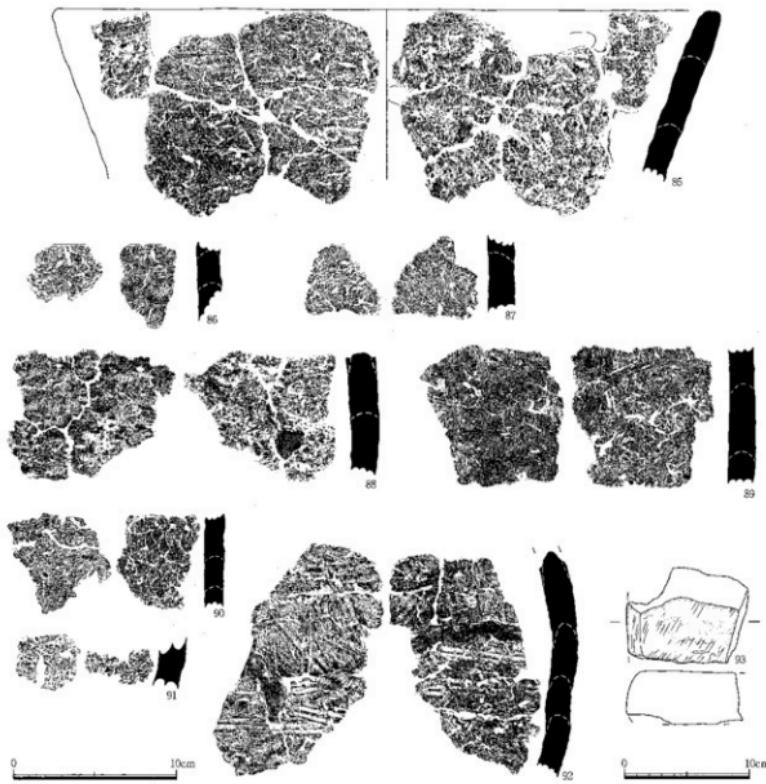
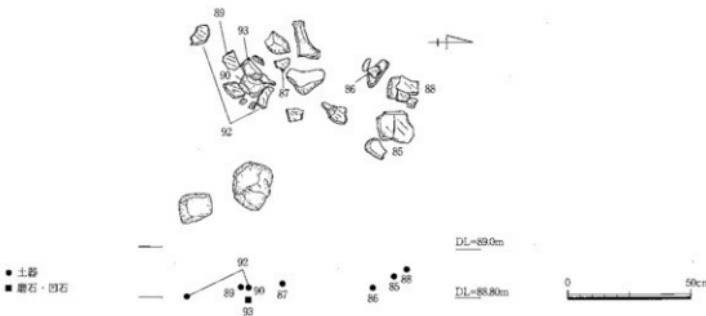


0 10cm

第16図 遺物集中1出土遺物実測図③



第17図 遺物集中1出土遺物実測図④



第18図 遺物集中2遺構図及び出土遺物実測図

部に最大径を有し、口縁が内湾する器形を呈する。また、口縁部内面に長方形状の刺突を有する。95・96は内外面にナデ調整を施す。95は口縁端部が外反し、内面に左斜行キザミを有し、96は右斜行刺突を有する。いずれも胎土に纖維を混入させる。

97～100は無文土器胴部である。内外面にナデ調整を施す。いずれも胎土に纖維を混入させる。

101は押型文土器口縁部である。内外面にナデ調整を施す。口縁は緩い波状を呈し、外面に山形文及び内面に刺突を有する。胎土に纖維を混入させる。

102は押型文土器胴部である。内外面にナデ調整を施す。外面にポジティヴ椭円文を有する。

103～110は磨石と叩き石である。103は表裏に敲打痕を有し、左右側縁及び下端に敲打による面取り加工を有する。104は破片であるが、敲打痕を有し、側縁に敲打と研磨による面取り加工を有する。105は磨面を有し、下端に研磨による面取り加工を有する。106～109は敲打痕及び擦痕を有する。110はすり鉢状の凹みを有し、穿孔行為の結果例えれば火つき白等の可能性が考えられる。

111～116は石皿ないしは台石である。111は表面に敲打痕と磨面を有する。裏面は自然面と考えられる。112・113は敲打痕を有する。114は磨面を有する。115は磨面と浅い敲打痕をわずかに有する。116は砥石の可能性が考えられる。

94・95の出土レベル差が大きいため、口縁部が内湾するタイプと外反するタイプには時期差が考えられる。また、両者の中間の出土レベルで98・101・102が出土している。101からは無文土器と押型文土器の器種間交渉が伺える。

磨石に関しては、敲打痕が顕著なもの(103・104)とそれほど顕著でないもの(105～109)があり、103～105には側縁に面取り加工が見られる。敲打痕の有無及び側縁の面取り加工に関しては機能差の可能性があるが、103～107は極めて近い距離で出土しているため、時期差の可能性は低いと考えられる。またそれらは96・97・99と共に伴している可能性が高い。

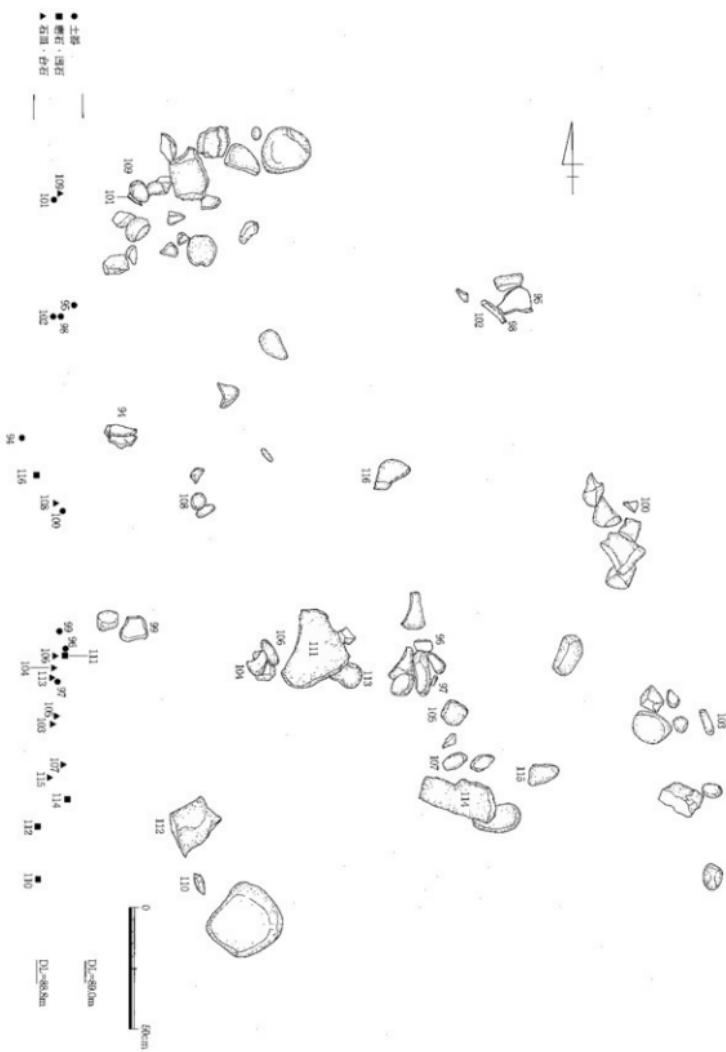
遺物集中4(報No.117～128)

117は無文土器口縁部で内外面にナデ調整を有すると考えられる。口唇部に面取りを有し、胎土に纖維を混入させる。

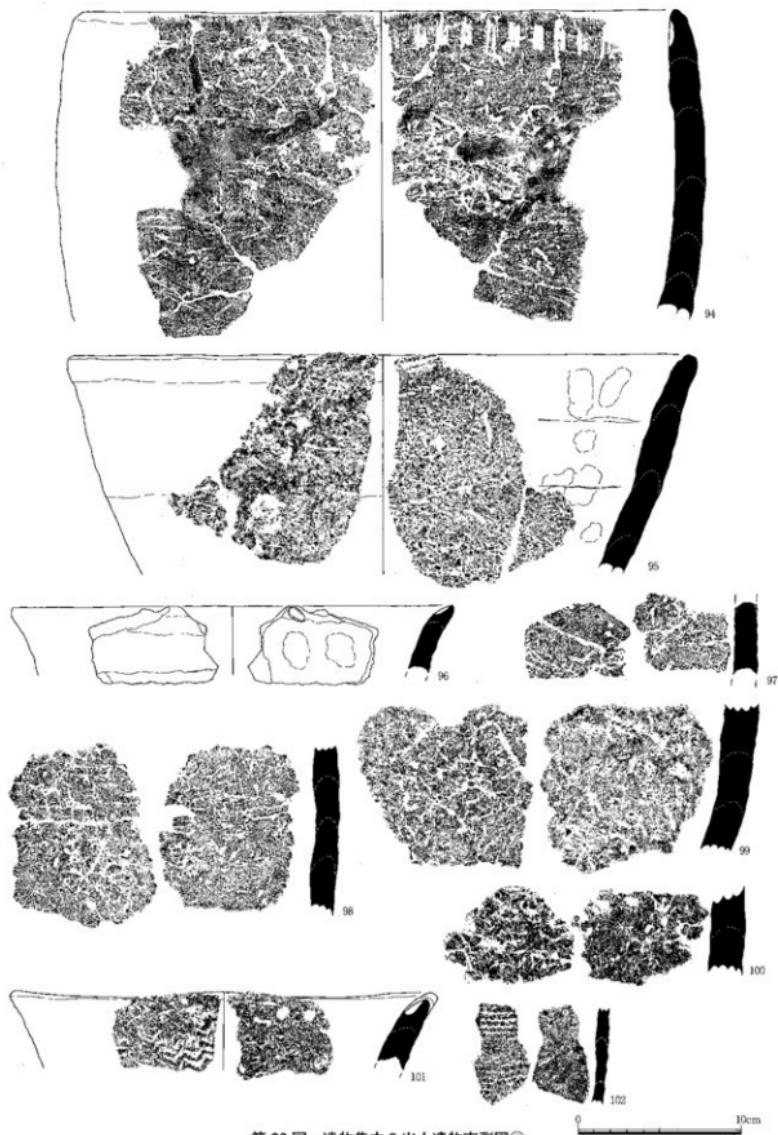
118～120は無文土器胴部である。118・120は内外面にナデ調整を施し、120は胴上部に最大径を有する。119は内外面に二枚貝条痕調整を施し、遺物集中6の296～300と胎土及び調整が酷似するため、同一個体と考えられる。

121～123は磨石と叩き石である。121は表裏にすり鉢状の敲打痕を有し、122は一部浅い敲打痕を有するが、全体が極めて丁寧に研磨されており、側縁も研磨による面取り加工を有する。123は長指円形の磨石で、上下端に敲打痕を有する。

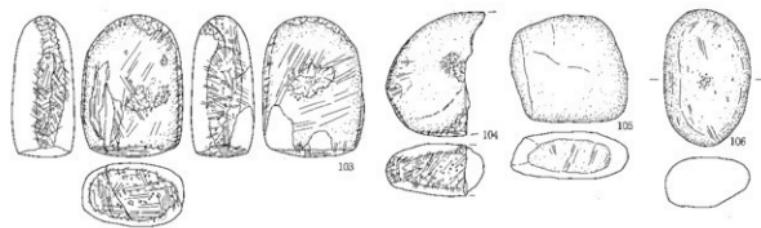
124～128は石皿と台石である。124は不鮮明であるが、溝状の敲打痕を有し、125は磨面を、126～128は浅い敲打痕を有する。



第19図 遺物集中3 遺構図



第20図 遺物集中3出土遺物実測図①

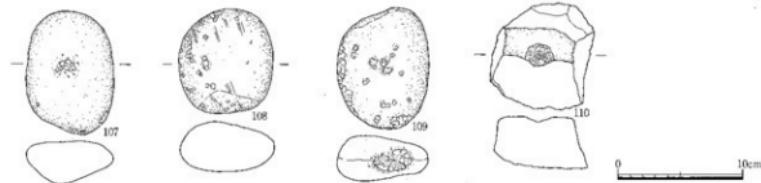


103

104

105

106



107

108

109

110

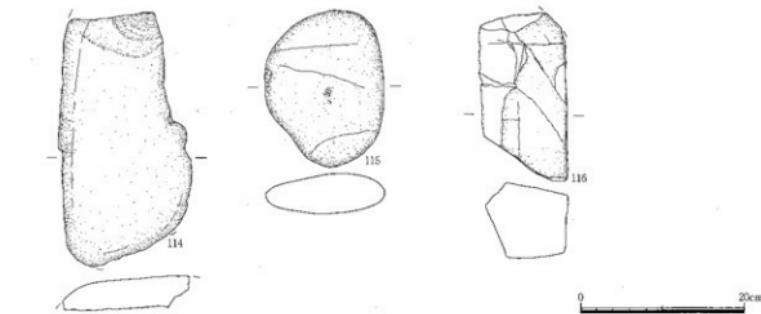
10cm



111

112

113



114

115

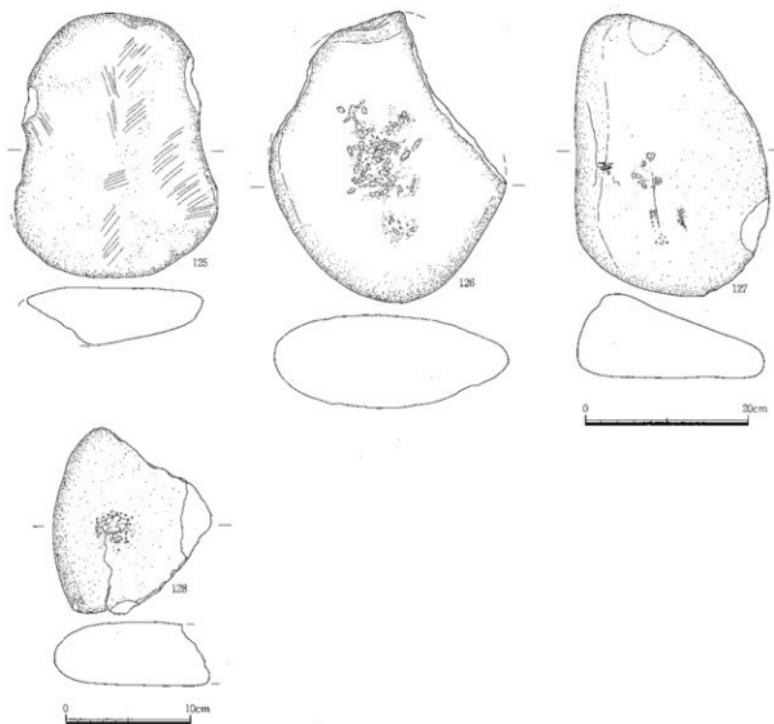
116

20cm

第21図 遺物集中3出土遺物実測図②



第22図 遺物集中4遺構図及び出土遺物実測図①



第23図 遺物集中4出土遺物実測図②

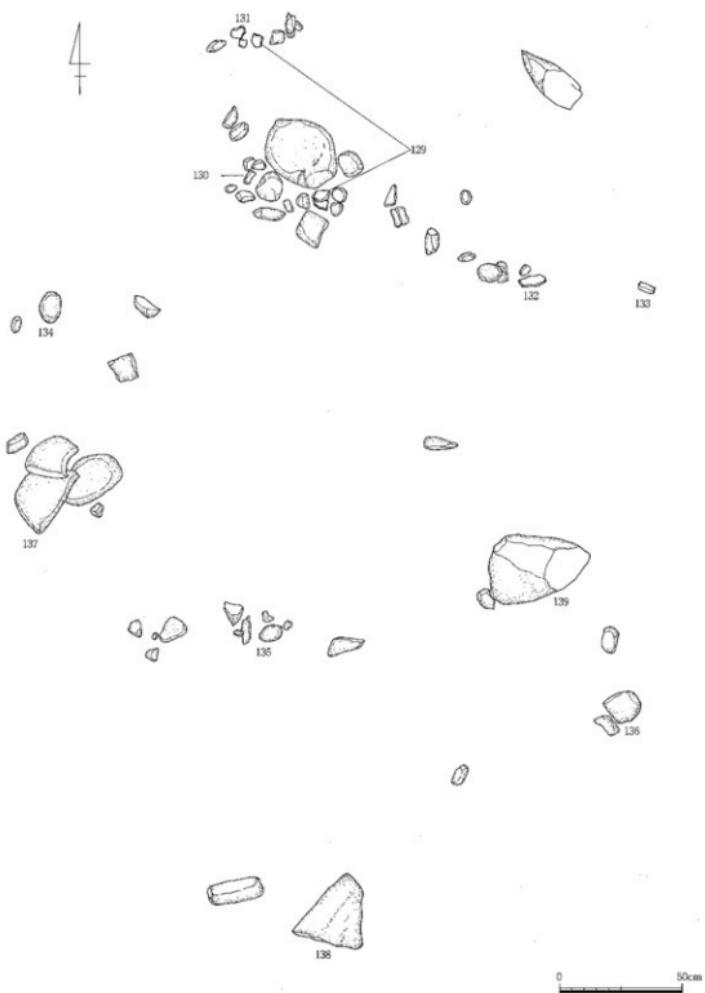
遺物集中5(報No 129～139)

129・130は無土器口縁部で、内外面にナデ調整を施す。129は胴上部に最大径を有し、そこから口縁部へ内湾気味に立ち上がる器形を呈すると考えられ、内面に右斜行沈線を有する。130は口縁部が直立し、上面に刺突を有する。いずれも胎土に纖維を混入させる。

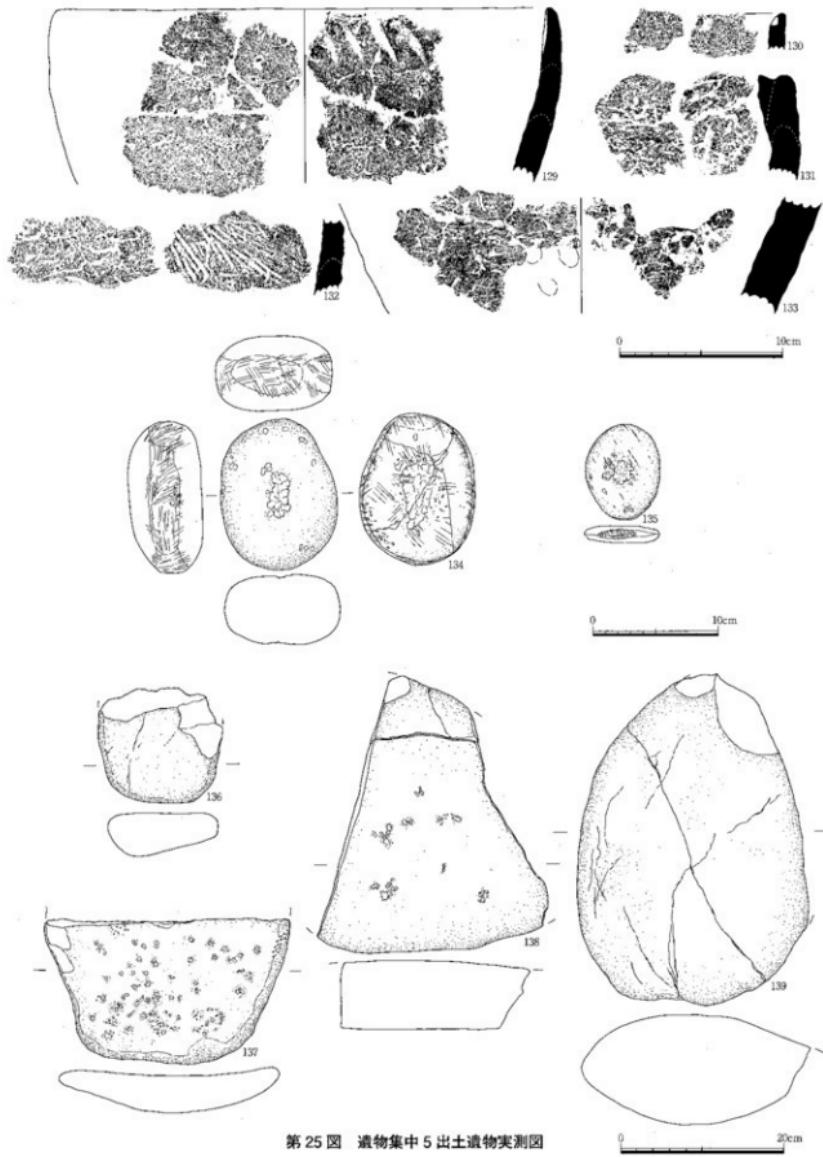
131～133は無土器側部である。131は内外面にナデ調整を、132は内面に二枚貝条痕調整と外面にナデ調整を、133は内外面に二枚貝条痕調整の後ナデ調整を施す。

134・135は磨石と叩き石である。134は表裏に敲打痕と裏面に擦痕を有し、側縁に研磨による面取り加工を有する。135は極めて浅い敲打痕を有し、下端に研磨による面取り加工を有する。

136～139は石皿と台石である。136は磨面、137・138は敲打痕を有する。139は風化が激しいが、台石として考えられる。



第24図 遺物集中5遺構図



第25図 遺物集中5出土遺物実測図

第2節 5層上面検出遺構(SK 1・2・4・5・7・24・25・28~37、遺物集中6・23)

SK 1 (報No 140 ~ 165)

D 2 グリッド南東隅に位置し、長軸 154 cm、短軸 128 cm、深さ 30 cm を測り、楕円形の遺構である。

140 ~ 144 は無文土器口縁部である。140 は内面にナデ調整及び外面に二枚貝条痕調整の後ナデ調整を施す。口縁部はやや内湾し、上面に半截竹管状工具による刺突を有する。141 ~ 144 は内外面にナデ調整を施す。口縁部は外反し、141 は内面に右斜行キザミ、142 は内外面に右斜行キザミを有する。いずれも胎土に纖維を混入させる。

145 ~ 153 は無文土器胴部である。145・146 は内面にナデ調整及び外面に二枚貝条痕調整の後ナデ調整を施す。147 は内面に二枚貝条痕調整を施すが、外面は二次焼成により不明である。148 は内外面に二枚貝条痕調整を施す。149 は内外面に植物茎を束ねた様な工具で、ジグザグなナデを施す。150 ~ 153 は内外面にナデ調整を施すが、153 の内面調整は剥落により不明である。いずれも胎土に纖維を混入させる。

154・155 は押型文土器口縁部で、いずれも外面に山形文を有し、胎土に纖維を混入させる。口縁は波状を呈すると考えられる。154 は内面にも山形文を有する。

156 ~ 163 は押型文土器胴部である。156・157 は内面に二枚貝条痕調整の後ナデ調整を施し、外面に山形文を有する。158・159 は内面にナデ調整を施し、外面に山形文を有する。158 は底部付近の破片であり、尖底であると考えられる。159 の器厚は極めて厚く、胎土に纖維を混入させる。160 は内外面にポジティヴ格円文を有する。161 は外面に極めて細かいネガティヴ格円文を、162 は外面に格子目文をそれぞれ有する。

163・164 は撲糸文土器胴部で、内外面にナデ調整を施す。163 は無文部と施文部を組み合わせる可能性が考えられ、164 は外面に 0 段 1 の撲糸文を有する。

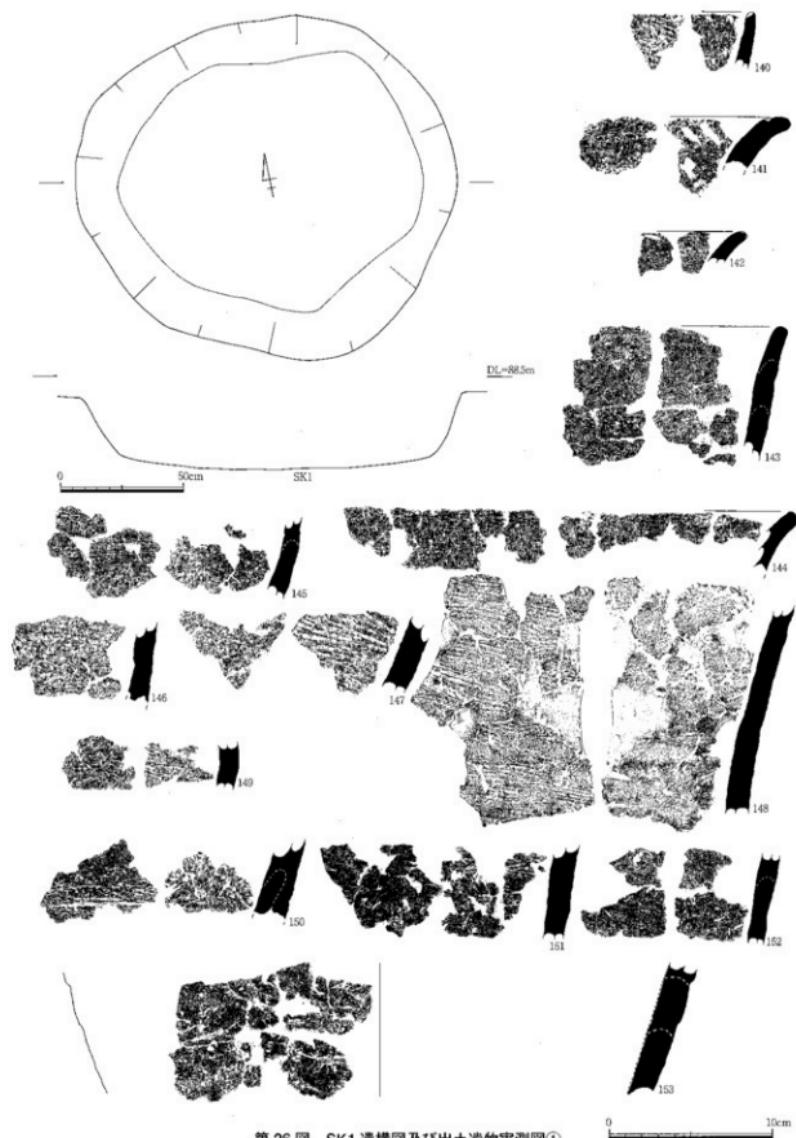
165 は磨石の破片で、小さな敲打痕と擦痕が認められる。

主体となるのは薄手の無文土器であり、それと二枚貝条痕調整を施す山形文を主体とする押型文土器がセットと考えられる。

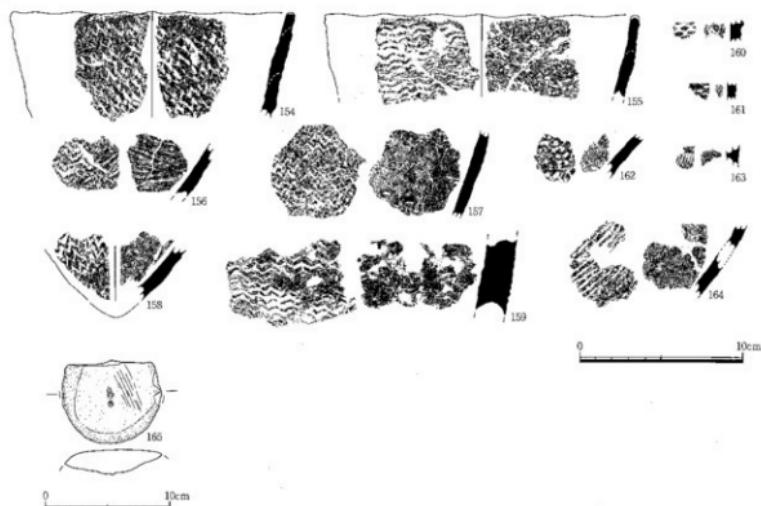
SK 2 (報No 166 ~ 295)

E 3 グリッド東端に位置し、最大径 3.4m 最深 60 cm を測るテラス状の構造を有する大形竪穴土坑である。柱穴・中央ピット等は伴わなかったが、西隅に長軸 62 cm 短軸 46 cm、最深 24 cm の楕円形土坑が確認された。SK 2 内ピットと称するこの遺構の埋土及び埋蔵物は SK 2 と同じであったため、この大形竪穴土坑に伴うものとして考えた。

調査において遺物が集中するごとに測量を行ったが、層位及び遺物検討の結果、時期幅のある遺物が混在していたため、分類した上で検討を行った。



第26図 SK1 遺構図及び出土遺物実測図①



第27図 SK1出土遺物実測図②

土器：無文と押型文に分けられる。詳細な分類は以下のとおりである。

無文土器(A群) 1類：口縁部無文

2類：口縁部有文 a種～キザミを有するもの

(I・直行、II・斜行-r：右斜行 l：左斜行、III・二枚貝腹縁キザミ)

b種-刺突を有するもの(I・沈線状、II・円状、III・D字状)

c種-押型文を有するもの

d種-柵状文を有するもの

e種-文様を意識したと考えられる指頭圧痕ないしはナデを有するもの

3類：胸部～底部

無文土器は調整の違いにより i : ナデ調整 ii : 二枚貝条痕調整に分類できる。

押型文土器(B群) 1類：口縁部無文

2類：口縁部有文 a種-押型文を有するもの

b種-キザミを有するもの

(I・直行、II・斜行-r：右斜行 l：左斜行、III・二枚貝腹縁キザミ)

c種 - 横状文を有するもの

d種 - 刺突を有するもの(I・沈線状、II・円状、III・D字状)

e種 - 文様を意識したと考えられる指頭圧痕ないしはナデを有するもの

3類：胴部～底部

押型文土器は、押型文の種類により以下のように分類できる。

i : 縦位山形押型文 ii : 横位山形押型文 iii : 縦位ポジティイヴ横円押型文 iv : 横位ポジティイヴ横円押型文 v : 不定形押型文 vi : 縦横組み合わせ押型文 vii : 沈線文 viii : 格子目文 ix : 掘糸文

A群

1類 i … 166 ~ 175

無文土器口縁部である。内面に文様を有さない。内外面にナデ調整を施す。172は口縁部から若干下がった部位に焼成前穿孔を有する。174は口縁部上面に面取りを有し、ナデには強弱が認められる。その結果、強いナデの部分には外側への粘土のはみ出しが認められ、小突起状を呈している。いずれも胎土に纖維を混入させる。

1類 ii … 176・177・205

無文土器口縁部である。内面に文様を有さない。内外面に二枚貝条痕調整を施す。176は内湾気味に立ち上がるが、177は端部を弱く外反させている。いずれも二枚貝条痕調整の後にナデ調整を施し、胎土に纖維を混入させる。

2類a I種 i … 178 ~ 183・185

無文土器口縁部である。内面に直行キザミを有する。内外面にナデ調整を施す。183は口縁部上面に面取りを有する。185は胴上部に最大径を有し、口縁部は内湾気味に立ち上がる。内面にスタンプ状の直行キザミを有する。いずれも胎土に纖維を混入させる。

2類a I種 ii … 184

無文土器口縁部である。内面に直交キザミを有する。内外面に二枚貝条痕調整を施す。口縁部は内湾するため、胴上部に最大径を有する器形の可能性が考えられる。胎土に纖維を混入させる。

2類a II種 i … 186 ~ 188

無文土器口縁部である。内面に左斜行キザミを有する。内外面にナデ調整を施す。187は不鮮明であるが、内面に左斜行の細長いキザミを有する。いずれも胎土に纖維を混入させる。

2類aII種 i …189～192

無文土器口縁部である。内面に右斜行キザミを有する。内外面にナデ調整を施す。口縁部は外傾ないしは外反する傾向が強い。いずれも胎土に纖維を混入させる。

2類aIII種 i …193

無文土器口縁部である。二枚貝腹縁刺突を有する。内外面にナデ調整を施す。口縁部は外傾すると考えられる。胎土に纖維を混入させる。

2類bI種 i …194

無文土器口縁部である。沈線状の刺突を有する。内外面にナデ調整を施す。口縁部は弱く外傾する。胎土に纖維を混入させる。

2類bII種 i …195・196

無文土器口縁部である。円形刺突を有する。内外面にナデ調整を施す。口縁部は直立・外傾する傾向が強い。196は内面に強いナデ調整の痕がのこる。いずれも胎土に纖維を混入させる。

2類bIII種 ii …197

無文土器口縁部である。円形刺突を有する。内外面に二枚貝条痕調整を施す。口縁部は外傾しながら立ち上がる。胎土に纖維を混入させる。

2類cIII種 i …198～201

無文土器口縁部である。D字状刺突を有する。内外面にナデ調整を施す。口縁部が外反する。いずれも胎土に纖維を混入させる。

2類e種 i …202～204

無文土器口縁部である。文様を意識したような押圧やナデを有する。内外面にナデ調整を施す。202は口縁部内面に左下→右上方向へのナデを有し、口縁部は直立すると考えられる。203は左下→右上方向への指ナデを有し、口縁部は内湾すると考えられる。204は口縁部外面直下に指ナデによると考えられる凹線を有し、内面に左斜行の指頭圧痕を有する。口縁部には面取りを有すると考えられ、面取りの強弱により外側へ粘土がはみ出す部分とそうでない部分に分けられるため、緩い波状口縁になることが考えられる。いずれも胎土に纖維を混入させる。

3類 i …206～209

無文土器胴部である。内外面にナデ調整を施す。いずれも胎土に纖維を混入させる。

3類ii…210～216

無文土器胴部である。内外面に二枚貝条痕調整を施す。210は二枚貝条痕調整をナデ消しており、212の二枚貝条痕調整は文様を意識して行われていることが考えられる。216も二枚貝条痕調整を施すが、条が極めて太い。いずれも胎土に纖維を混入させる。

B群

1類iv…217

押型文土器口縁部である。口縁部は無文で、内外面にナデ調整を施す。外面の口縁部から下がった部分にポジティヴ楕円文を有する。ミニチュア土器の可能性が考えられる。胎土に纖維を混入させる。

2類a種ii…218～220

押型文土器口縁部である。内外面に山形押型文を有する。218・219は内外間に間延びした山形文を有する。220は内外面に横位の山形文を有するが、外面の口縁部直下は縦位の山形文を有する。いずれも胎土に纖維を混入させる。

2類aII1種ii…221

押型文土器口縁部である。口縁部に左斜行キザミを有する。内外面に山形押型文を有する。胎土に纖維を混入させる。

2類aII1種iv…222・223

押型文土器口縁部である。口縁部に左斜行キザミを有する。内外面にポジティヴ楕円文を有する。222の楕円文は223に比べて大ぶりなものである。いずれも胎土に纖維を混入させる。

2類aII1種vii…224

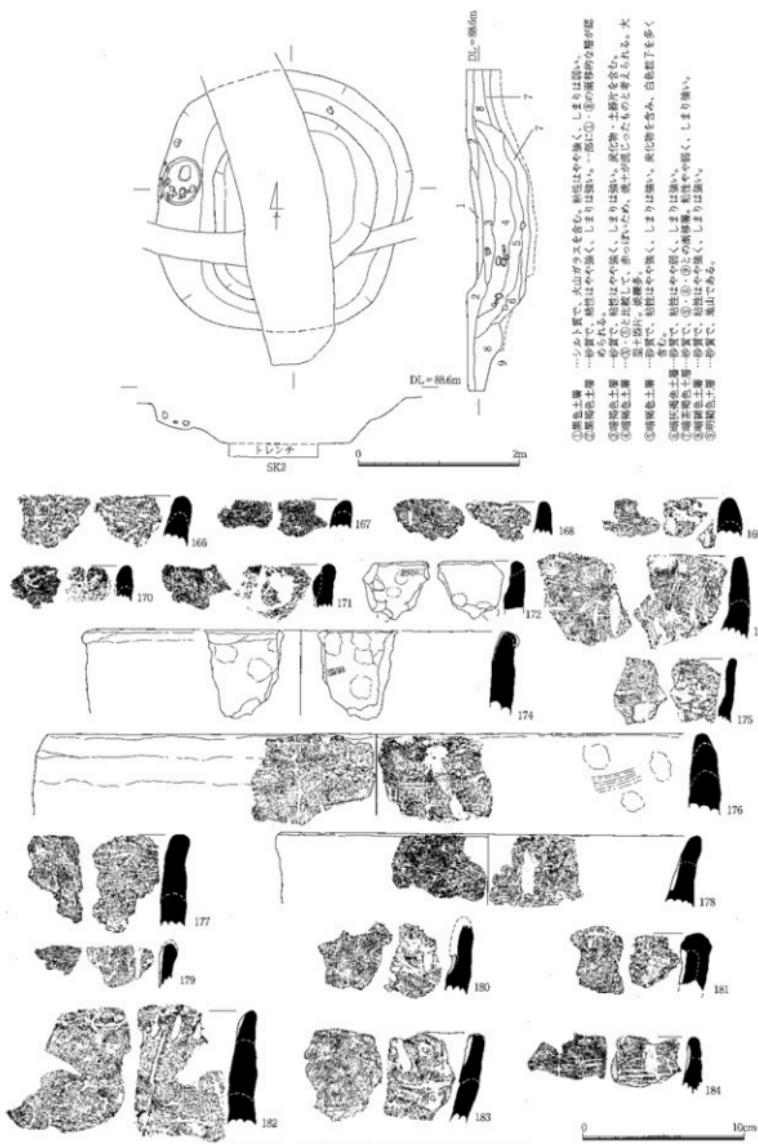
押型文土器口縁部である。口縁部に左斜行キザミを有する。内外面に格子目文を有する。胎土に纖維を混入させる。

2類c種ii…225～232

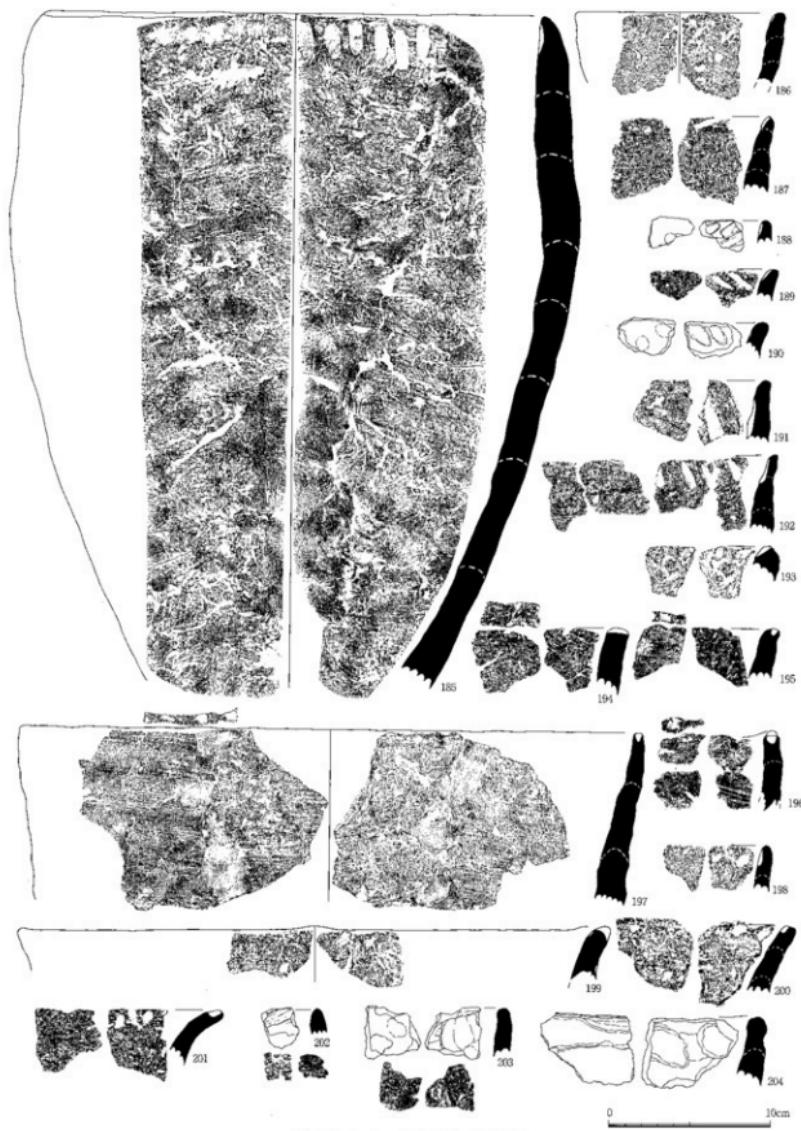
押型文土器口縁部である。口縁部に欄状文を有する。内外面に山形文を有する。226・227・231・232は口縁部外面に無文帯を有し、その下に山形文を配している。231・232に関しては欄状文を山形文施文後に施し、一部2段の欄状文となっている。

2類c種iv…233

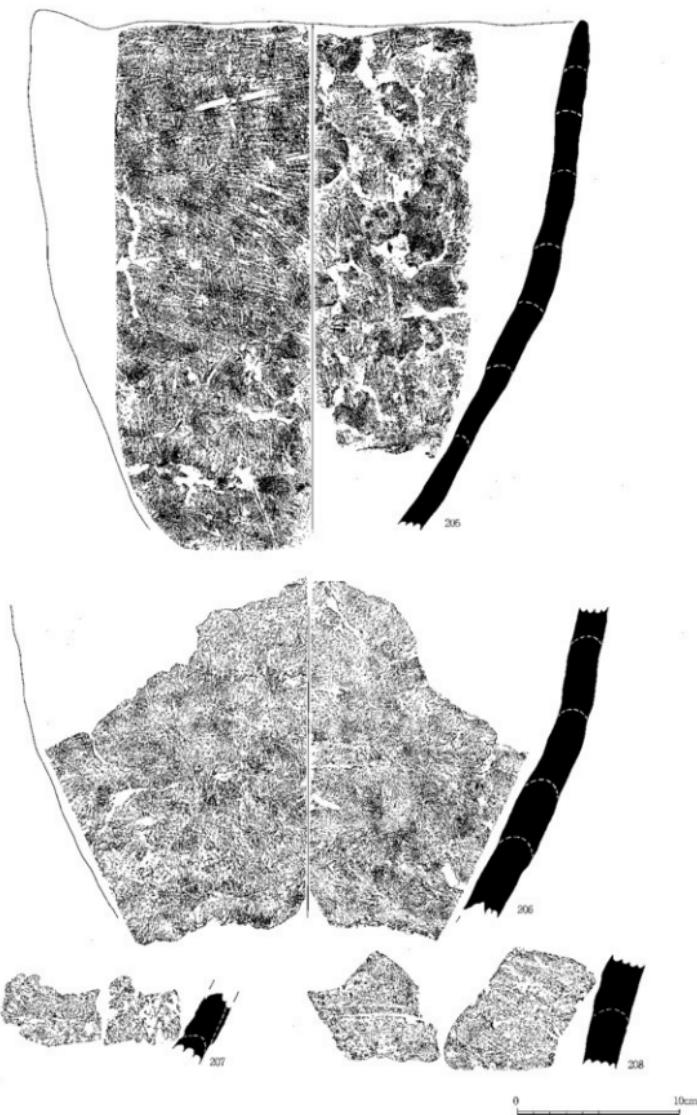
押型文土器口縁部である。口縁部に欄状文を有する。内外面にポジティヴ楕円文を有する。外面の楕円文は縦位である。



第28図 SK2造構図及び出土遺物実測図①



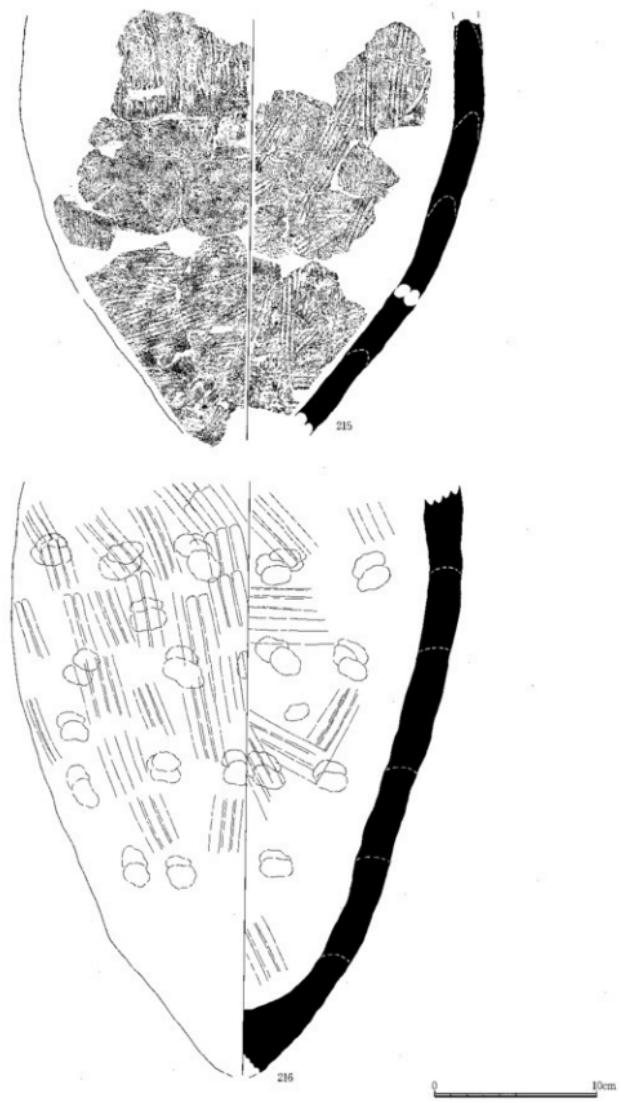
第29図 SK2出土遺物実測図②



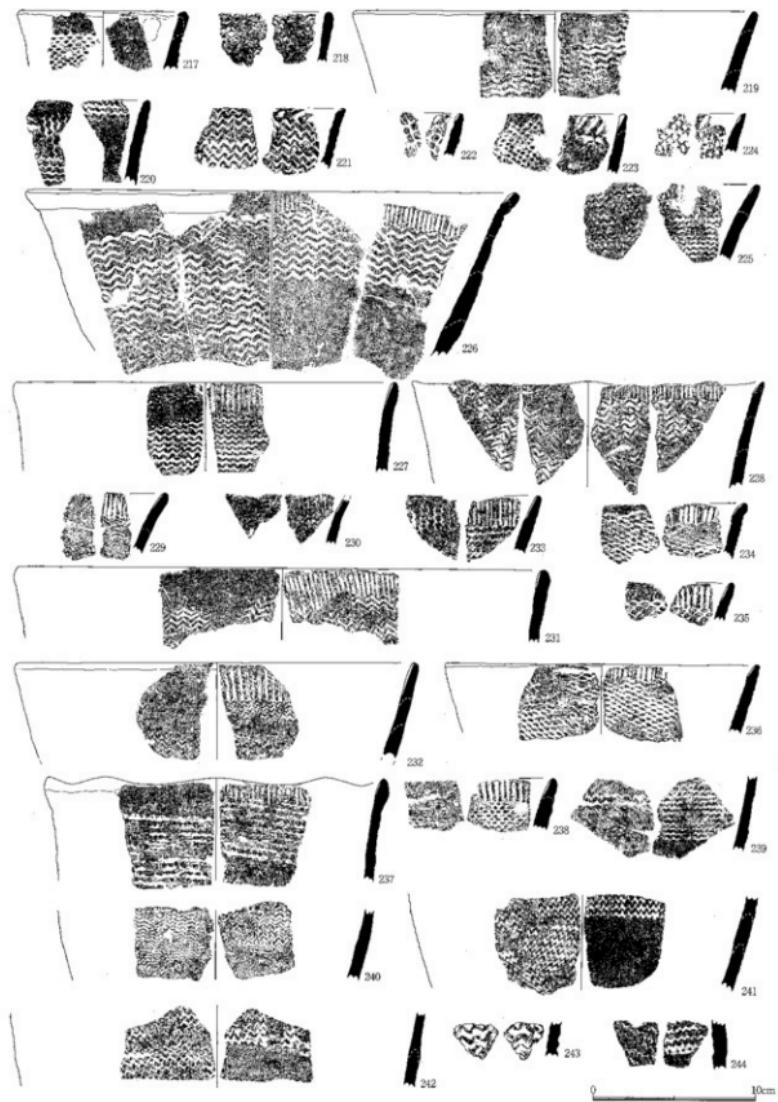
第30図 SK2出土遺物実測図③



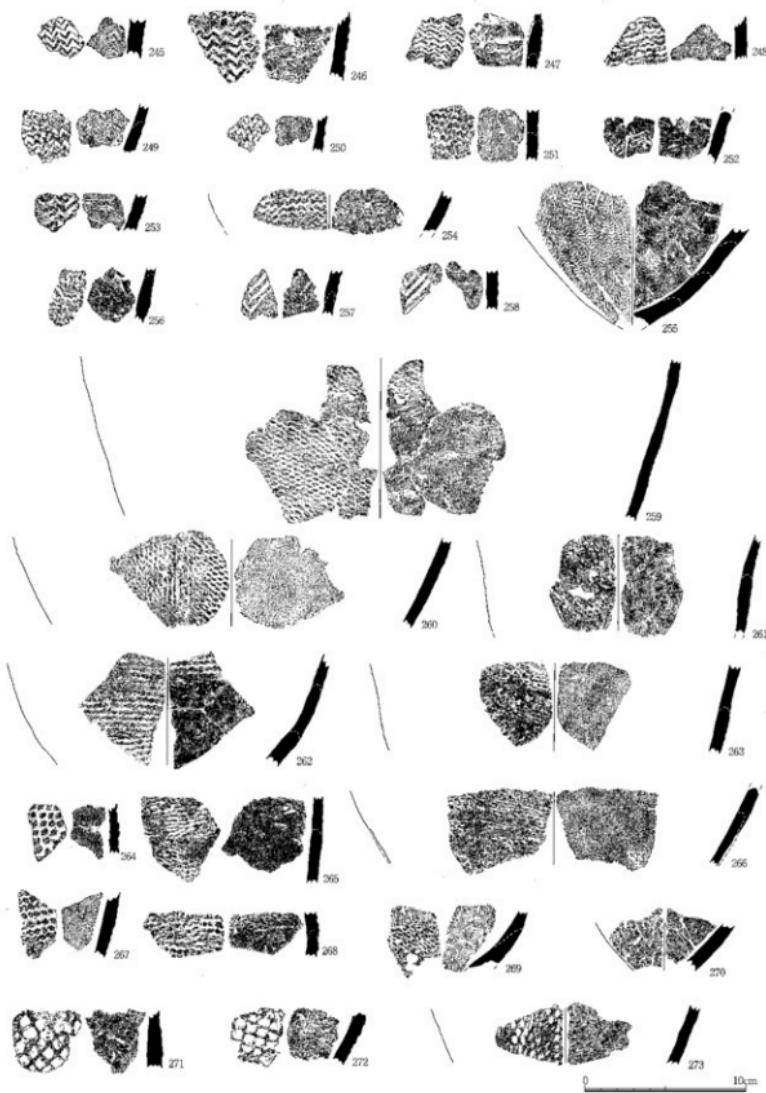
第31図 SK2出土遺物実測図④



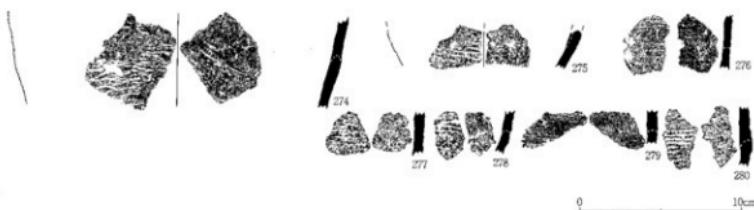
第32図 SK2出土遺物実測図⑤



第33図 SK2出土遺物実測図⑥



第34図 SK2出土遺物実測図⑦



第35図 SK2出土遺物実測図⑥

2類c種iv…234～238

押型文土器口縁部である。口縁部に横状文を有する。内外面にポジティヴ捺円文を有する。234・236は同一個体と考えられる。237は外面の口縁部下に無文帯を有し、その下に連珠状の捺円文を有する。238の外面は摩滅している。

3類ii…239～256

押型文土器胴部である。外面に山形文を有する。内面に文様を有するものは口縁部近である。243・245・248・251・253・256は胎土に纖維を混入させる。244は胎土に金雲母を混入させる。

3類vii…257・258

沈線文を有する土器の胴部である。モチーフは山形文であり、いずれも胎土に纖維を混入させる。

3類iv…259～270

押型文土器胴部である。外面にポジティヴ捺円押型文を有する。内面に文様を有するものは口縁部近辺の破片である。259・260は同一個体の可能性が考えられる。捺円文が比較的大ぶりなものとして264・267が挙げられ、268は連珠状を呈する。264・268は胎土に纖維を混入させる。

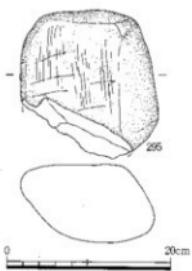
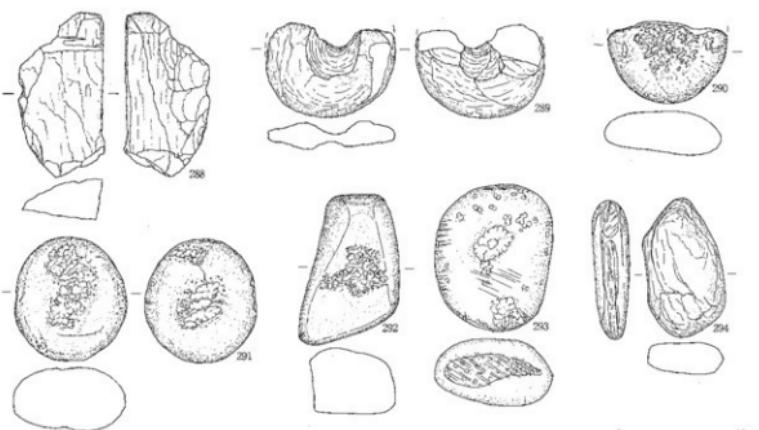
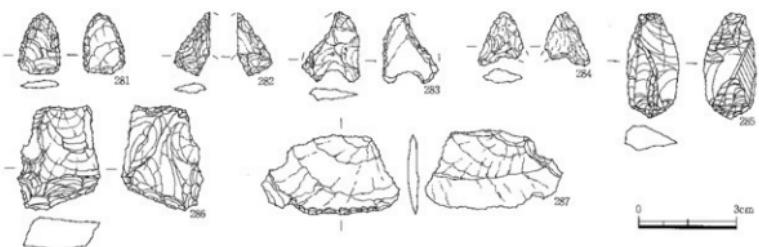
3類viii…271～273

押型文土器胴部である。外面に格子目押型文を有する。271・272は同一固体と考えられる。273は豆粒状を呈する。いずれも胎土に纖維を混入させる。

3類ix…274～280

撚糸文土器胴部である。外面に撚糸文を有する。器面のマメツ及びナデ消しにより、撚りの方向が不鮮明なものが目立つが、274は1段1、280は1段の可能性が考えられる。

石器：281～284は石鎚である。285・286は楔形石器の可能性が考えられる。287は石斧の可能性が考えられる。288は礫石器であり、289は環状石斧の未完成品である。290～294は磨石ないし



第36図 SK2 出土遺物実測図⑨

は叩き石、295は石皿として考えられる。

遺物集中6(報No.296~309)

296~300は無文土器で、同一個体である。内外面に一部文様を意識したような二枚貝条痕調整を施し、外傾しながら立ち上がる。底部は尖底であるが、比較的丸く作成している。胎土に纖維を混入させる。

301は無文土器胴部である。内面に二枚貝条痕調整を施すが、外面は不明である。胎土に纖維を混入させる。

302は押型文土器口縁部である。内外面にナデ調整を施す。外面にポジティヴ楕円文、内面に樹状文とその下にポジティヴ楕円文を有する。

303・304は押型文土器胴部である。内外面にナデ調整を施す。いずれも不鮮明であるが、303は外面に山形文を、304は外面に楕円文を有する。305は無文であると考えられる。

306・307は磨石と叩き石である。306は磨面を有し、下端には研磨による面取り加工を有する。307は破片であるが、浅い敲打痕を有する。

308・309は石皿と台石である。308は溝状の敲打痕を有し、309は磨面を有する。

SK4(報No.310・311)

E3グリッドに位置し、長軸115cm、短軸109cm、深さ30cmを測り、円形に近い遺構である。埋土は3層に分けられ、基本的に砂質シルトであるが、1は黒褐色、2は暗褐色、3は暗褐色であるが、SK4を掘り込む別の遺構の埋土である可能性を指摘できる。壁面に人頭大の礫を配していた。

310は無文土器胴部である。内外面は二枚貝条痕調整の後ナデ調整を施している。

311は石鐵で、サスカイト製である。

SK5(報No.312~314)

D1グリッドに位置し、長軸116cm、短軸94cm、深さ23cmを測り、楕円形の遺構である。埋土は黒褐色(10YR3/1)である。

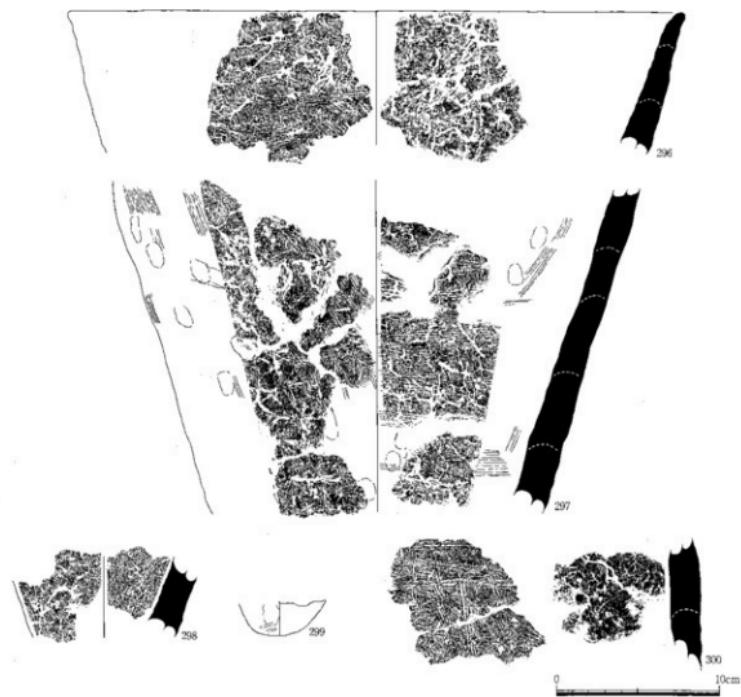
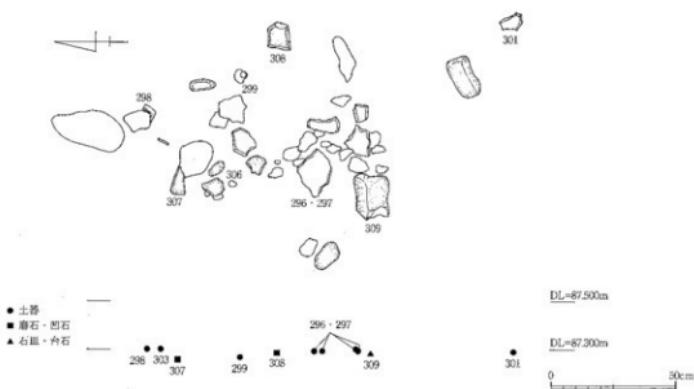
312は無文土器胴部で、内外面に二枚貝条痕調整を施し、胎土に纖維を混入させる。

313は押型文土器胴部で、内外面にナデ調整を施し、外面に間延びした山形文を有する。

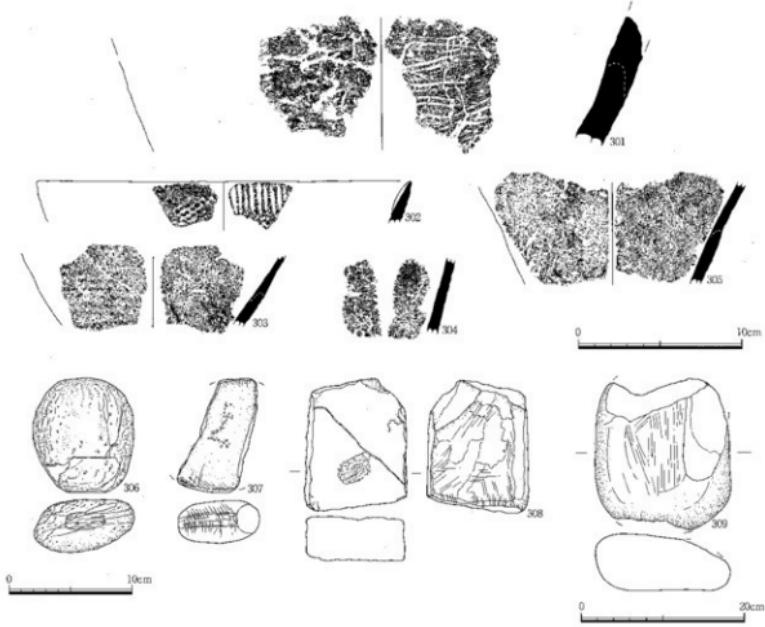
314は沈線文土器口縁部で、内外面にナデ調整を施し、外面には山形状の沈線文を有し、口縁部内面に左斜行キザミを有する。口縁は波状を呈する可能性が考えられる。

SK7

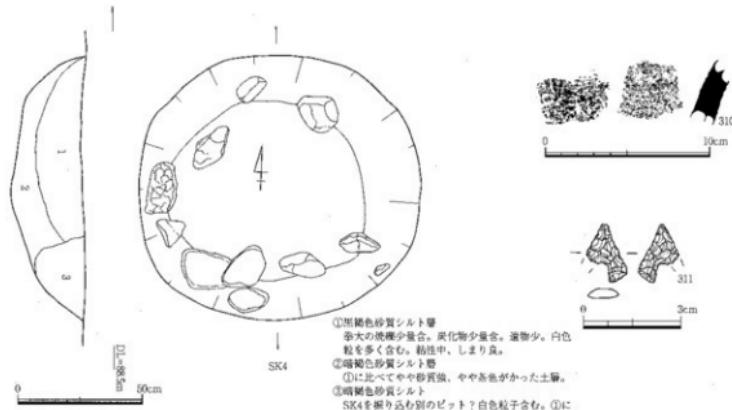
C2グリッド南西端に位置し、長軸56cm、短軸53cm、深さ15cmを測り、やや歪んだ円形の遺構である。埋土は黒褐色(7.5YR3/1)であり、遺物は確認できなかったが、埋土に礫を多く含んでおり、中央に人頭大の礫を配置していた。



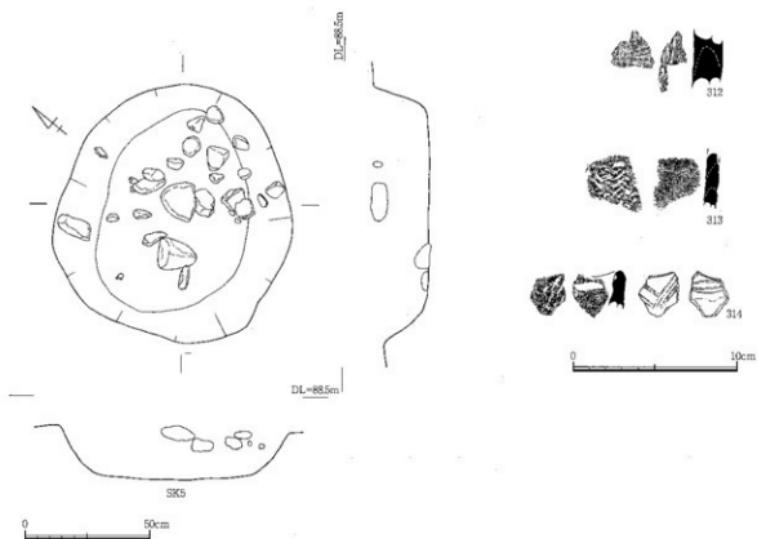
第37図 遺物集中6遺構図及び出土遺物実測図①



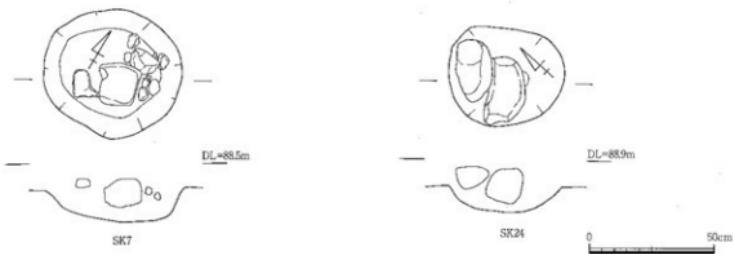
第38図 遺物集中6出土遺物実測図②



第39図 SK4 遺構図及び出土遺物実測図



第40図 SK5 遺構図及び出土遺物実測図



第41図 SK7・24 遺構図

SK24

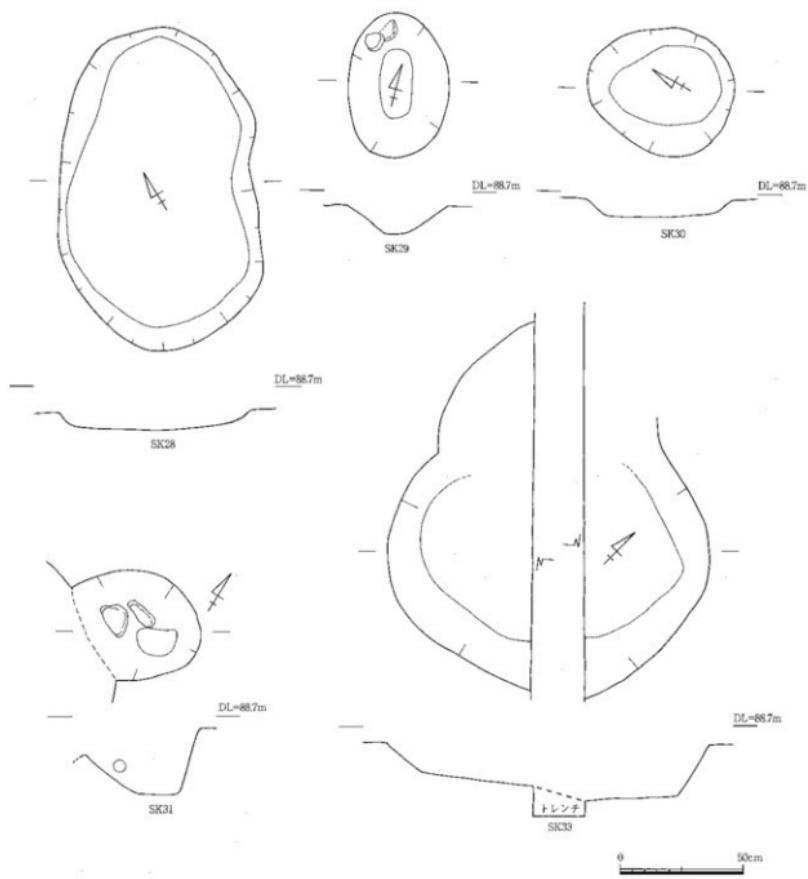
D 6 グリッド西に位置し、長軸 49 cm、短軸 43 cm、深さ 11 cmを測り、やや歪んだ円形の遺構である。埋土は黒褐色(10YR2/3)であり、出土遺物は確認できたが、図示できなかった。

SK28

D4グリッド西に位置し、長軸133cm、短軸79cm、深さ8cmを測り、やや歪んだ長椭円形の遺構である。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)であり、遺物は確認できなかった。

SK29

D5グリッドのほぼ中央に位置し、長軸59cm、短軸41cm、深さ12cmを測り、梢円形の遺構である。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)であり、遺物は確認できなかった。



第42図 SK28～31・33 遺構図

SK30

C5 グリッドの南端に位置し、長軸 60 cm、短軸 52 cm、深さ 8 cm を測り、やや歪んだ卵形の遺構である。埋土は黒褐色(10YR3/2)であり、遺物は確認できなかった。

SK31

C4 グリッドの東端に位置し、長軸は不明、短軸は 45 cm、深さ 28 cm を測り、やや歪んだ楕円形の遺構である。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)であり、遺物は確認できなかった。

遺物集中 23(報No 315 ~ 317)

礫を配置した遺構であり、礫を取り上げた後に浅い掘り込みが確認された。埋土は黒色(2.5Y2/1)である。

315 は両端を打ち欠いており、刃部状を呈する。磨面も認められるため、磨石の可能性も考えられる。

316・317 は石皿ないしは台石として考えられる。316 は磨面を、317 は浅い敲打痕と磨面を有する。

SK32(報No 318 ~ 324)

D5 グリッド及び D6 グリッドに位置し、長軸 142 cm、短軸 98 cm、深さ 18 cm を測り、長楕円状の遺構であり、埋土は黒褐(2.5Y3/1)である。西端に緑色片岩を立て、その下に短冊状の礫を配置していた。自然石を配置したものと考えられる。

318 は無文土器口縁部である。内外面にナデ調整を施す。やや外傾しながら立ち上がり、内面に左斜行キザミを有する。胎土に纖維を混入させる。

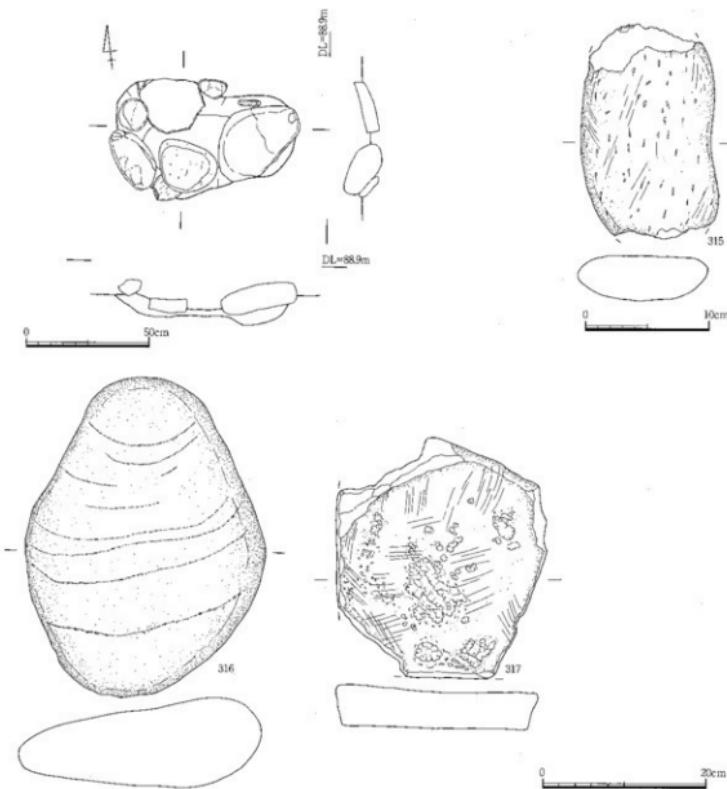
319 ~ 322 は無文土器胴部である。319 ~ 321 は内外面にナデ調整を、322 は内外面に二枚貝条痕調整の後ナデ調整を施す。いずれも胎土に纖維を混入させる。

323 は押型文土器口縁部である。内外面にナデ調整を施す。外面に山形文及び内面に左斜行キザミを有する。胎土に纖維を混入させる。

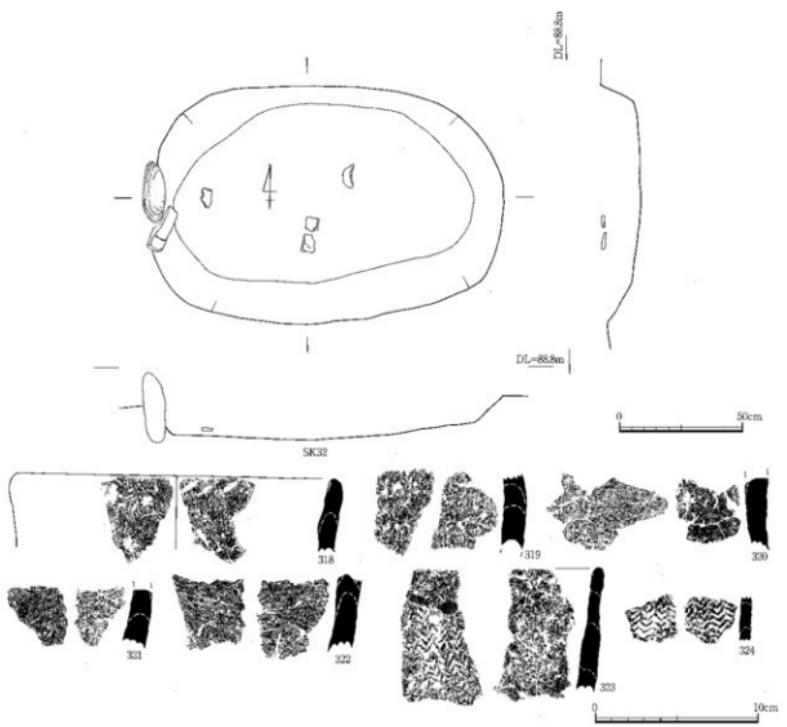
324 は押型文土器胴部である。内外面にナデ調整を施す。内外面に山形文を有するため、口縁部付近の破片と考えられる。

SK33

C5 グリッド南西端に位置し、長軸 132 cm、深さ 24 cm を測る。短軸は不明である。歪んだ楕円形の遺構であり、埋土は黒褐色(2.5Y3/2)である。遺物は確認できなかった。



第43図 遺物集中23 遺構図及び出土遺物実測図



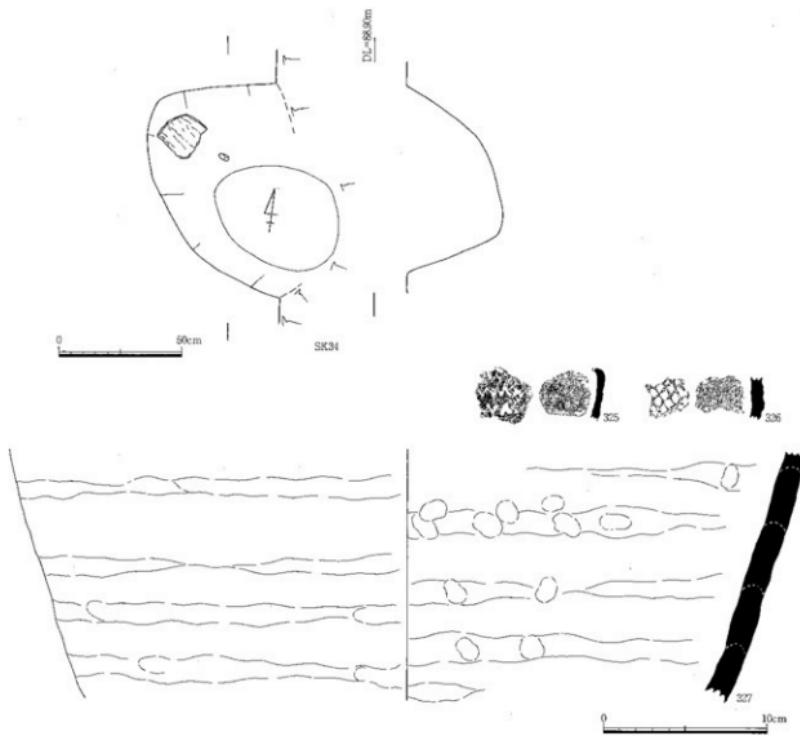
第44図 SK32遺構図及び出土遺物実測図

SK34(報No.325～327)

D6グリッド北端に位置し、調査区東端のトレンチにより半分以上破壊された遺構である。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)である。

325・326は押型文土器胴部である。内外面にナデ調整を施す。325は口縁部の可能性が考えられ、外面に山形文を有する。326は外面に格子目文を有する。いずれも胎土に纖維を混入させる。

327は無文土器胴部である。内外面にナデ調整を施す。胎土に纖維を混入させる。



第45図 SK34 遺構図及び出土遺物実測図

SK35(報№328～336)

D6グリッドのはば中央に、長軸116cm、短軸83cm、深さ27cmを測る、楕円状の遺構である。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)である。

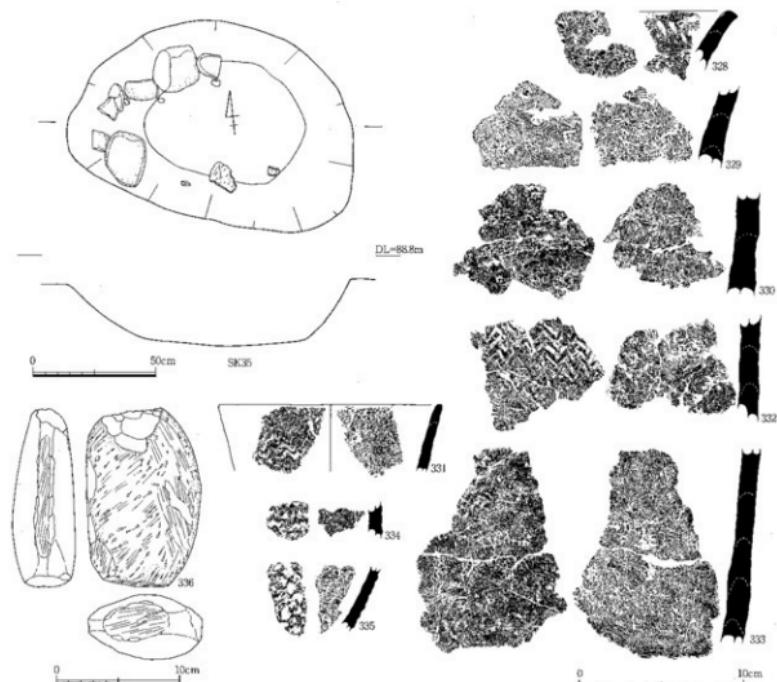
328は無文土器口縁部である。内外面にナデ調整を施す。外反しながら立ち上がり、内面に右斜行キザミ及び口唇部に強い面取りを有する。胎土に纖維を混入させる。

329・330は無文土器胴部である。内外面にナデ調整を施す。胎土に纖維を混入させる。

331は押型文土器口縁部である。調整は摩滅により不明である。外面に山形文を有する。

332～335は押型文土器胴部である。332・333は同一個体と考えられる。内面に二枚貝条痕調整の後にナデ調整を、外面にナデ調整を施し、いずれも外面に山形文を有する。334は内外面にナデ調整を施し、外面に山形文を有する。335は内外面にナデ調整を施し、外面に不鮮明な格子目文を有する。いずれも胎土に纖維を混入させる。

336は磨石である。緑色片岩製で、表裏に浅い敲打痕と磨面を有する。下端は敲打による面取り加工を施し、上端には大きい剥離が遺されている。



第46図 SK35 遺構図及び出土遺物実測図

SK36(報No.337・338)

D6グリッド北端に位置し、調査区東端トレンチに破壊されており、埋土は、黒褐色(5YR2/1)である。SK34より古い。

337は石皿として考えられる。敲打痕を有し、一部被熱している。

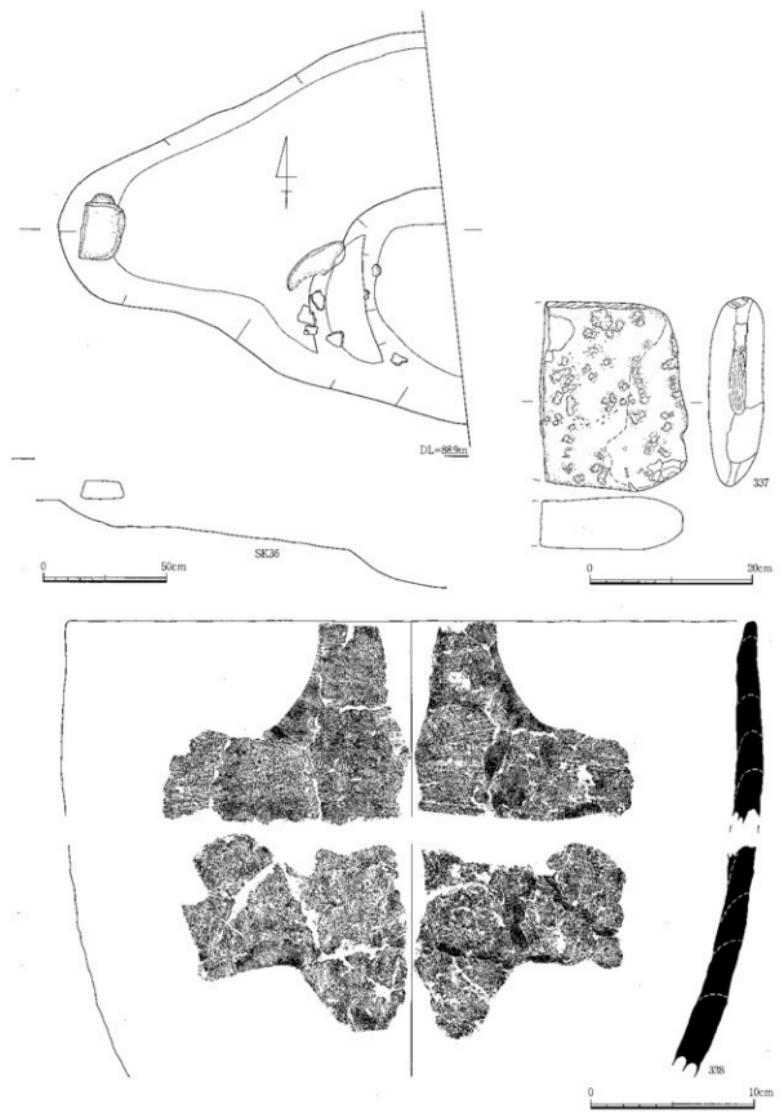
338は無文土器である。内外面にナデ調整を施す。砲弾型の器形を呈し、胴上部に最大径を有し、内湾気味に立ち上がる。

SK37

D6グリッドに位置し、長軸105cm、短軸71cm、深さ14cmを測り、歪んだ橢円形の遺構である。埋土は黒褐色(7.5YR3/1)で、遺物は確認できなかった。



第47図 SK37遺構図

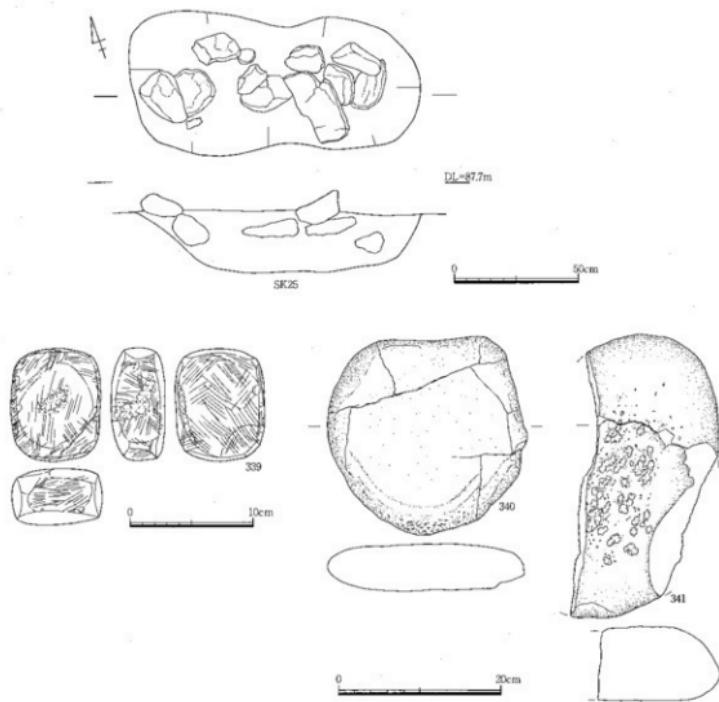


第48図 SK36 遺構図及び出土遺物実測図

SK25(報No 339～341)

E5グリッド北に位置し、長軸117cm、短軸54cm、深さ25cmを測り、瓢形の遺構である。埋土はオリーブ黒色(7.5Y3/1)である。遺構内に砾及び石器が見られ、埋納遺構として考えられる。

339は磨石である。側縁を4面とも敲打及び研磨により面取り加工を有する。そのため石錐型磨石として考えられる。両面に研磨が見られるが、溝状の使用痕が片面のみに見られる。楔形石器の使用痕の可能性も考えられる。



第49図 SK25 遺構図及び出土遺物実測図

第3節 6層上面検出遺構(遺物集中 20・38)

遺物集中 20(報No 342～349)

最大幅 190 cm、最小幅 80 cm の規模で広がりを持つ遺構である。石垣建築のために搅乱を受けている可能性が高い。

342～345 は無文土器胴部である。内外面に二枚貝条痕調整を施し、いずれも胎土に繊維を混入させる。同一個体と考えられる。

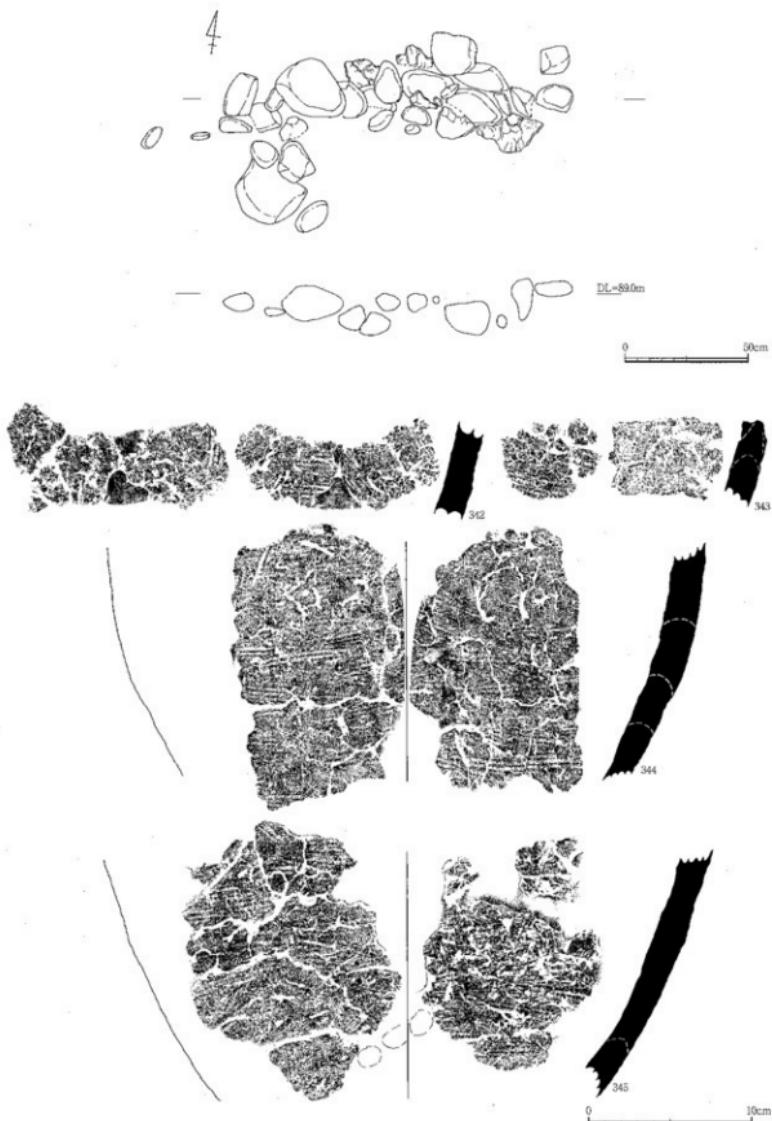
346 は磨石である。表面に浅い敲打痕と磨面を有するとともに、両側縁に研磨による面取り加工を有する。

347～349 は石皿・台石である。348 は敲打痕が顕著である。

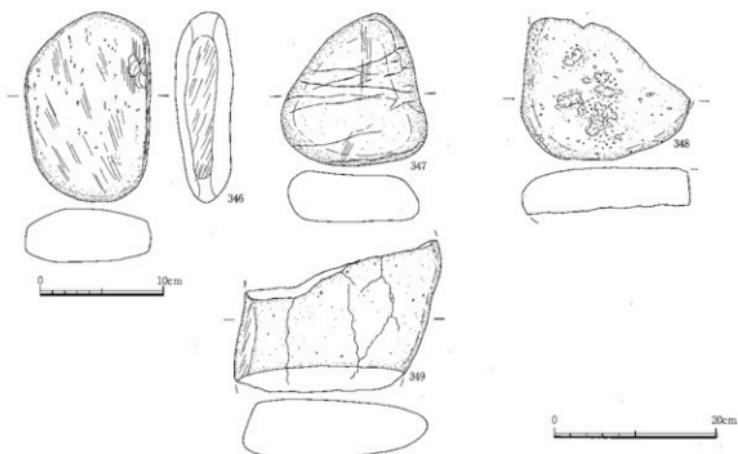
遺物集中 38(報No 350・351)

最大幅 55 cm、最小幅 45 cm の範囲に広がる遺構である。石垣建設のために搅乱による破壊を受けている可能性が高い。

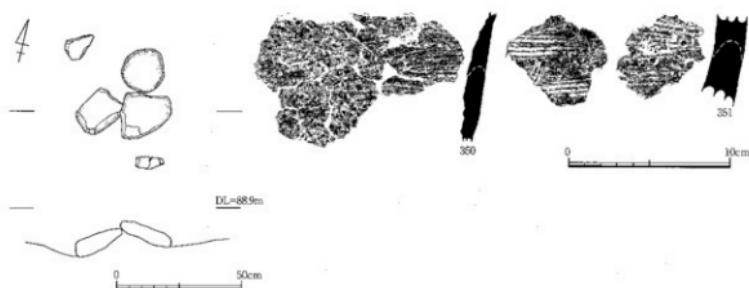
350・351 は無文土器胴部である。内外面に二枚貝条痕調整を施す。態度に繊維を混入させ、同一個体と考えられる。



第50図 遺物集中20遺構図及び出土遺物実測図①



第51図 遺物集中20出土遺物実測図②



第52図 遺物集中38構造図及び出土遺物実測図

第V章 香北町 剣谷我野遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第Ⅰ節 剑谷我野遺跡における火山灰分析

1. はじめに

四国地方南部高知県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、姶良、鬼界、阿多、阿蘇、九重など九州地方の火山に由来するテフラ(火山碎屑物、いわゆる火山灰)が数多く認められる。さらに中期更新世に遡れば、中部地方の火山に由来するテフラなども検出される可能性がある。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができるようになっている。

そこで香北町剣谷我野遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象として火山ガラス比分析と屈折率測定を行い、指標テフラの検出同定を試みることになった。試料採取が行われた地点は、調査区東壁北地点および調査区東壁南地点の2地点である。

2. 土層の層序

(1) 調査区東壁北地点(第53図)

調査区東壁北地点では、下位より灰色砂層(層厚19cm、10層)、砂混じり褐色粘質土(層厚29cm、9層)、亜円礫を少量含む灰色砂層(層厚16cm、礫の最大径37mm、8層)、灰色砂質土(層厚15cm、7層)、若干色調が暗い灰色砂質土(層厚3cm、6層)、暗灰色砂質土(層厚6cm、5層)、砂混じり暗灰褐色土(層厚12cm、4層)、暗灰褐色土(層厚11cm、3-4層)、黒灰褐色土(層厚12cm、3層)、灰色土(層厚3cm、2層)、灰色作土(層厚16cm、1層)が認められる(図1)。発掘調査では、これらのうち4層から縄文時代早期前～中葉の遺物が検出されている。

(2) 調査区東壁南地点(第54図)

調査区東壁南地点では、下位より砂混じり褐色粘質土(層厚11cm以上、9層)、灰色砂層(層厚21cm、8層)、灰色砂質土(層厚7cm、7層)、若干色調が暗い灰色砂質土(層厚9cm、6層)、暗灰色砂質土(層厚11cm、5層)、亜円礫を含む砂混じり暗灰褐色土(層厚21cm、4層)、亜円礫混じり黒灰褐色土(層厚13cm、礫の最大径14mm、3層)、灰色土(層厚2cm、2層)が認められる(図2)。ここでは、4層の上半部から縄文時代早期前～中葉の遺物が検出されている。

3. 火山ガラス比分析

調査区東壁南地点において、基本的に5cmごとに設定採取された点の試料を対象に火山ガラス比分析を行い、試料に含まれる火山ガラスの特徴や量の層位的変化を把握した。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料 12gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により 1/4-1/8mmの粒子を箇別。
- 5) 偏光顯微鏡下で 250 粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別比率を求める。

(1) 分析結果

火山ガラス比分析の結果を、ダイヤグラムにして第55図に示す。またその内訳を第1表に示す。全体としていずれの試料にも砂が比較的多く含まれており、火山ガラスの比率は高くない。しかしながら、試料13および試料3には無色透明のバブル型ガラスがごくわずかに認められる(各0.4%)。さらに試料1には、無色透明のバブル型ガラス(0.4%)のほかに、褐色のバブル型ガラスが含まれている(0.8%)。火山ガラスの量は少ないながらも、試料1から褐色のバブル型ガラスが検出されたことは注目に値すると考えられる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

現段階における火山灰編年学において、指標テフラとの同定には、一般に小規模な噴火に由来するスコリアや岩片に富むテフラを除くテフラについては、テフラ粒子の屈折率測定が必須になっていている。そこで、とくに特徴的な火山ガラスが確認された調査区東壁南地点の試料3と試料1を対象として、温度変化型屈折率測定装置(RIMS2000)により火山ガラスの屈折率測定を試みた。

(2) 測定結果

試料3および試料1のいずれの試料においても、含まれる火山ガラスの量が少ないので、屈折率(n)の正確なrangeを求めることは困難である。ただ、試料2と試料1に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、各々1.512 ± 1.510 ± である。

5. 考察

調査区東壁南地点の試料3と試料1(3層)から検出された火山ガラスのうち、少なくとも褐色のバブル型ガラスについては、その色調や形態さらに屈折率などから、約6,300年前^{*1}に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、町田・新井、1978)に由来すると考えられる。検出された量が非常に少ないとから、その降灰層準を精度よく求めることは難しいが、とくに火山ガラスの色調や産状さらに屈折率などから、3層付近にK-Ahの降灰層準があると思われる。

一方、無色透明のバブル型火山ガラスの一部、とくに下位にある試料13(8層)のバブル型ガラスについては、その特徴から約2.4~25万年前^{*1}に姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰(AT、町田・新井、1976、1992、松本ほか、1987、村山ほか、1993、池田ほか、1995)に由来する可能性がある。以上のことから、東壁南地点の4層上部に濃集する遺物については、ATより上位で、

K-Ahより下位にあると思われる。このことは、土坑(SK 2)から検出された炭化種子の補正放射性炭素(¹⁴C)年代が、 8820 ± 60 y.BP(Beta-198719)であること(後述)と矛盾しない。

なお上記のテフラ以外にも、高知県域土佐湾南西岸の中位海成段丘堆積物中に約95万年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界葛原テフラ(K-Tz, Nagaoka, 1988、町田ほか、1983、太田・小田切、1994、町田・新井、2003)が認められている。また高知県宿毛市域では、約5万年前に九重火山から噴出した九重第1テフラ(Kj-P1、町田、1980、奥野ほか、1998)が近年発見された(熊原・長岡、2002)^{*2}。さらにATより下位にある始良火山起源のテフラや、ATの前後に層位のある三瓶火山や大山火山に由来するテフラが高知県域で検出される可能性も否定できない。土層の堆積状況の良い地点においては、詳細な分析を行って、指標テフラに関する情報を収集しておく必要がある。

6. 小結

刈谷我野遺跡において地質調査、火山ガラス比分析、屈折率測定を行った。その結果、縄文時代早期の遺物が集中する土層より上位に、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、約6,300年前^{*1})の降灰層準があると考えられる。

*1 放射性炭素(¹⁴C)年代、曆年較正年代については、ATが約2.6～2.9万年前、K-Ahが約7,300年前と考えられている(町田・新井、2003)。

*2 熊原・長岡(2002)では、鎌田ほか(1998)のFT年代をもとに、Kj-P1の年代を7～8万年前と推定している。

文献

- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫(1995)南九州、始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火碎流中の炭化樹木の加速器質量分析法による¹⁴C年代。第四紀研究、34、p.377-379。
- 鎌田弘毅・檀原 徹・伊藤順一・星住英夫・川辺祐久(1998)九重火山起源の宮城・下坂田・飯田火碎流堆積物のジルコンのフィッショングラフ年代。火山、43、p.69-73。
- 熊原康博・長岡信治(2002)四国南西部における九重第一テフラの対比と低位段丘の年代。第四紀研究、41、p.213-219。
- 町田 洋(1980)岩戸遺跡のテフラ(火山灰)。坂田邦洋編「大分県清川村岩戸における後期旧石器文化の研究」、広雅堂書店、p.443-454。
- 町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義。科学、46、p.339-347。
- 町田 洋・新井房夫(1978)南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-アカホヤ火山灰。第四紀研究、17、p.143-163。
- 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス。東京大学出版会、276p.
- 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス。東京大学出版会、336p.
- 町田 洋・新井房夫・長岡信治(1983)広域テフラによる南関東と南九州の後期更新世海成段丘の対比。日本第四紀学会講演要旨集、no.13、p.45-46。
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗(1987)始良Tn火山灰(AT)の¹⁴C年代。第四紀研究、26、p.79-83。
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦(1993)四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討-タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の¹⁴C年代。地質雑誌、99、p.787-798。

Nagaoka, S.(1968) The late Quaternary tephra layers from the caldera volcanoes in and around Kagoshima Bay, southern Kyushu, Japan. Geogr. Rept Tokyo Metropol. Univ. 23, p.49-122.

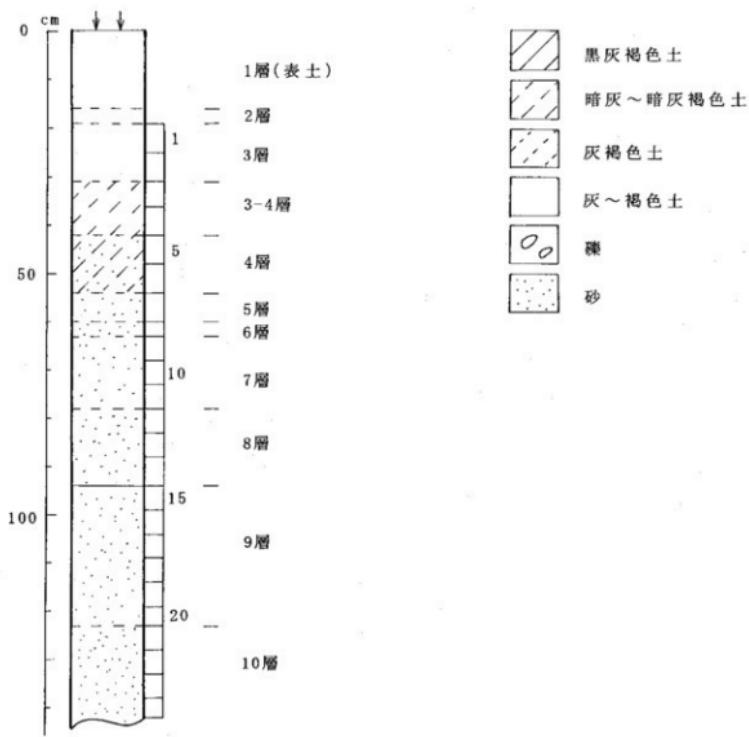
奥野 充・中村俊夫・鎌田弘毅・小野晃司・星住英夫(1998)九重火山、飯田火砕流堆積物の加速器¹⁴C年代。火山、43, p.75-79.

太田陽子・小田切聰子(1994)土佐湾南西岸の海成段丘と第四紀後期の地殻変動。地学雑、103, p.243-267.

第1表 東壁南地点の火山ガラス比分析結果

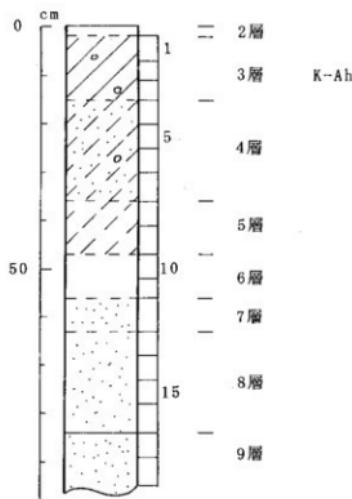
試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	sc	その他	合計
1	1	0	2	0	0	0	0	250	250
3	1	0	0	0	0	0	0	250	250
5	0	0	0	0	0	0	0	250	250
7	0	0	0	0	0	0	0	250	250
9	0	0	0	0	0	0	0	250	250
11	0	0	0	0	0	0	0	250	250
13	1	0	0	0	0	0	0	250	250
15	0	0	0	0	0	0	0	250	250
17	0	0	0	0	0	0	0	250	250

数字は粒子数。 bw : バブル型、 md : 中間型、 pm : 軽石型、 cl : 透明、 pb : 淡褐色、 br : 褐色、 sp : スポンジ状、 fb : 繊維束状、 sc : スコリア



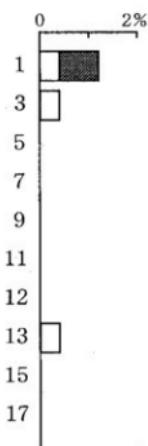
第53図 調査区東壁北地点の土層柱状図

数字はテフラ分析の試料番号



第54図 調査区東壁南地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

火山ガラス比



- [White square] バブル型（無色透明）
- [Dotted square] バブル型（淡褐色）
- [Solid black square] バブル型（褐色）
- [Horizontal striped square] 中間型
- [Diagonal striped square] 軽石型（スポンジ状）
- [Vertical striped square] 軽石型（繊維束状）

第55図 東壁南地点の火山ガラス比ダイヤグラム

第2節 剣谷我野遺跡における放射性炭素年代測定

第2表 試料と方法

試料名	地點	種類	前処理・調整	測定法
No 1	SK 2	炭化種子	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	AMS

AMS : 加速器質量分析法(Accelerator Mass Spectrometry)

第3表 測定結果

試料名	測定 No (Beta-)	14C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	補正 14C年代 (年BP)	暦年代(西暦) ($1\sigma:68\%$ 確率、 $2\sigma:95\%$ 確率)
No 1	198719	8840 ± 60	-26.0	8820 ± 60	交点: cal BC 7950 1σ : cal BC 8170 ~ 8120, 7990 ~ 7780 2σ : cal BC 8210 ~ 7720

(1) 14 C年代測定値

試料の $14\text{C}/12\text{C}$ 比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。 14C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $14\text{C}/12\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($13\text{C}/12\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(%)で表す。

(3) 補正 14 C年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $14\text{C}/12\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25(%) に標準化することによって得られる年代である。

(4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 14C 濃度の変動を較正することにより算出した年代(西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の 14C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と 14C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約 19,000 年 BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000 年 BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 14C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ (68%

確率)と 2σ (95%確率)は、補正 $14C$ 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

3. 所見

加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定の結果、SK 2 の炭化種子では 8820 ± 60 年BP(1 σ の暦年代で BC8170 ~ 8120, 7990 ~ 7780 年)の年代値が得られた。放射性炭素年代測定値よりも暦年代の年代幅がかなり大きくなっているが、これは該当時期の暦年代較正曲線が不安定なためである。

文献

- Stuiver et al. (1998). INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.
中村俊夫(1999)放射性炭素法、考古学のための年代測定学入門、古今書院、p.1-36.

第3節 剣谷我野遺跡における樹種同定(図版31)

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、縄文時代早期とされるSK 2 から出土した炭化材 6 点である。

3. 方法

試料を剖析して、炭化材の新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柾目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって 50 ~ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す(図版31)。以下に同定根拠となった特徴を記す。

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 図版31-1

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面:早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。放射断面:放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で 1

分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し2本対になる傾向を示す。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には2本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質より、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の濟州島に分布する常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬、弾性強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

クルミ属 *Juglans* クルミ科 図版31-2

横断面：大型で丸い道管が単独あるいは2～数個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材である。早材から晩材にかけて道管の径は徐々に減少する。軸方向柔細胞が多少波打ちながら短接線状に1列に並び、網状柔組織をつくる傾向がある。放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の形質よりクルミ属に同定される。クルミ属にはオニグルミ、ヒメグルミがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15～30m、径70～90cmである。材は耐朽性、保存性は低いが、狂いが少なく韌性に富んでいて、建築、器具、彫刻など広く用いられる。

ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科 図版31-3

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圈部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらんでいる。接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靭で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

5. 所見

分析の結果、SK2から出土した炭化材は、クルミ属4点、カヤ1点、ケヤキ1点と同定された。カヤは谷沿いなどのやや湿润なところに生育する常緑高木であり、クルミ属、ケヤキは、谷沿いなどの適地を好む落葉高木である。いずれの樹種も温帯に広く分布し、気候要因とはならないが、近隣にこれらの生育する谷および谷沿いの湿润な環境が分布していたと推定される。

文献

- 佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.
佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.
島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296

第4節 剣谷我野遺跡における種実同定(図版32)

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

2. 試料

試料は、縄文時代早期とされるSK2から出土した種実である。

3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

分析の結果、SK2から出土した種実はコナラ属クヌギ節と同定された。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* 炭化子葉 ブナ科

基部は明灰褐色、上部は濃褐色で表面には縦線条が密に並ぶ。花柱基部の伏毛は淡褐色。光沢は弱い。

5. 考察

SK2から出土した種実は、コナラ属クヌギ節と同定された。クヌギ節は、温帯下部の暖温帯の人里などのやや乾燥した人為地に多い樹木である。クヌギ節の堅果(ドングリ)については、アク抜きをして食用とする民俗伝承がないことから、食用としては利用されなかった可能性が考えられる(渡辺、1975)。

文献

- 南木謙彦(1993)葉・果実・種子. 日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p.276-283.
渡辺誠(1975)縄文時代の植物食. 雄山閣、187p.

第5節 剣谷我野遺跡における植物珪酸体分析(図版33)

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山、2000)。

2. 試料

分析試料は、調査区東壁北地点および調査区東壁南地点の2地点から採取された計13点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーブ法(藤原、1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μmのガラスピーブを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550°C・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーブ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10~5g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。ススキ属(ススキ)の換算係数は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節型(チマキザサ節・チシマザサ節)は0.75、ミヤコザサ節は0.30である(杉山、2000)。タケア科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について

定量を行い、その結果を第4表および第56図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお、イネ科栽培植物(イネ、ムギ類、ヒエ、アワ、キビなど)および樹木(シイ属、イスノキ属、クスノキ科など)に由来する植物珪酸体は、いずれの試料からも検出されなかった。

〔イネ科〕

ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)

〔イネ科-タケ亜科〕

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

〔イネ科-その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

(2) 植物珪酸体の検出状況

1) 調査区東壁北地点(第56図)

下位の9層(試料9)では、植物珪酸体がほとんど検出されなかった。7層(試料6)では、メダケ節型、ネザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。6層(試料5)から5層(試料4)にかけては、ウシクサ族Aやミヤコザサ節型が出現している。4層(試料3)では、ネザサ節型が増加しており、植物珪酸体総数も大幅に増加している。3層(試料1)にかけても、おおむね同様の結果であり、3層ではススキ属型が出現している。おもな分類群の推定生産量によると、4層より上位ではネザサ節型が優勢となっている。

2) 調査区東壁南地点(第57図)

下位の9層(試料8)では、メダケ節型やネザサ節型が検出されたが、いずれも少量である。6層(試料5)から5層(試料4)にかけては、メダケ節型やネザサ節型が増加しており、ウシクサ族Aやミヤコザサ節型も出現している。4層(試料2、3)では、ネザサ節型が増加しており、植物珪酸体総数も大幅に増加している。3層(試料1)では、メダケ節型やネザサ節型がさらに増加している。おもな分類群の推定生産量によると、4層より上位ではネザサ節型が優勢であり、部分的にメダケ節型が多くなっている。

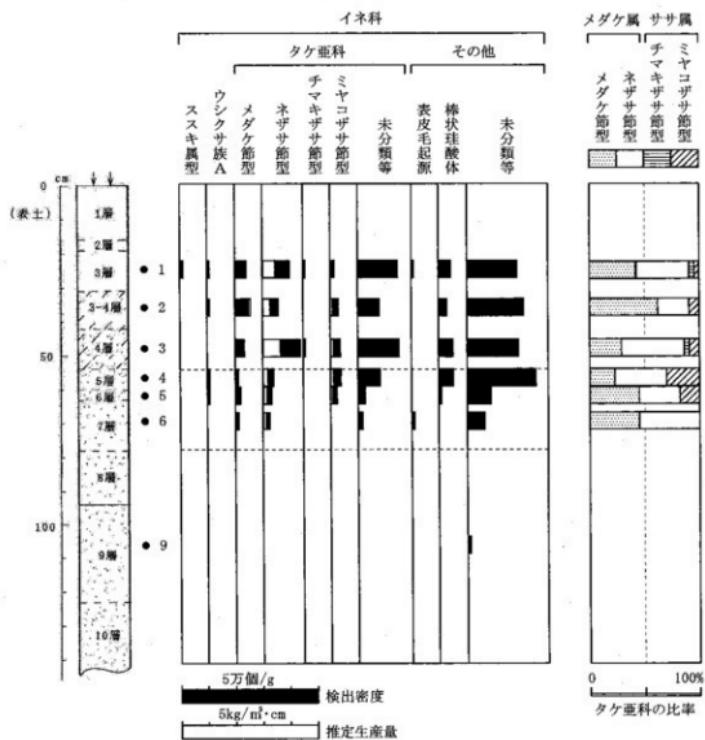
5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

縄文時代早期前～中葉の遺物包含層とされる4層の堆積当時は、メダケ属(メダケ節やネザサ節)を主体として、ウシクサ族なども見られるイネ科植生であったと考えられ、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、約7,300年前：較正年代)混の3層にかけても、おおむね同様の状況であったと推定される。

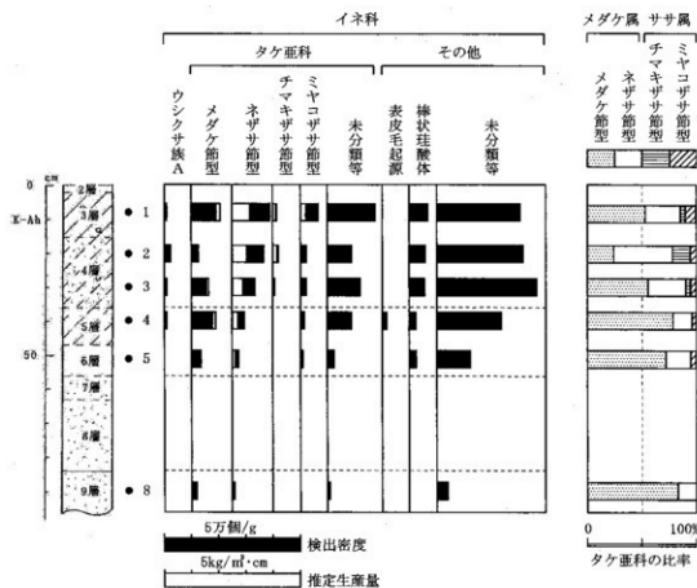
タケ亜科のうち、メダケ属は温暖、ササ属は寒冷の指標とされており、メダケ率(両者の推定生産量の比率)の変遷は、地球規模の氷期～間氷期サイクルの変動と一致することが知られている(杉山、2001)。ここでは、メダケ属(メダケ節やネザサ節)が優勢であることから、当時は比較的温暖な気候であったと推定される。

第4表 香北町 剣谷我野遺跡における植物珪酸体分析結果
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料	東豊北地点						東豊南地点				
			1	2	3	4	5	6	9	1	2	3	4
イネ科	Gramineae (Grasses)												
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	7	7	7	7	8			7	21	7	7	7
ワシクサ属A	<i>Andropogoneae A</i> type												
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)												
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	35	49	28	7	15	8	93	21	55	78	30	15
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	97	56	135	37	30	23	137	114	82	43	22	8
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	7	7					14	21	7			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	14	28	36	37	23		65	21	21	14	7	
未分類等	Others	145	77	149	80	23	15	173	86	117	85	22	8
その他のイネ科	Others												
表皮毛起源	Husk hair origin	7				8				14			
棒状毛體	Rod-shaped	42	28	50	51	8		65	57	55	21	22	
未分類等	Others	180	204	185	248	84	61	8	302	314	363	234	120
植物珪酸体総数	Total	540	450	591	467	190	114	8	856	657	706	496	224
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ·cm) : 試料の比重を1.0と仮定して算出													
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.09											
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.40	0.57	0.33	0.08	0.18	0.09		1.08	0.25	0.64	0.90	0.35
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.46	0.27	0.65	0.18	0.15	0.11		0.66	0.55	0.39	0.20	0.11
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.05		0.05				0.11	0.16	0.05			0.04
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.04	0.08	0.11	0.11	0.07		0.19	0.06	0.06	0.04	0.02	
タケ亜科の比率 (%)													
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	42	62	29	23	45	45	53	24	56	79	73	83
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	48	29	57	47	37	55	32	54	35	18	23	17
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	5		5				5	16	4			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	4	9	9	30	18		10	6	5	4	5	



第56図 香北町 剣谷我野遺跡東壁北地点における植物硅酸体分析結果



第57図 香北町 剣谷我野遺跡東壁南地点における植物珪酸体分析結果

文献

- 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール), 考古学と植物学, 同成社, p.189-213.
 杉山真二(2001)テフラと植物珪酸体分析, 月刊地球, 23: 645-650.
 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-, 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

第VI章 まとめ

第1節 遺構について

土坑28基、ピット2基、遺物集中9基を検出した。

4層上面で検出されたのは土坑11基(SK11～17・19～22)、ピット2基(Pit10・18)、遺物集中5基(遺物集中1～5)である。土坑及びピットの性格は不明である。

遺物集中1～5に関しては、出土した一部の石器に被熱赤変が認められたが、筆者が調査を引き継いだ時点での焼土及び炭化物の集中は確認できなかった。また、出土した石器の大多数が磨石・石皿であり、それらが密集した状態で検出された。これらの石器を通説どおりに植物質食料加工工具として解釈するならば、堅果類つまりドングリ等を食料にするための加工場として位置付けられる。また、それらの石器と共に土器が出土しており、堅果類の貯蔵・調理に使用された可能性が指摘できる。しかし、出土レベルに若干の差があるため、時期差を考慮すべきである。

次に5層上面で検出されたのは土坑17基(SK1・2・4・5・7・24・25・28～37)、遺物集中2基(遺物集中6・23)である。土坑については性格が不明なものが多数である。

SK2は、極めて大きな竪穴遺構であって、住居という見解と貯蔵穴という見解がある。この土坑と類似する遺構は岡山県中山西遺跡(下澤1995)で確認され、時期もほぼ一致する。また、福岡県柏原遺跡群(山崎1988)でも幾分時期が古くなるが、同規模の遺構が確認されており、共に住居址としての報告がある。

しかし、SK2を住居址として解釈するならば柱穴の問題及びテラス状の構造をなぜ有するのかという問題を解決しなければならない。また、貯蔵穴という解釈を行なうにしても、その大きさが当時のものとして妥当かどうかの問題を解決しなければならない。また、廃棄土坑の可能性も考えられる。それが元々廃棄土坑だったのか、住居ないしは貯蔵穴から転用されたかについては判断できないが、もし廃棄土坑ならば時期幅のある遺物が埋蔵される可能性が十分考えられる。とりあえず本報告では、住居址として認定し、今後の批判的検討を経て、位置付けがなされることを望む。

大きな問題は当遺構において、黄島式や稻荷山式とされる“押型文土器が盛行”すると考えられる時期の遺物と、それよりも古く位置付けられる無文土器が混在していた点である。この傾向は平成16年度発掘調査で検出された大形土坑(次年度報告予定。これはSK2に隣接し、規模がほとんど同じである)でも認められる。ところが、これらの遺構以外では黄島式ないしは稻荷山式とされる押型文土器と、それよりも古く位置付けられる無文土器の共伴は確認できないし、包含層中(次年度以降報告予定)においても管見の限り、黄島式と認定できる破片は多くない。よって、これらの土坑一括として認定するのは慎重になるべきである。

SK4に関しては、壁面に人頭大の襟を配置しており、墓等の祭祀遺構の可能性が調査当初より指摘されていた。当時の埋葬については愛媛県上黒岩岩陰遺跡での再葬例もあり、複雑な葬送儀礼が行われていた可能性が考えられる。

遺物集中23に関しては、一部被熱赤変の認められる石器が確認されているが、焼土面及び炭化

物の集中は確認されなかった。磨石・石皿の出土を鑑み、4層上面で検出された集石遺構と良く似た性格を有するものと考えられる。

SK25に関しては、出土したのは石器のみであり、磨石・石皿及び台石で構成されていた。意図的にこれらの石器を収めたものとして考へるならば、埋納遺構の可能性が指摘できる。

6層上面で検出されたのは遺物集中2基(遺物集中20・38)のみである。両者については攪乱を受けており、本来の時期及びその構造については不明である。しかし、押型文土器の出土が見られず、器壁が厚く、胎土に纖維を混入させていること及び二枚貝条痕調整を有することからして、無文土器盛行期の所産として考へられる。

刈谷我野遺跡の調査を通して明らかになった様相は、性格を明らかにできる遺構は限られているが、それぞれ今後の調査及び研究を進展させるうえで、極めて貴重な情報を与えてくれるものである。日本列島における一地域の住定初期の様相を考えるうえで極めて重要であり、土器や石器といった生活用具と、居住域・作業域等の空間の利用を合わせて考えていく必要がある。

第2節 遺物について

1. 刈谷我野遺跡出土の土器について

無文土器と押型文土器が出土している。包含層及び遺構出土遺物を総合させて概算してみると、全体の割合は無文土器が8割、押型文土器が2割である。よって、当遺跡では無文土器が圧倒的多数を占めると言える。しかし、5層上面で検出されたSK2から押型文土器と無文土器が混在して出土しているため、両者が並存していた可能性が当初考えられていた。

両者の関係をめぐって、共伴説・時期差説があり、近年大きな論争になっている。その論争を受け、それぞれの地方において再検討が必要になっており、四国もその例外ではない。当遺跡においては、まさにその問題に直面しており、その評価如何では今後の研究に大きな影響を持つと思われる。

本報告においては、多量に遺物の出土が見られたSK2の土器について分類を行い、それに準拠する形で他の遺構出土遺物について検討を行った。その結果、SK2出土土器のうちA群とした土器は無名の土器型式であって、器厚が著しく厚い点や胎土に纖維を多量に混入させる点、二枚貝条痕調整及びナデ調整を主体とする点など、早期の無文土器として知られる葦島式(香川県小葦島貝塚で型式設定)ないしは土壇原式(愛媛県土壇原II遺跡の住居址一括資料で型式設定)の範疇では理解できない特徴を有する。その内部でも器厚及び口縁部が内済ないしは外反するなどの特徴から細分が可能であり、時期幅があると考えなければならない。

また、押型文土器についてもB群2類c種のような黄島式ないしは早水台式に帰属する土器が主体といえる。それらには纖維の混入が見られず、胴部片の大多数がそれらに帰属するため、それらの土器が主体であることの根拠にもなる。それらより古く位置付けられるB群2類a・b種のような稻荷山式は極少数であり、両者それぞれの特徴を持つ押型文土器はSK2以外の遺構では確認できない。

よって、SK2以外の遺構から出土した押型文土器に関しては、山形文が主体である点、外面の

みに施文が見られる点、稻荷山式とそれに先行する押型文土器に見られる口縁部文様の祖形となるキザミ・刺突といった口縁部文様が見られる点、無文土器同様に胎土に纖維を混入させる点などから、黄島式・早水台式ないしは稻荷山式よりも古いと考えられ、押型文土器でも古い段階つまり“押型文土器出現期”に位置付けられる。

そういう状況の中で、SK17・35段階(刈谷我野Ⅰ期)⇒SK19・32段階(刈谷我野Ⅱ期)⇒SK1段階(刈谷我野Ⅲ期)⇒SK2段階(刈谷我野Ⅳ期)の4段階に細分を試みた。

SK17・35段階(刈谷我野Ⅰ期)では、SK17の國化しなかった小破片の検討の結果、外面のみに山形文を有する押型文土器(14・15)が確認できる。また、胎土に纖維を混入させ、極めて厚い無文土器(10～12)が確認でき、押型文土器と無文土器の器種間交渉を示す土器(13)も確認できる。10～12はSK2出土の無文土器のうち、A群2類b種(194～201)以外の土器と胎土及び器厚が類似するため、ほぼ同時期の所産と考えられるが、若干それより新しくなる可能性が考えられる。刈谷我野遺跡で最も出土量の多い無文土器及び押型文土器は、この段階ないしはそれより古く位置付けられるため、当遺跡のピークがこの段階より新しくなることは考えにくい。SK35では外面のみに山形文を有する押型文土器(331)が確認でき、比較的薄手の無文土器(328～330)、器種間交渉を示す土器(332・333)も確認できる。よって、外面のみに山形文が施される押型文土器と厚手無文纖維混入土器及び両者の器種間交渉を示す土器の組成で成り立つと考えられるが、この中でも細分できる可能性及び器種間交渉を示す土器にも時期幅の可能性が指摘できる。将来的に、SK17とSK35は分離しうると考えられる。

SK19・32段階(刈谷我野Ⅱ期)では、SK19出土の外面と口唇部(19・20)、外面と口縁部内面(21・22)に文様を有する押型文土器が確認できる。これらはSK2出土の押型文土器のうちB群2類b種の221～224に見られる口縁部文様の祖形として考えられ、それより先行すると考えられる。また、薄手の無文土器(16・17)と、16・17に比べてやや厚手の無文土器(18)が伴うと考えられる。18は遺物集中1の28と同一個体であるため、それと同レベルで出土した無文土器及び押型文土器とSK19出土遺物は同時期として考えたい。SK32においても薄手の無文土器(318～322)と口縁部にキザミを有する押型文土器(323)と内面にも押型文を有する土器(324)が確認できる。SK19・32は似た様相を見せており、前段階で見られたような極めて厚い無文土器が確認できない。よってほぼ同時期の資料として考えられる。ただし、押型文を外面のみに有するものと、内外面に有するものが確認できる。内面にも押型文を施す土器の出現をどの時点に持ってくるかという課題が解決されなければならず、その課題如何によっては細分の可能性が出てくる。この段階での主体はあくまでも無文土器であるが、徐々に押型文土器が増加傾向に転じる時期にあたると考えられる。また、不動ヶ岩屋洞窟遺跡の「不動ヶ岩屋II式」とされる土器群もこの時期のものとして考えられる。

SK1段階(刈谷我野Ⅲ期)では、古層の押型文土器(154・155・159・161)が混じるが、内面に二枚貝条痕調整を施す山形文(156・157)とナデ調整ないしは二枚貝条痕調整を施す無文土器(140～153)の組成で成り立つと考えられる。二枚貝条痕調整以外の情報が無いために、時期を決定するにはいさか弱みがあるが、広島県帝釽岐遺跡群弘法滝洞窟遺跡の13層下層出土事例を鑑み、黄島式よりも古く、刈谷我野Ⅰ・Ⅱ期より新しい段階に位置付けたい。

SK 2段階(刈谷我野Ⅳ期)では、これまでの段階において抽出できた以外の土器、つまりB群2類b・c種が主体を占め、押型文土器が卓越する段階として考えられる。それらの押型文土器の中でも、口縁部内面に構状文を有する土器が多いため、主体となるのは黄鳥式と言える。その中でも山形文がある一定量を占めることから、ポジティヴ捺円文が完全に主体となる段階より、やや古相を示す可能性が考えられる。これらに伴う無文土器は確認できていないが、押型文土器だけが製作・使用されていたと考えるよりも、薄手の無文土器がわずかに伴う可能性を否定して考えるのは時期尚早である。

また、SK 1段階とSK 2段階には二枚貝条痕の消失やB群2類b種が主体となる時期が間にあることが考えられるため、ヒアタスを想定すべきである。また、ポジティヴ捺円押型文の出現も考慮すべきであるので、その間に2~3型式の時期差が存在する可能性を指摘しておきたい。

さて、無名の土器型式とした無文土器についてであるが、これらには新型式名を与えることができる。しかし、今まで確認されていなかった土器であるからといって型式名を付けることはできず、安易に型式を設定しても、「型式の一人歩き」を招くだけである。包含層資料の検討をこれから行わなければならぬ、型式学的検討も十分加えなければならない。また、中国地方や九州地方との整合性を考慮しなければならないため、今報告における型式設定は差し控えるべきと考える。

2. 刈谷我野遺跡出土の石器について

ほとんどの石器が砂岩・緑色片岩等で占められ、そこにサヌカイト・チャートが混じる。砂岩・緑色片岩・チャートは遺跡周辺で採取可能である。サヌカイトは金山ないしは二上山といった遠隔地からの搬入品として考えられるが、材質を見る限り、金山産のものと考えられるが、產地同定に関しては、次報告に譲りたい。今報告の調査区においては剥片が出土していることから、石器製作及び加工を行ったことが考えられる。しかし、石核を見られないため、大きな原石を持ち込んでいる可能性は低いと考えられる。

SK 2より環状石斧(289)や石匙(287)の出土が見られたことは特筆すべきことであるが、それと共に出土した土器に時期幅があるため、時期の特定は困難である。よって、今後の類例の増加により検討されるべきものとし、今報告においては早期前葉～中葉という位置づけをするに留めておく。

また、石鏃が少ないことも興味深いが、包含層出土の類例と合わせての検討が必要であるため、詳細な検討は次報告に譲りたい。

さて、遺物集中等より出土した磨石・凹み石であるが、全体的に砂岩製が多く、それに緑色片岩製が続く。側縁に面取り加工を有するものと、有さないものに分けられるが、後者が多数を占める。

前者には側縁全面に面取り加工を有し直方体を呈するもの(339)、側縁全面に面取り加工を有し楕円ないしは長楕円型を呈するもの(104、134)、側縁三面に面取り加工を有し楕円ないしは長楕円型を呈するもの(103)、側縁二面に面取り加工を有し楕円ないしは長楕円型を呈するもの(48、66、122、346)、側縁一面のみに面取り加工を有し楕円型ないしは長楕円型を呈するもの(49、105、135、306)に分けられる。103・135・306・346は緑色片岩製であるが、それ以外は砂岩製である。

これらのうち、側縁二面以上に面取り加工を有するものは、所謂「石鍛型磨石」の範疇に収まるものとして考えられる。

とりわけ 122・339 は丁寧に研磨しており、精緻なつくりである。この研磨が使用した結果なのか、使用する前からのものかについては判断できない。これらの特徴を持つ磨石について、「皮なめし」の道具としての想定がなされたことがある(大下他 1998)。さらに両者には溝状の使用痕が認められるため、楔形石器との組み合わせで使用された可能性が考えられる。他の磨石・凹み石と異なる使用痕があり、同じ砂岩でもキメの細かい砂岩を選択している事からして、機能差が想定すべきである。339 には側縁にも同様の痕跡が見られ、極めて明瞭であることからして、122 に比べて使用頻度が高かったことが指摘できる。よって、磨石・凹み石の中でも 122・339 は異質であり、堅果類の加工を意味する石器ではない可能性が指摘できる。

石皿については無縁石皿のみ確認される。敲打痕が多数確認でき、磨面も確認できることからして、堅果類の加工のために地面に据付けて使用したものである。

台石とした石器には、溝状の敲打痕が認められるものがある(遺物集中 1-70・76、遺物集中 4-124、遺物集中 6-308)。この敲打痕は石皿に見られるように、面全体に確認されるものではない点が注目される。つまり、一点に集中して敲打を行ったことが考えられ、敲打痕の形状からして、楔形石器との組み合わせで使用されたことが考えられる。

第3節 南四国における縄文時代早期の様相について I —総括—

1. 剣谷我野遺跡とその時代

一般的に縄文時代は土器の出現をもって始まるとしている。日本列島における土器の起源に関しては、青森県大平山元 I 遺跡から出土した土器の付着物による C14 年代測定によると約 13000BP という測定結果が公表され、現在より約 13000 年前に土器は出現していた可能性が指摘されている(中村・辻 1999)。それらの土器は長者久保・神子柴文化に帰属する石器と共に出土したため、縄文時代草創期に位置付けられた。また、第四期における最終氷期から後氷期への移行過程に関する研究、とりわけ旧石器時代～縄文時代への過渡期の自然環境に関する研究が進み、この約 13000BP という年代は地球環境においては最終氷河期に位置付けられるため、土器の出現は氷河期から見られるようになった可能性が指摘されている。

縄文土器が出現した経緯に関し、堅果類の食前処理のためという見解や(渡辺 1968)、貝類の大処理のためという見解が既に出されている(岡本 1962・近藤 1965)。また、青森県大平山元 I 遺跡より出土した土器の付着物の研究から、必ずしも土器が堅果類の食前処理のための道具として出現したのではない可能性が指摘されたのは興味深い。

ここで、縄文文化の特徴を概観すると、大枠として①定住化、②土器の使用量の増大、③磨石・石皿の爆発的増加、④水産資源の活用などが挙げられることは多くの研究者の賛同するところであろう。そしてこれらの諸特徴が顕在化してくるのは縄文時代早期からであり、この時期をもって縄文時代及びその文化が萌芽する時期とする見解が近年富みに語られるようになってきた。(稲田

1986、鈴木 1990、佐々木 1991、泉 1999、谷口 2002)。

①定住化に関しては、日本全国で早期より遺跡数が増加すると共に堅穴住居等の集落に関係する遺構の検出例も増え、②土器の使用量に関しても、持ち運びに不便な土器や地域色の豊かな土器も多数見られるようになり、③磨石・石皿の爆発的増加も居住域周辺の森林から供給される堅果類等を食料資源として主眼に置いた結果と考えられる。④水産資源の活用に関しては、貝塚が各地で形成されると共に、石錐といった網漁の道具の出土例も増加してくる、といった傾向が見られる。

刈谷我野遺跡では、包含層から多量の土器が出土しており、磨石・石皿といった堅果類加工用の石器で構成された集石遺構の間やその他の遺構から土器が出土する様相は定住を示唆するものである。また、多量に出土したことは、その使用量増大を意味する。そして出土した土器型式により、当遺跡が縄文時代早期に位置づけられることは一般的に認められるところであろう。また、SK2より出土したクヌギ節堅果のC14年代測定を行ったところ、 8820 ± 60 BPという測定結果が得られた。早期の年代として、10000年前～6000年前という期間が当てはめられているため、その測定値からして、早期でも古い時期に位置付けられる。つまり刈谷我野遺跡は日本列島における縄文時代の開始を告げる遺跡の一つであり、比類なき遺跡と言える。

2. 四国の縄文時代早期における研究史とその到達点

四国の縄文時代早期の研究とりわけ押型文土器の研究は、押型文土器と厚手無文土器が出土した香川県小鳩島貝塚の発掘調査を始まりとする。調査を行った樋口清之氏は押型文土器に伴う厚手無文土器に着目し、その厚手無文土器に「鳩島式」という型式名を与えた(樋口 1936)。また、三森定男氏は小鳩島貝塚における押型文土器とそれに伴う石器群を新石器時代初期に位置づけ、出土層の変遷より、時期が新しくなるに連れ、押型文土器の文様の粗大化及び器壁が厚くなる傾向が見られることを指摘している(三森 1937)。その後、岡山県黄島貝塚の発掘調査が行われ、出土した押型文土器に「黄島式」という型式名が与えられ、それ以降、四国内においても押型文土器の標識としてその名が用いられている。

1960年代以降、洞穴遺跡や岩陰遺跡への関心が高まり、1962年から3カ年にわたり、日本考古学協会洞穴遺跡調査特別調査委員会による調査が全国で行われた。1967年に平凡社より「日本の洞穴遺跡」が刊行され、四国においては愛媛県上黒岩岩陰遺跡と高知県不動ヶ岩屋洞穴遺跡の概要報告がある。押型文土器とそれに前後する土器群の存在が明らかにされ、それを元に周辺地域に存在する各型式との比較検討が行われた。その結果、「上黒岩Ⅲ式」、「不動ヶ岩屋Ⅱ式」などの土器型式が便宜的に設定されている。

しかし、中国地方においては「ネガティヴ押型文→黄島式→高山寺式→穗谷式」という編年が組みあがり、広島県帝釈峠遺跡群観音堂(広島大学 1984)の発掘調査が進む中で、押型文土器に先行する条痕文土器の存在と両者の折衷を示す条痕地山形押型文の存在が明らかになってきた。また、東九州においては「川原田式→船荷山式→早水台式→下菅生B式→田村式→ヤトコロ式→手向山式」という編年が組みあがっており、大分県二日市洞穴(九重町教育委員会 2004)の調査から、押型文土器に先行する無文土器の存在が明らかになった。このような周辺地域の様相の中で、四国の早期研

究に関して再検討が必要になっている。

北四国の様相について、兵頭歎氏は愛媛県上黒岩岩陰遺跡から出土した押型文土器について型式学的検討を行い、「上黒岩Ⅲ式」は東九州編年におおむね沿う類型を含む土器型式であり、単純ではないという結論に達している(兵頭 2000)。その後、東九州編年を元に、愛媛県内の押型文土器の検討を行い(兵頭 2001)、さらに四国内の押型文土器について検討を加え、押型文土器をⅣ期に分ける編年案を示した(兵頭 2003)。しかし、押型文土器に前後するとされる無文土器については、無文土器单一の時期がある可能性を示唆しつつも、位置づけを巡っては今後の検討課題としている。

無文土器に関しては、愛媛県松山市土壇原Ⅱ遺跡で設定された「土壇原式」について、長井数秋氏(長井 1979)と犬飼徹夫氏(犬飼 1982)の研究があり、共に無文土器單一期の所産としているが、前者は「黄島式」に先行するとし、後者は「黄島式」と「高山寺式」の間に位置付けている。

それに対して南四国の様相であるが、これまで良好な遺跡に恵まれず、つい最近まで佐川町不動ヶ岩屋洞穴遺跡(岡本・片岡 1967、岡本 1968)と土佐山田町飼古屋岩陰遺跡(森田 1983)が主要な遺跡であった。不動ヶ岩屋洞穴遺跡においては、押型文土器と厚手無文土器の組成で成り立つとされる「不動ヶ岩屋Ⅱ式」が設定され、黄島式に併行させている。飼古屋岩陰遺跡では乱れた山形押型文に伴うとされる無文土器が「飼古屋Ⅱ式」として設定されている(森田 1983)。

近年、十和村十川駄場崎遺跡(岡本・木村 1984、木村 1987: 第1・2次調査、岡本・山本 1989: 第3次調査、前田 1996: 第5次調査)、大正町木屋ヶ内遺跡(前田 1995)、南国市奥谷南遺跡(松村・山本 2000)、土佐山田町開キ丸遺跡(小林 2002)などの調査が進み、押型文土器と無文土器との関わりにおいて、注目すべき調査の蓄積が見られる。

十川駄場崎遺跡第1次調査での層位的事例からは、第3層から「駄場崎式」として型式設定された繊維混入厚手無文土器が、第4層から薄手無文土器が、第5層上部からは押型文土器が出土し「不動ヶ岩屋Ⅱ式」と報告されている。また、第5層下部からは薄手無文土器が出土している。前田光雄氏は、これらの資料には限界があるとしつつも、大正町木屋ヶ内遺跡の成果も踏まえ、“早期前半: 条痕文+無文→押型文、早期後半: 大形格円押型文+無文+条痕文→繊維条痕文+繊維無文+条痕文”という十川駄場崎遺跡周辺に置ける編年案を提示している(前田 1996)。刈谷我野遺跡の厚手繊維混入無文土器に関しては、胎土に繊維を混入させること及び二枚貝条痕調整が見られることから早期後半のものと考え、「駄場崎式」と類似する可能性を当初考えていたが、その可能性は極めて低い。

奥谷南遺跡においては早期1類A~D2(押型文土器)、早期2類(天道ヶ尾式土器)、早期3類(平裕式土器)、早期4類(繊維土器)、5類(繊維混入無文土器口縁)、6類(条痕文土器)とされる土器が出土しており、1A類は早期前葉、1B~3類は早期中葉以降に位置付けられる。しかし、4~6類に関しては、胎土に繊維を混入させ、二枚貝条痕調整を施す特徴が見られるため、早期後半に位置づけている。

開キ丸遺跡においては無文土器・条痕文土器と押型文土器が包含層内で共存しており、層序によると条痕文土器・山形押型文土器→無文厚手土器・山形押型文土器・格円押型文土器・撫糸文土器(?)→無文厚手土器・山形押型文土器・格子目押型文土器と変遷するという報告がある。内外にポジティ

「楕円文及び口縁部内面に柵状文を有するため、「黄島式」と考えられる土器が1点報告されているが、層序における各様式の割合が不明である。層序=時間差として考えて良いのかどうかについては検討が必要であるため、1点の「黄島式」を持って時期及び土器組成を断定するには慎重になるべきである。当遺跡においては胎土に纖維を混入させ、器厚も厚く、外面に山形押型文を有する土器群が確認でき、無文土器と押型文土器の器種間交渉を示唆する資料である。開キ丸遺跡は、まさにこの「器種間交渉」の時期の遺跡として位置付けられる。

南四国における無文土器と押型文土器の関係については、小鳩島貝塚の調査成果に基づき、押型文土器と無文土器は共伴するという前提の下で研究がなされ、それら無文土器に関しては「萬島式」の範疇で捉えられてきた。

しかし、遠部慎氏は大分県北鉄輪遺跡試掘調査及び東九州における押型文土器と無文土器の関係を考察する中で、押型文土器に無文土器が多量に伴うという従来の見解に疑義を唱えた(永野・遠部・志賀 1999)。また、四国とりわけ高知県内での押型文土器と無文土器の共伴例にも再検討を要するという指摘は、筆者も認めるところである(※筆者等との意見交換による)。また、大分県内の無文土器と押型文土器が出土する遺跡の発掘調査において、両者の出土分布に偏りがあることから、両者に時期差があることが指摘されるようになってきた(大分県教育委員会 2004)。

この件に関し、山崎真治氏は太郎丸遺跡(現、刈谷我野遺跡)1996年試掘調査における出土遺物を検討し、そこで確認された纖維混入厚手無文土器と押型文土器に関して考察を行った(山崎 2003a)。無文土器の器厚が極めて厚い点、胎土の纖維混入量が著しい点、出土量が押型文土器出土量を遥かに凌駕する点から「萬島式」とは全く異なる土器群であるとしている。また、出土した押型文土器を「黄島式」として解釈し、兵頭編年Ⅱ期に位置づけている。そのため、纖維混入厚手無文土器を南四国の地方型式と考え、「黄島式」との共存を論じた。

また、松村信博氏・畠中宏一氏は南四国の早期遺跡集成を行い(松村・畠中 2003)、サンプル数の少なさと有効性について疑問を持つつも、無文土器が押型文期に存在したのは確かではあるが、無文土器が高い比率で押型文土器とセットになっていたのではないか、と考察している。

筆者も太郎丸遺跡(現、刈谷我野遺跡)平成8年度試掘調査と平成10年度試掘調査における出土遺物について検討を行った(松本 2005)。無文土器に関して「萬島式」とは異なる土器群とする山崎氏の見解を支持すると共に、無文土器に関する研究(綿貫 1999・2003)の進んでいる東九州編年と照らし合わせた。その結果、薄手のものと厚手のものが存在しており、器面調整もナデ調整のものと二枚貝条痕調整のものが存在する点や口縁部文様にもキザミ・刺突といったヴァリエーションが認められることから、時期差及び器種組成を考慮し、地域的な土器型式の可能性を指摘した。また、無文土器の占める割合が全出土量の8割であるため無文土器盛行期として考えられ、山形文が主体で「シャープな山形文」を有するものについては胎土に纖維を混入させる率が高いことを鑑み、それらの特徴を持つ押型文土器の口縁部文様から「黄島式」よりも古い段階、つまり兵頭編年のⅠ期に帰属し、そのⅠ期内での細分の可能性を考慮している。

石器に関しては、多田仁氏の研究がある。十川駄場崎遺跡第3次調査成果における5層において、草創期に位置付けられる豆粒文ないしは隆起線文と無文土器が共伴し、前者が5層上層、後者が5

層下層に分布していることから、5層下層出土の無文土器が古く、6層より出土した尖頭器との共時性を考慮した(多田 2001)。無文土器の起源と石器組成について興味深いが、隆起線文土器の出現による無文土器様式の断絶や、汎日本的にそういった傾向が捉えられるかどうかについては検討を要する。また、愛媛県内の縄文石器集成の中で(多田 2003)、草創期より石鏃が増加することを指摘した。山崎氏は高知県内の縄文石器を集成し(山崎 2003b)、早期には縄文的な石器構成がほぼ完成するとしている。また、敦賀啓一郎氏は縄文時代早期における中四国の石器組成について概観し、狩猟具を卓越した石器として挙げている(敦賀 2003)。その中で洞穴・岩陰遺跡とオープンサイトでの遺構の有り様及び石斧等の植物質食料加工工具の様相から、居住域の性格の差異を示唆しているのは興味深い。

3. 刈谷我野遺跡の意義

まず土器についてであるが、無文土器が卓越している段階に押型文土器が伝わってきたと解釈される様相を示している。東九州や中国地方同様、四国においても無文土器の段階があり、押型文土器へと推移していく可能性が示唆できるため、四国における“押型文土器出現期”的遺跡と表現するのが相応しい。

刈谷我野Ⅰ期で主体となるのは無文土器である。胎土に纖維を混入させ、器厚が著しく厚い特徴を有する。口縁部が内湾ないしは直立する傾向を示し、胴上部に最大径を有し、尖底となる土器群と口縁部が弱く外傾する土器群で成り立つものと考えられ、前者の割合が多い。そのような土器様相の中に、東から山形文を主体とする押型文土器様式が伝播してきたのであろう。そのため、無文土器同様に押型文土器の胎土にも纖維の混入が見られ、口縁部も内湾ないしは直立する傾向にあると考えられる。よって“押型文土器出現期”と表現するのが相応しい。興味深いのは無文土器と押型文土器の器種間交渉を示す土器であり、両者の出会いと器種の境界が曖昧になったことを意味する。また、この段階の押型文土器は外面のみに施文されるため、押型文土器でも古相として位置付けられる。そして、無文土器群の中に口縁部に刺突等の文様を有するものがあり、これらの文様が刺突→キザミ→横状文と変遷しながら押型文土器の口縁部文様として受け継がれていたことが考えられる。

このⅠ期は、無文土器と外面施文山形押型文の組成の段階と、それに器種間交渉を示す土器が加わる組成の段階に細分できる可能性がある。しかし、それを裏付ける遺構出土例が無く、型式学的検討にも限界があるため、今後の検討に委ねたい。

刈谷我野Ⅱ期には、Ⅰ期に見られたような、胎土に纖維を多量に混入させ、器厚が著しく厚い土器群は姿を消し、口縁が外反ないしは外傾する薄手無文土器とそれよりやや厚い無文土器、そして山形文主体の押型文土器で成り立つものと考えられる。この時点でも無文土器が主体と考えられる。押型文土器には口縁部文様が出現しており、内面にも押型文が施文されるものや刺突やキザミが施文されるものが確認できる。口縁部文様に関しては無文土器の口縁部内面の刺突やキザミ等といった影響を受けて成立し、これが押型文土器の口縁部文様へと継承されていったことが考えられる。この時点での無文土器と押型文土器の割合は、無文土器が多数を占めることが予想される。「不動ヶ

岩屋Ⅱ式」もこのⅠ期に併行させることができると考えられるが、Ⅰ期でも新相を示すものであろう。

刈谷我野Ⅲ期には、口縁が外反ないしは外傾する薄手無文土器とそれよりやや厚い無文土器、そして山形文主体の押型文土器で成り立つものと考えられる。無文土器に関しては薄手のものが主体であると考えられ、二枚貝条痕調整を特徴とする。押型文土器にも二枚貝条痕調整が見られ、帝釈遺跡群観音堂や飼古屋岩陰遺跡で確認される条痕地山形文に通じるものと考えられる。

刈谷我野Ⅳ期では、押型文土器が主体であり、無文土器は全く伴わぬいか、伴ったとしても極少数と考えられるため、押型文土器盛行期として位置づけられる。押型文土器の口縁部文様を見る限り、左斜行キザミと柵状文が見られ、前者が「稻荷山式」、後者が「黄鳥式」の範疇で理解でき、黄鳥式が圧倒的多数である。いずれにも山形文・楕円文が確認でき、「稻荷山式」には格子目文が確認できる。「黄鳥式」の設定された岡山県黄島貝塚では楕円文が多いが、刈谷我野Ⅳ期における「黄鳥式」では山形文の占める割合が比較的高いため、山形文と楕円文の関係については時間差が想定できる。おそらくは山形文が古相を示すのである。

よって、従来の押型文土器と無文土器が共存するというこれまでの見解には修正が必要になり、押型文土器も時期幅を持った土器であるということを考慮に入れなければならない。

これまでのところ、山形文に関しては、外面のみに施文が見られる段階から内外面に施文が見られる段階に分けられ、さらに口縁部文様よりキザミ・刺突が施される段階から左斜行キザミが施される段階、そして柵状文が施される段階に分けられる。

問題は楕円文であり、その出現を巡ってはまだ論議すら始まっていない。刈谷我野遺跡SK2より、口縁部が無文で、外面のみに施文されるものが出土しており、刈谷我野Ⅰ期に位置付けられる。しかし、Ⅰ期は細分の可能性が指摘できるため、同じ類例の増加を待って、位置づけがなされるべきである。また、岡山県畠の浦遺跡の発掘調査において、無文土器が絶対的多数の中で、楕円文を主体とする調査区と山形文を主体とする調査区があることが指摘されているのは興味深い（鎌木・木村 1956、鎌木 1996）。また、大分県早水台遺跡で型式設定された「早水台式」にもA式という山形文主体の土器群と、B式という楕円文主体の土器群があり、A式→B式という型式変遷が想定されている（賀川 1956）。

次に遺跡の立地についてであるが、刈谷我野遺跡は飼古屋岩陰遺跡などに比べて石器の出土量が少なく、磨石・石皿が多いことに注意を要する。岩陰や洞窟といった閉鎖的な環境での遺跡のありかたと、当遺跡のような開放的な環境での遺跡のありかたに違いが想定できる。また、石器の組成の違い＝季節性とするのは少々乱暴であるが、堅果類の採れない季節に磨石・石皿は不必要的石器であり、それらを持ち運ぶことは考えられない。それらを使用する期間が終了すると、次の生業の場に生活地点を移したことが考えられるため、秋冬の居住域と春夏の居住域を使い分けていた可能性が考えられる。すると、同じ時代ではあっても広範囲にわたって春夏の居住区、秋冬の居住区が存在したことが想定でき、結果として“飛び地的”に遺跡が遺されている可能性が考えられる。つまり、周辺部にも同じ時代の遺跡が存在し、その性格が異なる可能性があることを考慮しなければならない。よって、物部川流域はもちろんのこと、高知県内の河川におけるそれぞれの河岸段丘上は要注意である。

4. おわりに

縄文時代早期という時代は、先述したように縄文文化のそれぞれの特性が開花し、定住という現代に繋がる要素が顕著になる時代である。また、環境が大きく変化し、瀬戸内という交通路を通じて東の土器文化が流入してきた可能性が指摘できる時期でもある。中四国地方における早期の良好な遺跡は九州地方及び近畿地方に比べて少ないが、近年増加する傾向にあり、無文土器様式圏に押型文土器様式が最初に出会う様相を見せており、つまり両地域の土器様式が接觸する地域としての役割を果たしたことが指摘できる。また、土器の製作・使用及び堅果類の加工に関する草創期に南九州で発生した伝統のもとに成立・展開した可能性も、当地域の縄文文化を明らかにする上で興味深い課題である。

このように早期という時代は縄文文化について再考を促す可能性を大きく秘めた時代である。その時代における中四国地方の役割ないしは様相というものが必ずあるはずであり、刈谷我野遺跡はその一端を提示した。今後、縄文文化の再考及び新たな歴史を紐解くために活用していただければ幸いである。

参考文献

- 泉 拓良 1999 「新たな縄文觀の創造に向けて」『季刊考古学』第69号
- 稻田 孝司 1986 「縄文文化の形成」『日本考古学6 变化と画期』近藤義郎他編 岩波書店
- 犬飼 徹夫 1982 「狩猟・漁撈の生活と文化」『愛媛県史 原始・古代』愛媛県
- 大下 明・久保勝正 1998 「Ⅳ考察 3.石器群の評価と問題点」『鴻ノ木遺跡(下層編)』三重県埋蔵文化財センター
- 岡本 明朗 1962 「日本における土器出現の自然的・社会的背景について」『考古学研究』第8卷4号
- 岡本 健児・片岡 鷹介 1967 「不動ヶ岩屋洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社
- 岡本 健児 1968 「高知県の縄文式土器型式編年論」『高知県史考古編』高知県
- 岡本 健児・木村 利朗 1984 「十和村史」十和村
- 岡本 桂典・山本 哲也 1989 「十川駄場崎遺跡発掘調査報告書」十和村教育委員会
- 賀川 光夫 1956 「九州」『日本考古学講座 第三巻 縄文文化』河出書房
- 鎌木 義昌・木村幹夫 1956 「中国」『日本考古学講座 第三巻 縄文文化』河出書房
- 鎌木 義昌 1996 「吉備地方に於ける早、前期縄文式土器の變遷について一附、畠の浦遺跡の調査」『瀬戸内考古学研究』河出書房新社
- 木村 利朗 1984 「第1章 北緯の縄文時代」「十和村史」十和村
1987 「駄場崎遺跡」「四万十川流域の縄文文化研究」幡多埋蔵文化財研究所
- 小林 麻由 2002 「開キ丸遺跡」土佐山田町教育委員会
- 近藤 義郎 1965 「後水期における技術的革新の評価について」『考古学研究』第12卷第1号
- 佐々木 高明 1991 「縄文時代の時代区分」『日本史誕生』集英社
- 鈴木 公雄 1990 「縄文時代はいつ始まったか」「争点日本の歴史 第1巻原始編」新人物往来社
- 多田 仁 2001 「西四国の縄文時代遺跡－縄文時代草創期から早期の研究視点－」

- 『平成 13 年度企画展 西四国の縄文文化』 愛媛県歴史文化博物館
- 2003 「愛媛県における縄文時代の石器－草創期・早期・前期－」
 『第 14 回 中四国縄文研究会 中四国地域における縄文時代石器の実相』
- 谷口 康浩 2002 「縄文早期のはじまる頃」「異貌」 第 20 号 共同体研究会
- 中村 俊夫・辻 誠一郎 1999 「青森県東津軽郡蟹田町大平山元 I 遺跡出土の土器破片表面に付着した微量炭化物の加速器C14年代」 大平山元 I 遺跡発掘調査団編 『大平山元 I 遺跡の考古学調査』 大平山元 I 遺跡発掘調査団
- 長井 敦秋 1979 「北四国地方縄文早期遺跡の先史地理学的研究」「考古学ジャーナル」 170 号
- 永野 康洋・達部 慎・志賀 智史 1999 「別府市における縄文時代早期の様相－北鉄輪遺跡試掘調査概要を中心にして」 『おおいた考古第 12 集』 大分県考古学会
- 兵頭 煉 2000 「愛媛県における押型文土器について－上黒岩岩陰遺跡の資料を中心として－」 『研究紀要』 第 5 号 愛媛県歴史文化博物館
- 2001 「愛媛県における押型文土器の様相」 『平成 13 年度企画展 西四国の縄文文化』 愛媛県歴史文化博物館
- 2003 「四国島の押型文土器－現状と課題－」 『利根川』 24・25 利根川同人
- 前田 光雄 1995 「第 IV 章 まとめ 第 1 節 縄文時代の出土土器について」「木屋ヶ内遺跡」 高知県幡多郡大正町教育委員会
- 1996 「第 IV 章 まとめ 第 1 節 十川駄場崎遺跡の成果・第 2 節 縄文時代の出土土器について」「十川駄場崎遺跡－第 5 次発掘調査－」 十和田市教育委員会
- 松村 信博・畠中 宏一 2003 「南四国の押型文土器－無文土器と押型文土器をめぐって－」 『利根川』 24・25 利根川同人
- 松村信博・山本純代 2000 『奥谷南遺跡Ⅲ』 高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 63 集 高知県埋蔵文化財センター
- 松本 安紀彦 2005 「南四国の縄文土器考(1)－物部川流域における押型文土器出現期について－」
 『九州縄文時代早期研究ノート』 第 3 号 九州縄文時代早期研究会
- 三森 定男 1937 「讃岐小葛島遺跡の研究」「考古学論叢」 第 4 輯 考古学研究会
- 森田 尚宏 1983 「飼古屋岩陰遺跡調査報告書」 高知県教育委員会
- 樋口 清之 1936 「讃岐葛島貝塚の研究」「史前学雑誌」 第 8 卷第 1 号
- 安田 喜憲 1975 「縄文文化成立期の自然環境」「考古学研究」 第 21 卷第 4 号
- 山崎 真治 2003a 「西四国の「無文土器」－兵頭氏の論文へのコメントとして－」 『利根川』 24・25 利根川同人
 2003b 「高知県の縄文時代石器の実相－器種構成の変化と非在地系石材の動きを中心として－」
 『第 14 回 中四国縄文研究会 中四国地域における縄文時代石器の実相』
- 純貴 俊一 1999 「九州の縄文時代草創期末から早期の土器編年に関する一考察」「古文化談叢」 第 42 集 古文化研究会
- 2003 「九州の縄文時代早期前半の土器－岡田憲一氏の原稿を読了した感想－」 『利根川』 24・

25 利根川同人

- 渡辺 誠 1968 「日本列島における土器出現の背景をめぐって」『古代文化』第20巻8・9号
- 下澤 公明 1995 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 93 中岡横断自動車道建設に伴う発掘調査2 中山西遺跡」日本道路公団広島建設局津山工事事務所・岡山県教育委員会
- 山崎 純男 1988 「柏原遺跡群V-先土器・縄文時代遺跡A・2・C・H・J~N遺跡の調査- 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第190集」福岡市教育委員会

擲國 番号	報告 番号	出土 遺構	遺物種	部位	法量(cm/max)			胎土中の繊維	備 考
					口径	胴径	器厚		
第6図	1	SK11	無文	胴部			1.9	多	
第8図	2	SK15	無文	胴部			1.6	有	
	3		押型文	胴部			0.5		ボジティヴ稍円文
	4		押型文	胴部			0.7		ボジティヴ稍円文
	5		表裏条痕	胴部		20.8	0.7	若干	内外に二枚貝条痕調整
	6		無文	胴部			1.6		
第9図	7	SK16	無文	胴部			1.6	多	
	8		押型文	胴部			0.7	若干	山形文
	9		押型文	胴部			0.6	若干	山形文
	10		無文	胴部			1.5	多	
第10図	11	SK17	無文	胴部			1.4	多	
	12		無文	胴部			1.8	多	
	13		押型文	口縁部			1.5	若干	器種間交渉
	14		押型文	胴部			0.5	若干	山形文
	15		押型文	胴部			0.9	若干	アーチ状山形文
	16		無文	口縁部	17.0		1.3	多	内面に左下りキザミを有する
第11図	17	SK19	無文	口縁部			9.0	若干	内面に左下りキザミを有する
	18		無文	口縁部			1.6	多	
	19		押型文	口縁部			0.6	若干	山形文
	20		押型文	口縁部			0.5	若干	山形文
	21		押型文	口縁部	12.1		0.7	多	山形文
	22		押型文	胴部			0.7	若干	山形文
	23		押型文	胴部		20.2	0.9	若干	山形文
	24		SK19	残存率 (%)	法量(max)				備 考
第11図	25				全長(cm)	全幅(cm)	企厚(cm)	重量(g)	
			石鉢	100	2.3	1.8	0.4	1.2	サヌカイト製
			石匙	100	5.2	1.6	0.4	4.2	サヌカイト製 一部、刃部の磨耗が見られる

第5表 出土遺物観察表①

挿図 番号	報告 番号	出土 遺構	遺物種	部位	法量(cm/max)			胎土中 の繊維	備 考
					口径	胴径	器厚		
第 14 図	26	遺物 集中 1	無文	口縁部	31.2		1.9	多	内面に強い指ナゲを有する
	27		無文	口縁部	25.4		1.7	多	内面に左下りキザミを有する
	28		無文	口縁部	33.2		1.8	多	
	29		無文	胴部			1.7		
	30		無文	胴部			1.8	多	
	31		無文	胴部			1.8	若干	
	32		無文	胴部			1.3		
	33		無文	胴部			1.6		
	34		無文	胴部			1.5	多	
	35		無文	胴部	21.2		1.3		
	36		無文	胴部			1.6	多	
第 15 図	37		無文	胴部	41.4		2.1	多	
	38		無文	胴部			1.5	多	
	39		無文	胴部			1.9		
	40		押型文	口縁部			0.7		
	41		押型文	口縁部			0.5	雲母混入 内面に二枚貝条痕調整 を施す 山形文	
	42		押型文	胴部			0.6		雲母混入 山形文
	43		押型文	胴部			0.7		
	44		押型文	胴部			0.6	山形文	
	45		押型文	胴部			0.7		山形文
	46		押型文	胴部			0.6	ポジティブ捺円文	
	47		押型文	胴部			0.8		格子目文 無文帯あり
第 15 図	48		遺物種	残存率 (%)	法量(max)				備 考
	49				全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	
	50		凹み石	100	10.7	7.4	4.3	510	砂岩製両側縁に面取り加工あり
	51		凹み石	100	10.2	8.8	5.7	720	砂岩製下端に面取り加工あり
			凹み石	100	14.1	11.5	5.0	1089	緑色片岩製
			凹み石	100	12.2	10.8	6.5	1270	砂岩製

第6表 出土遺物観察表②

擇回 番号	報告 番号	出土 遺構	遺物種	残存率(%)	法量(max)			備考
					全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	
第16回	52	遺物 集中1	磨石	100	10.2	10.0	3.9	650 緑色片岩製
	53		磨石	100	12.1	10.4	3.4	638 砂岩製
	54		磨石	100	9.6	9.1	3.5	440 砂岩製
	55		磨石	100	9.6	9.3	4.8	640 砂岩製
	56		磨石	100	10.1	9.8	3.6	450 砂岩製
	57		磨石	100	12.0	11.8	5.0	950 砂岩製
	58		磨石	100	9.1	9.0	3.3	413 砂岩製
	59		磨石	100	9.7	7.7	6.1	585 砂岩製
	60		磨石	90	12.2	9.3	4.5	750 砂岩製
	61		磨石	100	10.8	7.2	5.4	559 砂岩製
	62		磨石	100	12.7	6.3	5.9	801 緑色片岩製
	63		磨石	100	10.7	7.5	4.3	635 緑色片岩製
	64		磨石	100	10.9	7.0	4.8	705 砂岩製
	65		磨石	100	10.6	7.9	3.5	430 砂岩製
	66		磨石	100	11.5	8.9	5.6	830 砂岩製両端に面取り加工あり
	67		磨石	60	12.5	6.1	4.6	385 砂岩製
第17回	68		磨石	60	12.7	9.2	3.9	500 砂岩製
	69		磨石	50	11.0	6.7	5.1	619 砂岩製
	70		凹み石?	100	14.3	7.7	2.1	200 緑色片岩製 楕形石器使用痕
	71		石皿	90	27.4	18.2	7.0	5140 砂岩製
	72		石皿	100	22.7	15.8	5.6	4150 砂岩製
	73		石皿	100	24.3	26.0	4.1	4800 砂岩製
	74		台石	60	18.0	14.5	8.1	3500 砂岩製 一部被熱赤変
	75		台石	40	15.4	11.0	4.5	1210 砂岩製 破片
	76		台石	100	18.7	11.7	7.2	2410 砂岩製 楕形石器使用痕
	77		台石	100?	12.5	14.7	3.2	813 砂岩製
	78		台石	100	13.7	14.3	5.0	1480 砂岩製
	79		台石	20	11.0	11.3	8.1	729 砂岩製

第7表 出土遺物観察表③

擇図番号	報告番号	出土遺構	遺物種	残存率(%)	法量(max)				備考			
					全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)				
第17図	80	遺物集中1	砥石	100	12.1	7.8	7.2	1180	砂岩製			
	81		石皿	20	18.3	6.4	8.0	1195	砂岩製			
	82		石皿	20	16.6	7.3	7.2	1250	砂岩製			
	83		石皿	30	18.1	10.3	3.1	845	砂岩製			
	84		砾石器?	100	15.7	5.6	6.0	745	砂岩製 石皿破片を砾石器に転用か			
第18図	報告番号	出土遺構	遺物種	部位	法量(cm/max)			胎土中の繊維	備考			
					口径	胴径	器厚					
					無文	口縁部	40.4	1.6	多			
					無文	胴部		1.3	多			
					無文	胴部		1.6				
					無文	胴部		1.8				
					無文	胴部		1.6	多			
					無文	胴部		1.2				
					無文	胴部		1.6	多			
					無文	胴部		1.6	多			
第20図	報告番号	出土遺構	遺物種	部位	法量(max)				備考			
					全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)				
					93	砥石	100	7.9	9.5	4.3	440	砂岩製
					法量(cm/max)			胎土中の繊維				
					口径	胴径	器厚					
					無文	口縁部	36.6	40.0	2.1	多	口縁部内面に刺突を有する	
					無文	口縁部	37.4		1.9	多	口縁部内面に左下りキザミを有する	
					無文	口縁部	27.0		1.2		口縁部内面に刺突を有する	
					無文	胴部			1.5	多		
					無文	胴部			1.6	多		
					無文	胴部			2.1	多		
					押型文	口縁部	25.4		1.7	多	山形文	
					押型文	胴部			0.8		ボジティヴ繪円文	

第8表 出土遺物観察表④

擲図 番号	報告 番号	出土 遺構	遺物種	残存率 (%)	法量(max)				備考	
					全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)		
第 21 図	103	遺物 集中 3	凹み石	95	10.5	8.1	4.9	800	砂岩製 側縁と下端に面取り加工あり	
	104		凹み石	50	10.2	8.0	4.3	400	砂岩製 側縁に面取り加工あり	
	105		磨石	100	8.8	9.6	3.9	500	緑色片岩製 下端に面取り加工あり	
	106		磨石	100	11.2	7.0	4.1	550	緑色片岩製	
	107		磨石	100	10.1	7.2	3.5	350	砂岩製	
	108		磨石	100	8.6	7.7	4.2	400	砂岩製	
	109		磨石	100	9.9	7.5	3.8	365	砂岩製	
	110		凹み石	100	8.7	8.0	4.2	350	火つき白か?	
	111		石皿	100	31.1	21.6	6.0	4950	敲打痕・底面が確認できる	
	112		石皿	100	21.7	18.7	7.2	4060	一部、被熱赤変が認められる	
	113		磨石?	100	17.8	11.7	6.0	1500	砂岩製	
	114		台石	100?	30.7	15.7	4.0	3300	砂岩製	
	115		石皿	100	19.4	14.6	4.9	1910	砂岩製	
	116		台石	100?	20.3	10.4	9.2	3000	砂岩製	
第 22 図	報告 番号	出土 遺構	遺物種	部位	法量(cm/max)			胎土中の繊維	備考	
					口径	胴径	器厚			
				無文	口縁部		1.7	多		
				無文	胴部		21	多		
				無文	制部		1.7	多		
第 22 図	報告 番号	出土 遺構	遺物 集中 4	無文	胴部	25.0	24	多	備考	
				遺物種	法量(max)					
					全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)		
				凹み石	100	10.9	11.2	5.1	921 砂岩製	
				磨石	100	13.6	10.4	4.4	855 砂岩製 側縁に面取り加工あり	
第 23 図	報告 番号	出土 遺構	遺物 集中 4	磨石	100	11.7	6.7	3.3	375 砂岩製	
				台石	100	20.7	9.0	4.5	1600 砂岩製 横形石器使用痕	
				石皿・台石	100	28.7	24.7	7.1	7220 砂岩製	
				石皿・台石	80	35.6	28.5	11.5	13750 砂岩製	

第9表 出土遺物観察表⑤

拂団番号	報告番号	出土遺構	遺物種	残存率(%)	法量(max)				備考
					全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	
第23図	127	遺物集中4	石皿・台石	100	33.2	23.5	10.2	11400	砂岩製
	128		台石	100	15.2	12.9	5.2	1294	砂岩製
拂団番号	報告番号	出土遺構	遺物種	部位	法量(cm/max)			胎土中の繊維	備考
					口径	胴径	器厚		
第25図	129	遺物集中5	無文	口縁部	30.2		1.5	多	内面に右下りキザミを有する
	130		無文	口縁部			1.0		口唇部に上方からの刺突を有する
	131		無文	胴部			2.3	多	
	132		無文	胴部			1.4	多	内面に二枚貝条痕を施す
	133		無文	胴部		29.6	2.5	多	内外面に二枚貝条痕調整後ナデ消しを施す
拂団番号	報告番号	遺物集中5	遺物種	残存率(%)	法量(max)				備考
					全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	
第25図	134		凹み石	100	12.5	9.5	5.8	1010	砂岩製 側縁全面に面取り加工あり
	135		磨石	100	7.8	6.1	1.4	100	緑色片岩製 下端に面取り加工あり
	136		石皿	50	13.8	15.1	5.3	1640	砂岩製
	137		石皿	100	17.3	30.1	4.5	3750	砂岩製
	138		台石	100?	35.8	26.8	8.5	9850	砂岩製
	139		台石	100?	40.6	27.5	13.4	18500	砂岩製
拂団番号	報告番号	出土遺構	遺物種	部位	法量(cm/max)			胎土中の繊維	備考
					口径	胴径	器厚		
第26図	140	SK1	無文	口縁部			0.8	若干	
	141		無文	口縁部			1.4	若干	内面に右下りキザミを有する
	142		無文	口縁部			0.8	若干	口縁部内外面に斜行キザミを有する
	143		無文	口縁部			1.3	若干	
	144		無文	口縁部			1.0	若干	
	145		無文	胴部			1.2	若干	
	146		無文	胴部			1.2	若干	
	147		無文	胴部			1.5		
	148		無文	胴部			1.4	若干	

第10表 出土遺物観察表⑥

擲図番号	報告番号	出土遺構	遺物種	部位	法量(cm/max)			胎土中の繊維	備考
					口径	胴径	器厚		
第 26 図	149	SK1	無文	胴部			1.2	若干	
	150		無文	胴部			2.0	多	
	151		無文	胴部			1.4	多	
	152		無文	胴部			1.2	若干	
	153		無文	胴部		38.8	1.7	多	内面剥落
第 27 図	154	SK1	押型文	口縁部	17.0		0.8	多	山形文 内面にも山形文を有する
	155		押型文	口縁部	18.6		0.7	多	山形文 内面に二枚貝条痕調整を施すが不鮮明である
	156		押型文	胴部			0.7		山形文 内面に二枚貝条痕調整を施す
	157		押型文	胴部			0.7		山形文 内面に二枚貝条痕調整を施す
	158		押型文	底部			0.8		山形文
	159		押型文	胴部			1.8	多	器種間文渉
	160		押型文	胴部			0.8		ボジティヴ椿円文
	161		押型文	胴部			0.5		ネガティヴ押型文と考えられる
	162		押型文	底部			0.6		格子目文
	164		燃糸文	胴部					外面に 0 段 1 の燃糸文を施す
擲図番号	報告番号	出土遺構	遺物種	部位	法量(max)				備考
					全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	
第 27 図	165		磨石	30	6.8	8.1	2.0	125.4	砂岩製
擲図番号	報告番号	出土遺構	分類	部位	法量(cm/max)			胎土中の繊維	備考
					口径	胴径	器厚		
第 28 図	166	SK2	A1 i	口縁部			1.4	多	
	167		A1 i	口縁部			1.2	多	
	168		A1 i	口縁部			1.1	多	
	169		A1 i	口縁部			1.5	多	
	170		A1 i	口縁部			1.0	多	
	171		A1 i	口縁部			1.2	多	
	172		A1 i	口縁部			1.2	多	焼成前穿孔あり
	173		A1 i	口縁部			1.6	多	

第 11 表 出土遺物観察表⑦

擇図 番号	報告 番号	出土 遺構	分類	部位	法量(cm/max)			胎土中 の繊維	備 考
					口径	胴径	器厚		
第28図	174	SK2	A1 i	口縁部	24.2		1.4	多	口唇部に面取りを施す
	175		A1 i	口縁部			0.7	多	
	176		A1 ii	口縁部	40.6		2.0	多	
	177		A1 ii	口縁部			1.5	多	
	178		A2aII	口縁部	26.4		1.8	若干	
	179		A2aII	口縁部			1.0	微	
	180		A2aII	口縁部			1.5	多	
	181		A2aII	口縁部			1.9	若干	
	182		A2aII	口縁部			1.7	多	
	183		A2aII	口縁部			1.1	若干	
	184		A2aII	口縁部			1.1	若干	
第29図	185	SK2	A2aII	口縁部	30.7		2.4	多	
	186		A2aIII i	口縁部			1.5	微	
	187		A2aIII i	口縁部	12.5		1.0	若干	
	188		A2aIII i	口縁部			0.8		
	189		A2aII r i	口縁部			1.0	微	
	190		A2aII r i	口縁部			1.0	若干	
	191		A2aII r i	口縁部			1.4	若干	
	192		A2aII r i	口縁部			1.4	若干	
	193		A2aIII i	口縁部			1.5	若干	
	194		A2bI i	口縁部			1.5	若干	
	195		A2bII i	口縁部			1.3	若干	
	196		A2bII i	口縁部			1.1	若干	
	197		A2bII ii	口縁部	38.8		1.9	多	
	198		A2bIII i	口縁部			0.9	若干	
	199		A2bIII i	口縁部	36.0		1.3	若干	
	200		A2bIII i	口縁部			1.4	多	
	201		A2bIII i	口縁部			1.2	若干	

第12表 出土遺物観察表⑧

捕獲番号	報告番号	出土遺構	分類	部位	法量(cm/max)			胎土中の機械	備考
					口径	胴径	器厚		
第29回	202	SK2	A2ei	口縁部			0.9	多	
	203		A2ei	口縁部			1.0	多	
	204		A2ei	口縁部			1.5	多	
第30回	205	SK2	A1 ii	口縁部	37.2		1.8	多	
	206		A3i	胴部		37.2	2.4	多	
	207		A3i	胴部			1.9	多	
	208		A3i	胴部			2.3	若干	
第31回	209	SK2	A3i	胴部		27.6	2.0	多	
	210		A3 ii	胴部			2.4	多	
	211		A3 ii	胴部			2.2	多	
	212		A3 ii	胴部	36.4	1.7	多		
	213		A3 ii	胴部	27.0	2.4	多		
	214		A3 ii	胴部	40.2	2.5	多		
第32回	215	SK2	A3 ii	胴部	28.8	1.8	多		
	216		A3 ii	胴部	26.4	2.4	多		
第33回	217	SK2	B1 iv	口縁部		10.2	0.7	若干	ポジティイヴ捺円文
	218		B2a ii	口縁部			0.6	若干	山形文
	219		B2a ii	口縁部	25.2		0.8		山形文
	220		B2a ii	口縁部			0.7	若干	山形文
	221		B2a II i	口縁部			0.6	若干	山形文
	222		B2a II iv	口縁部			0.6		ポジティイヴ捺円文
	223		B2a II iv	口縁部			0.6		ポジティイヴ捺円文
	224		B2a II lvii	口縁部			0.6	若干	格子目文
	225		B2 c ii	口縁部			0.7		山形文
	226		B2 c ii	口縁部	30.8		1.1		山形文
	227		B2 c ii	口縁部	23.6		0.6		山形文
	228		B2 c ii	口縁部	21.8		0.6		山形文
	229		B2 c ii	口縁部			0.6		山形文

第13表 出土遺物観察表⑨

排図番号	報告番号	出土遺構	分類	部位	法量(cm/max)			粘土中の繊維	備考
					口径	胴径	器厚		
第33図	230	SK2	B2 c ii	口縁部			0.6		山形文
	231		B2 c ii	口縁部	32.6		0.7		山形文
	232		B2 c ii	口縁部	24.6		0.8		山形文
	233		B2c iii	口縁部			0.7		ボジティヴ捲円文
	234		B2 c iv	口縁部			0.7		ボジティヴ捲円文
	235		B2 c iv	口縁部			0.6		ボジティヴ捲円文
	236		B2 c iv	口縁部	19.6		0.6		ボジティヴ捲円文
	237		B2 c iv	口縁部	21.0		0.8		ボジティヴ捲円文
	238		B2 c iv	口縁部			0.9		ボジティヴ捲円文
	239		B3 ii	胴部			0.6		山形文
	240		B3 ii	胴部		19.6	0.7		山形文
	241		B3 ii	胴部		21.6	0.8		山形文
	242		B3 ii	胴部		25.8	0.7		山形文
	243		B3 ii	胴部			0.7		山形文
	244		B3 ii	胴部			0.8		山形文。微細な金雲母を含む
第34図	245		B3 ii	胴部			1.0	若干	山形文
	246		B3 ii	胴部			0.8	若干	山形文
	247		B3 ii	胴部			0.8	若干	山形文
	248		B3 ii	胴部			0.7		山形文
	249		B3 ii	胴部			0.7	若干	山形文
	250		B3 ii	胴部			0.5	若干	山形文
	251		B3 ii	胴部			0.7	若干	山形文
	252		B3 ii	胴部			0.6	若干	山形文
	253		B3 ii	胴部			0.7	若干	山形文
	254		B3 ii	胴部	15.0	0.7			山形文
	255		B3 ii	底部	14.4	1.1			山形文
	256		B3 ii	胴部			0.8	若干	山形文
	257		B3 vii	胴部			0.7	若干	山形沈線文

第14表 出土遺物観察表⑩

標図 番号	報告 番号	出土 遺構	分類	部位	法量(cm/max)			胎土中 の繊維	備 考
					口径	胴径	器厚		
第 34 図	258	SK2	B3 vii	胴部			0.7	若干	山形沈繩文
	259		B3 iv	胴部		37.2	0.7		ボジティヴ格円文
	260		B3 iv	胴部		27.2	0.7		ボジティヴ格円文
	261		B3 iv	胴部		17.5	0.8		ボジティヴ格円文 二次焼成繩文
	262		B3 iv	胴部		20.0	0.9		ボジティヴ格円文
	263		B3 iv	胴部		21.6	0.8		ボジティヴ格円文
	264		B3 iv	胴部			0.6		ボジティヴ格円文
	265		B3 iv	胴部			0.7		ボジティヴ格円文
	266		B3 iv	胴部		25.2	0.7		ボジティヴ格円文
	267		B3 iv	胴部			0.7		ボジティヴ格円文
	268		B3 iv	胴部			0.7	多	ボジティヴ格円文
	269		B3 iv	胴部			1.0		ボジティヴ格円文
	270		B3 viii	胴部			0.8		ボジティヴ格円文
	271		B3 viii	胴部			1.0	多	格子目文
	272		B3 viii	胴部			0.7	多	格子目文
	273		B3 viii	胴部		16.8	0.6	若干	格子目文
第 35 図	274		B3 ix	胴部		20.6	0.7	多	外面に 0 段 1 の撚糸文を施す
	275		B3 ix	胴部		12.0	0.6	多	撚糸文
	276		B3 ix	胴部			0.5	多	撚糸文
	277		B3 ix	胴部			0.6	多	撚糸文
	278		B3 ix	胴部			0.5	多	撚糸文
	279		B3 ix	胴部			0.6	多	外面に 0 段 r の撚糸文を施す
	280		B3 ix	胴部			0.8	多	撚糸文
第 36 図	281 282 283		遺物種	法量(max)				備 考	
				残存率 (%)	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	
			石獣	100	1.9	1.2	0.2	0.6	サスカイト製
			石獣	50	1.5	1.0	0.3	0.4	サスカイト製
			石獣	60	1.9	1.8	0.3	1.0	サスカイト製

第 15 表 出土遺物観察表⑪

拝団番号	報告番号	出土遺構	遺物種	残存率(%)	法量(cm/max)				備考
					全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	
第36団	286	SK2	楔形石器	60	3.1	2.5	0.9	7.6	サヌカイト製
	287		石匙	100	2.5	4.2	0.3	38	サヌカイト製
	288		縫石器		12.5	6.8	3.4	400	砂岩製
	289		環状石斧	50	7.1	10.2	2.2	24.7	蛇紋岩製?未成品
	290		磨石	50	6.6	9.8	3.4	280	砂岩製
	291		磨石	100	10.1	8.9	5.2	634	砂岩製
	292		磨石	100	11.5	7.6	5.2	755	砂岩製
	293		磨石	100	12.0	9.6	5.5	850	砂岩製
	294		磨石	100	11.4	6.2	2.6	260	緑色片岩製
	295		石皿	50	18.0	16.1	9.9	3740	砂岩製
第37団	296 297 298 299 300	部位	法量(cm/max)			胎土中の繊維	備考		
			口径	胴径	器厚		同一個体 尖底であるがやや丸みを帯びる		
			無文	口縁部	37.8		1.8	多	
			無文	胴部	32.2		2.1	多	
			無文	胴部		11.4	2.0	多	
			無文	底部		2.0	多		
第38団	301 302 303 304 305	遺物集中6	無文?	胴部		1.8	多		
			無文	胴部		32.1	1.9	多	
			押型文	口縁部	23.0		0.7		黄島式。混入と考えられる
			押型文	胴部		16.2	0.6		山形文
			押型文	胴部		0.6			ボジティヴ輪円文
			無文?	胴部		16.4	0.7		無文土器に有らざる薄さ
第38団	306 307 308 309	遺物種	法量(max)				備考		
			残存率(%)	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)		
			磨石	100	9.4	8.3	4.2	450	緑色片岩製?下端に面取り加工あり
			磨石	30	9.2	5.1	3.3	23	砂岩製 破片
			台石	100?	10.3	8.2	3.6	450	砂岩製 楔形石器の使用痕

第16表 出土遺物観察表⑫

擲回番号	報告番号	出土遺構	遺物種	部位	法量(cm/max)			胎土中の繊維	備考	
					口径	胴径	器厚			
第39回	310	SK 4	無文	胴部			1.4	微		
擲回番号	報告番号		遺物種	残存率(%)	法量(max)				備考	
					全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)		
第39回	311		石鏡	90	1.3	1.0	0.3	0.3	サヌカイト製	
第40回	報告番号	出土遺構	遺物種	部位	法量(cm/max)			胎土中の繊維	備考	
					口径	胴径	器厚			
	312		無文	胴部			1.8	多		
	313		押型文	胴部			0.8	山形文		
	314		沈線文?	口縁部			0.9	若干	外面に山形沈線文と内面に左下りキザミを有する	
擲回番号	報告番号	出土遺構	遺物種	残存率(%)	法量(max)			胎土中の繊維	備考	
					全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)			
第43回	315	SS23	磨石	100?	17.1	10.6	3.6	1310	緑色片岩製	
	316		台石	100?	38.8	29.3	10.5	17500	砂岩製	
	317		石皿	100	24.4	29.4	5.0	4300	砂岩製	
第44回	報告番号	出土遺構	遺物種	部位	法量(cm/max)			胎土中の繊維	備考	
					口径	胴径	器厚			
				口縁部	19.2		1.1	多		
				胴部			1.4	多		
				胴部			1.3	多		
				胴部			1.4	多		
				胴部			1.4	多		
				口縁部			1.1	多	山形文	
				胴部			0.6	山形文		
第45回	325	SK34	押型文	口縁部?			0.4	多	山形文 端部が内湾する	
	326		押型文	胴部			0.7	若干	格子目文	
	327		無文	胴部	48.6	1.4	若干	格子目文		

第17表 出土遺物観察表⑬

擇団 番号	報告 番号	出土 遺構	遺物種	部位	法量(cm/max)			胎土中 の織維	備 考	
					口径	胴径	器厚			
第 46 団	328	SK35	無文	口縁部			0.9	若干		
	329		無文	胴部			1.4	若干		
	330		無文	胴部			1.6	若干		
	331		押型文	口縁部	13.2		0.6	若干	山形文	
	332		押型文	胴部			1.2	若干	山形文 同一個体	
	333		押型文				1.4			
	334		押型文	胴部			0.7	若干	山形文	
	335		押型文	胴部			0.7	若干	格子目文	
擇団 番号	報告 番号		遺物種	残存率 (%)	法量(max)				備 考	
					全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)		
第 46 団	336		磨石	100	14.4	9.2	5.2	1150	緑色片岩製 下端に面取り加工あり	
第 48 団	337	SK36	台石	100	23.1	18.1	6.5	455	一部、被熱赤変 砂岩製	
擇団 番号	報告 番号		遺物種	部位	法量(cm/max)			胎土中 の織維	備 考	
					口径	胴径	器厚			
第 48 団	338		無文	口縁部	41.4		1.7	若干		
擇団 番号	報告 番号	出土 遺構	遺物種	残存率 (%)	法量(max)				備 考	
					全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)		
第 49 団	339	SK25	磨石	100	9.2	7.3	4.6	540	砂岩製 全側縁面取りあり、楔形石器使用度	
	340		石皿	100?	24.1	24.6	5.7	5520	砂岩製	
	341		台石	60	33.9	14.8	9.0	5727	砂岩製	
擇団 番号	報告 番号	出土 遺構	遺物種	部位	法量(cm/max)			胎土中 の織維	備 考	
					口径	胴径	器厚			
第 50 団	342	遺物 集中 20	無文	胴部			1.7	多	同一個体	
	343		無文	胴部			1.6	多		
	344		無文	胴部		36.6	2.0	多		
	345		無文	胴部		37.4	1.9	多		

第 18 表 出土遺物観察表⑭

擲図番号	報告番号	出土遺構	遺物種	残存率(%)	法量(max)				備考
					全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	
第 51 図	346	遺物集中 20	磨石	100	15.5	10.3	4.4	1290	緑色片岩製 側縁に面取り加工あり
	347		石皿	100	18.5	17.8	6.2	2970	砂岩製
	348		台石	100	16.9	20.7	5.2	2850	砂岩製
	349		台石	100?	16.2	23.0	7.5	4450	砂岩製
第 52 図	350	遺物集中 38	無文	腹部	法量(cm/max)			胎土中の纖維	備考
					口径	胴径	器厚		
	351		無文	腹部			21		351 と同一個体 350 は内面剥落

第 19 表 出土遺物観察表⑯

写真図版



調査区全体



東壁セクション

図版2



基層写真



II区4層上面遺物集中群検出状況



遺物集中群1検出状況



4層上面出土遺物及び検出状況

圖版4



SK11-12 完掘状况



SK13 完掘状况



SK14 完掘状况



SK15 完掘状况



SK16 完掘状况



SK17 完掘状况



SK21 完掘状況



SK16・17・22 完掘状況



Pit10 完掘状況

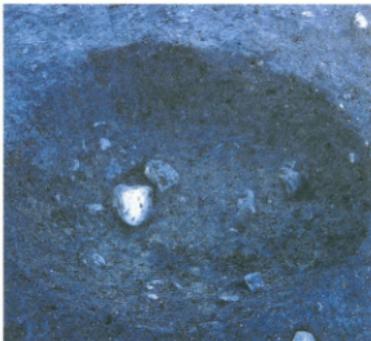


5層上面検出状況

圖版6



SK 2 完掘状況



SK 5 完掘状況



SK 7 完掘状況



SK24 完掘状況



SK28 完掘状況



SK29 完掘状況



SK30 完掘状況



SK31 完掘状況



SK32 完掘状況



遺物集中 23 檢出状況



SK33 完掘状況



SK34 完掘状況

圖版8



SK35 完掘状況



SK36 完掘状況



SK25 完掘状況



遺物集中 20 檢出状況



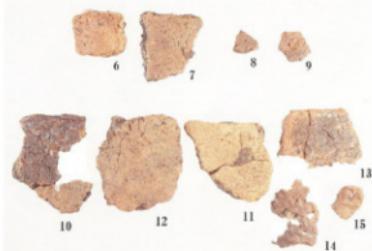
遺物集中 38 檢出状況



SK11 (1)・SK15 (2～5) 出土遺物 表



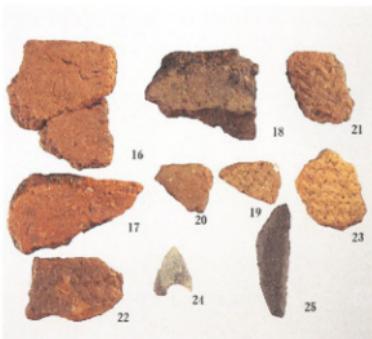
SK11 (1)・SK15 (2～5) 出土遺物 裏



SK16 (6～9)・SK17 (10～15) 出土遺物 表



SK16 (6～9)・SK17 (10～15) 出土遺物 裏



SK19 出土遺物 表



SK19 出土遺物 裏

图版10



遗物集中1



74

遗物集中1 表



遗物集中1 出土遗物 表



遗物集中1 出土遗物 裹



遗物集中1 出土遗物 表



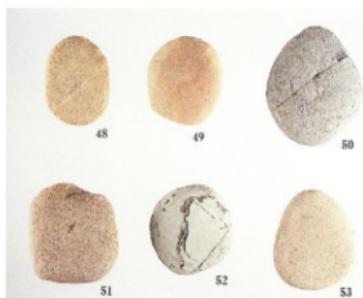
遗物集中1 出土遗物 裹



遺物集中1出土遺物 表



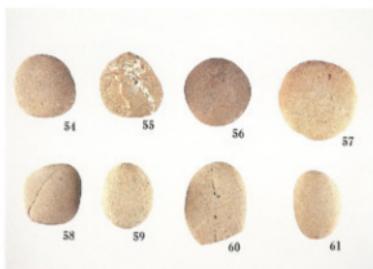
遺物集中1出土遺物 裏



遺物集中1出土遺物 表



遺物集中1出土遺物 裏



遺物集中1出土遺物 表



遺物集中1出土遺物 裏

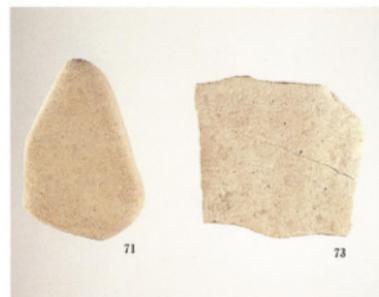
圖版12



遺物集中1出土遺物 表



遺物集中1出土遺物 裏



遺物集中1出土遺物 表



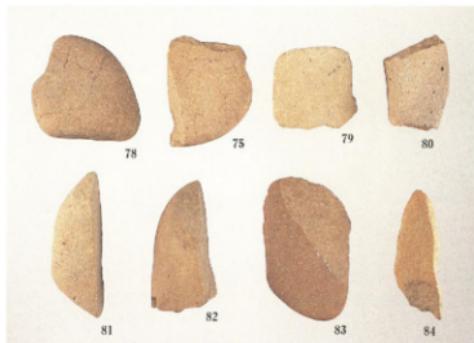
遺物集中1出土遺物 裏



遺物集中1出土遺物 表



遺物集中1出土遺物 裏



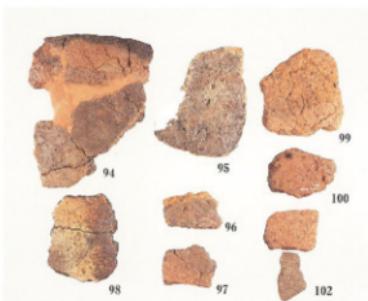
遺物集中1出土遺物



遺物集中2出土遺物 表



遺物集中2出土遺物 裏



遺物集中3出土遺物 表



遺物集中3出土遺物 裏

圖版14



遺物集中3出土遺物 表



遺物集中3出土遺物 裏



遺物集中3出土遺物 表



遺物集中3出土遺物 裏



遺物集中3出土遺物



遺物集中3出土遺物